

まほプリ結晶狩人：長番
外編 閃乱忍忍忍者大
戦ネプテューヌ—少女
達と結晶の狩人の響艶

—

ドツカン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日坂田一馬は、異世界押し入れから聞こえて来た声の主を助けるために、異世界へと向かった。そこは幻次元、無数の忍者と流派が存在する戦乱の世、幻影夢忍界（げいむにんかい）であった

これは「魔法つかいプリキュア！伝説の魔法つかいと水晶に選ばれし狩人（ハンター）」の番外編です

主人公が変身／装着するもの（もしかしたら今後増える予定）

モンスターハンターシリーズ

仮面ライダーシリーズ

武器や技等

モンスターハンターシリーズ

仮面ライダーシリーズ

ファイナルファンタジーシリーズ

追記

原作名を変更いたしました

目次

一ノ卷

二ノ卷

三ノ卷

四ノ卷

五ノ卷

六ノ卷

七ノ卷

八ノ卷

九ノ卷

十ノ卷

十一ノ卷

十二ノ卷

1

11

20

26

33

40

55

63

69

77

88

96

十三ノ卷

十四ノ卷

十五ノ卷

十六ノ卷

十七ノ卷

十八ノ卷

十九ノ卷

二十ノ卷

二十一ノ卷

二十二ノ卷

二十三ノ卷

二十四ノ卷

二十五ノ卷

106

113

124

133

141

152

160

171

181

189

197

205

211

二十六ノ卷	219
二十七ノ卷	228
二十八ノ卷	239
二十九ノ卷	244
三十ノ卷	254
三十一ノ卷	262
三十二ノ卷	268
三十三ノ卷	275
三十四ノ卷	284
三十五ノ卷	290
三十六ノ卷	303
三十七ノ卷	310
三十八ノ卷	317

三十九ノ卷	322
最終ノ卷 前編	331
最終ノ卷 中編	342
最終ノ卷 後編	355

一ノ巻

一馬「はあ……何だったんだろうか……あの声は……」

オレの名前は坂田一馬、まー何処にでもいるゲーム大好きガンブラ大好きな中学二年生……というのは建前、本当は伝説の戦士「プリキュア」達と共に戦う戦士だ。戦士名？んなもんねえよ本名を名乗ってる……まあ一応、モンスターハンターとも名乗ってるけどな。で、今何で悩んでいるのかというのだ……昨日、みらいが作ってくれた飯を……ああ、みらいっていうのはオレの彼女の一人、そう、沢山いるんだよ、彼女は……でもオレは、アイツが一番、一番っ！大切な人なんだ。みらいが作ってくれた飯を食べに行こうと下へ降りようとした時、謎の声が聞こえたんだ「……け……て……」と

クリスタル『やっぱりお前の気のせいじゃ無いのか？』

机の上にある喋る石、こいつはリンクルストーン・クリスタル、オレの一番の相棒だ。オレはこいつのお陰で、プリキュアと一緒に戦っている。こいつが無いとオレはただの14歳さ。こいつには能力があるのだが能力は……ま、後でいいか

一馬「そうは思わないんだよなあ……絶対」

すると

？「…………… けて…………… さい……………」

声がかすかに聞こえた

一馬「っ?!クリスタル！」

クリスタル『ああ、我にも微かに聞こえたぞ。あの押し入れからだ』

クリスタルの言うあの押し入れとは、窓側の隅っこにある押し入れのことだ。この押し入れは、異世界とこの世界を繋ぐゲートになっている…………… オレ達は、この押し入れを「異世界押し入れ」と呼んでいる。そこから聞こえて来たことは……………

一馬「マークが増えている……………」

この異世界押し入れは、誰かが前に立つとマークが浮き出る仕組みになっている。昨日までマークは2つあったんだが…………… 新たに手裏剣マーク、まあ詳しく言うと手裏剣と電源ボタンのマークが重なったようなマークが追加されていた

「助けてくださいー！」

っ！今度はハッキリと聞こえたぜ！

クリスタル『どうやら、助けを呼んでいるのはこのマークの世界からかもな…………… どうする？』

一馬「決まってるだろ、行くしかねえ！っと言いたいが…………… mirai 達に相談しない

とな」

そしてオレはみらい達を呼んでみんなに話した

一馬「と言うわけだ、オレはこの手裏剣マークの世界へ向かおうと思う」

みらい「いま………なんて言いました？」

朝日奈みらい オレの一番大切な人、キュアミラクルに変身する

リコ「何が………と言うわけだ、よ！嫌よ！あなたが居なくなるなんて！」

十六夜リコ 日本人じゃなく、魔法界つて異世界から来た魔法使い、キュアマジカルに変身する

ことは「一馬居なくなったら嫌！」

花海ことは こいつは人間じゃなく、妖精が人間になった存在、みんなからははーちゃん と呼ばれている（オレはチビって呼んでた。恥ずかしいから）キュアフェリーチエに変身する

モフ美「モフルンも嫌モフ！」

朝日奈モフ美 朝日奈家の養子……… というのは建前で、本当はみらいが生まれた時からずっと一緒にいるぬいぐるみが奇跡の力で喋れるようになり、更に人間になった。キュアモフルンに変身する。この四人がオレが主に一緒に戦ってる「魔法つかいプリキュア」だ

一馬「そうか……」

ちなみに、他にもオレの家に居る居候が7人居るんだが………
生憎今は出かけて
いる………

一馬「でも、オレは助けに行きたいんだ！その世界へ！」

みらい「行くんだつたらわたし達も行くよ！」

一馬「ダメだ！お前らを危険な目に遭わせたくねえ！」

リコ「危険な目について………
あなたの方が心配なのよ！」

一馬「………」

リコ「危険な目に遭わせたく無いってカツコつけて………」

みらい「………
良いよ」

リコ「へ？」

え？

一馬「みらい………」

みらい「そのかわり、これだけは約束して………
必ず帰ってくること！」

一馬「………
ああ！」

みらい「じゃあこれ」

みらいは小指を出した………
ああ、指切りか。オレも小指を出した

みらい「ゆびきりげんまんうそついたらはりせんぼんのーます！ゆびきった！」

今更だが、なかなかエグいなこの歌は

みらい「それと、んっ……………」

今度は唇にキスして来た……………」

みらい「っはあ…………… えへへ、これで約束できたよ。後はリコとはーちゃんとモフ

ルンもやろう！」

一馬「お、おう……………」

そしてオレは他の3人にも指切りとキスをされた

一馬「じゃあ、行ってくるぜ」

リコ「ええ……………」

一馬「クリス達が帰ってきたら伝えとつてくれよ。後はやよい達、あきこにネプテューヌ達にめぐみん達それと、月光達にも伝えとつてくれ」

ことは「任せて！」

一馬「あ、大吉さん達や学校のみんなには上手く誤魔化しとつてくれ」

モフ美「分かったモフ！」

一馬「じゃ……………」

オレは光っている手裏剣マークに触れた。すると押し入れの戸が開いた。戸の先は

白い光だけが見えている……………

一馬「じや、行つてくるぜ。クリスタル行くぞ！」

クリスタル『ああ！』

オレは押し入れに勢いよく走つて入った。入った後、後ろを振り向くと、そこには真つ白い光しか見えなかった……………

一馬「戻れない……………か」

クリスタル『この先の世界で大きなことをやれば戻れるかもな』

一馬「かもな。行くぜ！」

オレは走つた。しばらく走っていると、森へ出た……………

一馬「ここは……………森か？」

クリスタル『そのようだな』

だったら、とりあえず、人里へ行かないとな……………

クリスタル『ここは未開の地だ、我のナビゲートは最低限しか無いと思え。例え

ば……………敵とかな』

一馬「いるのか？」

クリスタル『ああ、モンスタータイプがいるな……………どうする？』

一馬「隠れながらやり過ぎして、見つかったら……………」

クリスタル『見つかったら?.....』

一馬「どうにかする」

クリスタル『おいおい.....』

一馬「とにかく、人里まで行くぜ」

オレは姿勢を低くして、音を立てずに歩いた。モンスターは見かけた。だが一部のモンスターが何故か、ネプテューヌの世界、つまりゲームギョウ界のモンスターと同じ姿をしていた。まあ何故かお札が貼られてたりと差別できる箇所はあったが.....で今は.....

?「ブルル.....」

武者鎧を着て、大斧を背負ったミノタウロスみたいな奴の近くの茂みに隠れている..... 何だよアイツ、いかにもボスって見た目じゃん

クリスタル『見るからにパワータイプだな.....』

何分析してんだかさっさと過ぎ去ろう..... その時だった

「バキッ!」

ミノタウロス「!?!」

まさか..... しまったー!?!枝踏んじまったよ..... うわーこつちをまじまじと見てる

一馬「……………」

ミノタウロス「フゴー！」

ミノタウロスは突然咆哮した

クリスタル『むむつ、奴の言葉を翻訳できるぞ……………』

へ？

クリスタル『奴はああ言っている』

ミノタウロス『人間は許さん』

完全に敵意剥き出しだ

一馬「やつべー、この世界での初エンカウントがどう見てもボスっぽい奴とか……………」

どうしょ

クリスタル『どうするとこうするも無いだろう、逃げるか戦うかだ』

一馬「えー、でもなー」

ミノタウロス『クソツ！独り言を喋って無視しやがって！これだから人間は嫌いなん

だ！』

あいつ構ってちゃんかよ!?……………しゃーない、構ってやるとするか。クリスタル、

いきなりだが……………今回は仮面ライダーで行くぜ！

一馬「さて、やるとしますか」

クリスタル『変身するのは決まってるのか？』

ああ、ショットライザーとシューティングウルフを。そしてオレの右手に、ショットライザー、左手にシューティングウルフプログラムライズキーが現れた。バックルは……… 出してないだとい！？

クリスタル『心配するな、ちゃんと後で出す』

後で……… なるほどね

ミノタウロス『何だ？』

《《ショットライザー！》》

そしてキーのボタンを押した

《《バレット！》》

そのままショットライザーにセットした、流石に本家みたいにゴリライズはしない。

ここからはオレ式だ

《《Authenticate Kamen Rider.:. Kamen Rider.:.》》

何かと特徴的な待機音が鳴り響く中、左手でキーを展開してショットライザーを構えた。ここまではオレ式だ

一馬「変身ッ！」

《《ショットライズ！》》

そう叫んでトリガーを引いた。1発の弾丸がミノタウロスに向けて放たれた
 ミノタウロス「フゴツ!」

ミノタウロスは背中の大斧で弾き返したそしてそのまま返ってきた弾丸は……
 一馬「はあ!」

本家と同じく左パンチで破壊した。砕かれた弾丸は鎧の形となってオレに装着され
 た

《シューティングウルフ! The elevation increases as
 the bullet is fired》

オレは仮面ライダーバルカンに変身した

ミノタウロス『何者だ! お前!』

一馬(バルカン)「仮面ライダー………バルカンツ! さあ、行くぜ、ミノタウロス!
 牛鬼『ミノナントカという名前では無い! 牛鬼だつ!』

そうかい、牛鬼か

一馬(バルカン)「だつたらもう一度………さあ、行くぜ、牛鬼!」

こうして、オレVS牛鬼の戦いが始まった

二ノ巻

牛鬼『喰らえ!』

牛鬼は大斧を構えながら向かって来た

一馬(バルカン)「っ!」

オレはシヨットライザーを腰のバックルに装着して、両手で受け止めた

牛鬼『何!?!』

一馬(バルカン)「オラっ!」

牛鬼「フゴツ!」

そのまま牛鬼を蹴って怯んだ隙に。大斧から手を離して……

一馬(バルカン)「オラオラオラオラ!」

パンチを数発お見舞いして

一馬(バルカン)「でいやあ!」

最後に蹴り飛ばした

牛鬼『うおおお!』

牛鬼は壁に激突した

牛鬼『お前のどこにそんな力が………』

一馬（バルカン）「おっと、教えないぜ。ほらよ！」

シヨットライザーを構えて牛鬼に目掛け3発撃った

牛鬼「ブルツ!？」

牛鬼は大斧で防いだ………

牛鬼『ふははは！そんなへなちよこ攻撃！簡単に防げるわ！』

一馬（バルカン）「へえ……… だったら」

オレはプログライズキーのボタンを押した

《バレット！》

待機音が鳴る中、シヨットライザーを両手で構えた……… その大斧ごと撃ち抜く！

一馬（バルカン）「行け！」

トリガーを引くと、巨大な弾丸が放たれた

牛鬼『さつきよりは派手だが……… 防いでやるわ！』

牛鬼はさつきのように大斧を構えた。そして弾丸と大斧はぶつかり合った

牛鬼『うおおお!!』

次第に大斧にヒビが入っていき………

《バレット！シユータイングプラスト！》

弾丸は斧を粉碎し、そのまま爆発した

牛鬼『フゴオオオ!?!』

一馬（バルカン）「……………」

黙って見ていると、爆煙から牛鬼が現れた。やるじゃねえか

牛鬼『くそっ！せっかくの武器を壊しやがって！俺の相棒だつんだぞ！』

相棒だったのか……………」

一馬（バルカン）「そいつは悪いことをしたな」

牛鬼『もう許さあああん!!』

牛鬼は頭を前に突き出して突進して来た。今度こそフィニッシュだ。オレはシヨツ

トライザーを腰に装着してからボタンを押した

《バレット!》

今度はそのままトリガーを引いた

《シューティングブラスト!フィーバー!》

一馬（バルカン）「はああああ……………」

銃口から青い狼が発射され右足に宿り、青いオーラを纏った

牛鬼『何をしようと思駄だあ!ぶっ潰してやる!』

オレも牛鬼に向かって走った。そして飛び上がった

一馬（バルカン）「セイハーツ！」

右足で回し蹴りをした。その瞬間、狼が前足で吹き飛ばしたように見えた

牛鬼『フゴオオオオオオ!?!』

今度はバゴーン！と音が鳴って木々が薙ぎ倒された

《バレット！シューティングブラスト！ファイバー！》

牛鬼「フ……フゴ………」

そして牛鬼は消滅した

一馬（バルカン）「ふう…… 今度はいい奴に生まれ変われよ。またな」

最初遭遇した時の言動を聞いた感じ、アイツは元々いい奴だったのかも……人に迫害されてあんな風に……

クリスタル『お疲れ様』

一馬（バルカン）「ああ、サンキュー………」

クリスタル『今すぐ休憩…… と言いたいが、お前の戦いは見られていたぞ。しかも驚くべきことに……』

一馬（バルカン）「？」

？「ねえ、そのあなた」

ん？後ろから何処かで聞いたような声が…… 後ろ振り向くとそこには

一馬（バルカン）「っ!？」

何と後ろには……………女神化したネプテューヌ達がいた。何で!?!いや、服装が違
う……………と言うことは……………異なる次元のネプテューヌ達か!て事はなるほど、ここ

はオレの知らない次元のゲームギョウ界ってことか

パープルハート「あなたがヌシと戦っているのは見させてもらったわ」

ブラックハート「と言っても途中からだけだね」

ホワイトハート「てめえ、まさかスチーム・レギオンの手先か!」

はい? スチームレギオン?

グリーンハート「確かに……………見た目は何処となく似てますわね」

おお、こつちのベールさんは露出が控えめ……………それでもエロいが……………じゃなく

て!

一馬（バルカン）「ちよつと待て! スチーム・レギオンって何だ!？」

ホワイトハート「お前はスチーム・レギオンじゃ無いって言うのか!」

さつさと変身を解かないと。オレはシヨットライザーからシューティングウルフを

引き抜いて、変身解除した

一馬「……………」

パープルハート「子供!？」

ブラックハート「今のつて、この子が変身してたの!？」

グリーンハート「弟にしたいですわ……………」(小声)

ホワイトハート「何か言ったかベール?」

グリーンハート「何でもございませんわ」

おい聞こえたぞ、どの世界でも根は一緒なのか!?この人は

パープルハート「ねえ、あなたの名前は?何処から来たのかしら?服装を見た感じ波戸ノ国(はとのくに)の人間じゃ無いみたいだけど……………」

ブラックハート「もしかして……………磨愛辺国(まあべこく)の人間?」

はとのくに?まあべこく?ここはゲームギョウ界じゃ無いの?

グリーンハート「磨愛辺国の人間でしたら不味いですわね、折角の親書が……………」

ホワイトハート「おい!ベール!何バラしてんだよ!」

グリーンハート「……………はっ!わたくしとしたことが!」

一馬「またまたちよつと待て!波戸ノ国?磨愛辺国?聞いたことないんだけど!」

4人「……………へ?」

ブラックハート「聞いたことないですつて!」

パープルハート「待ってノワール、もしかしてあなたは……………此処とは異なる世

界から来たのかしら?」

3人「っ!？」

鋭い!

ブラックハート「ちよつとネプテューヌ!この子にそんな言い掛かりは……………」

一馬「ああ、あんたの言う通りオレは…………… 此処とは違う世界から来た」

3人「っ!？」

ホワイトハート「嘘だろ!？」

一馬「本当だ」

グリーンハート「まあ……………」

パープルハート「やつぱり、主人公としての勘は当たっていたわ!見慣れない武器、見慣れない服装、間違いなく異世界から来た人だつて」

しゅ、主人公の勘つて…………… てかそんなので判断していいのか

ブラックハート「はあ…………… 確かにアレを見たら、信じるしかないわね。ねえ、あなたが異世界から来たとして、何処へ行こうとしてたのよ」

一馬「人が住んでるところ……………」

グリーンハート「でしたら、この先に磨愛辺国がありますわ。わたくし達もある用事で磨愛辺国に行く途中でしたのよ」

一馬「親書…………… でしたっけ?」

グリーンハート「何故分かりましたの!？」

一馬「さつき自分で言つてたじゃないですか」

グリーンハート「…………… あ。コホン、それはともかく、わたくし達と一緒に行きませんか？」

ホワイトハート「おい!こんな得体の知れない奴と一緒にいか!？」

得体の知れない奴つて……………

グリーンハート「まあまあ良いじゃないですよ、せつかく出会つたんですし」

一馬「良いんですか？」

グリーンハート「ええ」

此処は甘えとくか……………

一馬「じゃあ…………… お言葉に甘えて……………」

グリーンハート「決まりですわね」

ブラツクハート「はあ、仕方ないわね。えーつと……………」

一馬「坂田一馬、歳は14歳」

パープルハート「坂田一馬…………… ね、わたしはネプテューヌ、ぷらねの里の頭目をやっているわ」

女神じゃなくて、頭目なの…………… てか里なんだな、国じゃなくて…………… じゃあ、国

の偉い人は誰なんだ？

ブラックハート「わたしはノワール、らすての里の頭目よ」

ホワイトハート「ブラン、るういーの里の頭目だ」

里の名前がそのまんまだな……

グリーンハート「わたくしはベールです。リーンの里の頭目をやっていますわ。それにしても14歳……。アリですわ」（それにしてもから小声）

パープルハート「さて、磨愛辺国へ行くわよ」

こうしてオレはこの世界のネプテューヌ達と共に磨愛辺国とやらへ行くことになった

三ノ巻

今オレはこの次元のネプテューヌ達と一緒に森を歩いている

ブラックハート「さて、この森を抜ければ磨愛辺国よ。まずは宿場町、そこを抜ければ城下町でお城ね」

宿を取らないとな……最悪の場合野宿だな

グリーンハート「みなさん、此処からは変身を解いて行きませんか？わたくし達は親書を届けに来ているのであって、争いに来たわけではありませんから」

そういえば、歩いてる時に教えてくれたな、スチーム・レギオンとかいう奴らに対し、一緒に戦う為に対立している磨愛辺国、そのダイミョウザ……大名に波戸ノ国の大名が書いた親書を渡す任務だって、その途中でオレに遭遇したつと。てか、やつば変身してるんだな

ホワイトハート「それもそうだな、刃仁破流（はにぱりゆう）ならわたし達の正体を知ってるだろうが、襲撃に来たと思われたら面倒だ」

あー、その姿は有名なのね

ブラックハート「流石ベール。ゲーム以外では大人で頼りになるのよね」

ああ、やっぱり廃人なのか……………

グリーンハート「あら、それは違いますわ。ゲームでも頼れるのがわたくしです」
 どうだか……………

パープルハート「一馬、変身を解いてって言葉が気になってるわよね？」

一馬「あ、いやその……………」

パープルハート「今見せてあげるわ」

すると、4人は光に包まれ、光が収まると。そこには…………… 3人の少女と、1人の

女性がいた。服装は違うが…………… 見慣れた4人だ

ネプテューヌ「じゃじゃーん！これが変身を解いた姿だよ！」

一馬「…………… 知ってる」

ノワール「知ってる!？」

ブラン「どう言うこと？わたし達と一馬は初対面のはずよ……………」

一馬「言おうとしたんだけど、チャンスが無くてな…………… この際言つとくか。オレは

別の世界のあんた達と知り合いだ」

ネプテューヌ「ねぷう!?! そうだったの!？」

ベール「まあ…………… 他の世界にもわたくし達はいるのですね！」

ノワール「だからさつき、知ってるって言ったのね……………」

ブラン「別世界のわたし……どんなのかしら……」

ネプテューヌは一応大きい方がいるから区別はつく……いや、あの人抜きだと、

ノワール達みたいに服装で区別しないとダメだな

ネプテューヌ「まーまー、こういうのは。スチーム・レギオンとの戦いが終わってからにしようよ！」

ブラン「確かに……ネプテューヌにしては良い判断ね」

そういえば、戦いが終われば、オレは帰れるのだろうか……あ、そうだ！クリスタル。向こうと通信は？

クリスタル『それが、さっきからやっているのだが……繋がないんだ』

何!?

クリスタル『こう言うアクシデントは初めてだ……』

そうか……

ノワール「何か言ったかしら？」

一馬「いや何も言っていないが？」

ノワール「そう……さて、行くわよ！」

そしてオレ達は森を抜け、磨愛辺国とやらに着いた。おお、見た目は薄々感じていたが、和風チックだな

ネプテューヌ「磨愛辺国とーちゃーく!..... あれれ? 久しぶりに来たけど大きくなつてない?」

ブラン「ええ、波戸ノ国よりも大きい。磨愛辺国にはルーンを使った工場があつたり、マキナに巨大メカも研究されてるわ」

おお、見た目は和風なんだけどそんな技術が..... ちよーつと銀魂っぽいな

ベール「他にもミュージカルなどのイベントや、ジェットバイクの競技があつたりと、娯楽に力を入れているので、みんな楽しんでみたいですわ」

ノワール「本当に侮れないのは、近くの島で行われてるらしい、牧場やお米作りでしょ。かなりの人気みたいね。産業が多くて隙が無いわ」

一馬「すっげえ.....」

ネプテューヌ「ねぶ!? なんてみんなそんなに詳しいの? さてはこっそり忍んで遊びに行つてるとか.....」

ノワール「敵を知るためには当たり前でしょ! ネプテューヌが知らないだけよ。つと、一馬はこれからどうするの?」

一馬「そうだな..... オレは観光するか」

ベール「でしたら、集合場所は此処でよろしいですわね」

一馬「ええ、んじや!」

ベール「迷子になったらダメですわよ！」

オレは走った。クリスタル。場所は記憶したな

クリスタル『ああ、問題ない』

ネプテューヌ達、無事に親書を届けられるだろうか……しつかり、見れば見るほど和風だな……しばらくぶらぶらしていると、事件は起きた

「ドカーン！」

一馬「何だ？爆発!？」

クリスタル『どうやら、敵らしいな』

するとオレの前にロボットの忍者？みたいなのが数体現れた

機械忍者「ミッシヨン、市街攻撃、抵抗レベルミニマム。フェーズ進行……ノ

プログラム」

すると、機械忍者達は街を攻撃し始めた。オレが黙って見てるとでも？

一馬「……………行くぞ、相棒」

クリスタル『ああ』

オレは頭の中で武具を思い浮かべた……………今回は、ゴアで行くぜ！

一馬「装着！」

オレは黒い粒子に包まれた。そして黒紫の鎧に黒紫の大剣を背負った姿になった

機械忍者「エネミー反応検知、アンノウンと断定。これよりアンノウンとの交渉を開始する」

一馬（ゴアシリーズ）「何だ？話し合いか？」

機械忍者「我々はスチーム・レギオン」

こいつらがスチーム・レギオン!?

機械忍者「アンノウンに通告する。選べ、降伏か、滅亡か」

降伏か滅亡かだと？そんな答えは決まってる

一馬（ゴアシリーズ）「は、嫌だね？逆にてめえらをぶっ潰してやるぜ！」

オレは大剣、プライドofシヤドウを構えた

機械忍者「交渉決裂。アンノウン、デストロイ開始」

機械忍者達は武器を構えてきた

一馬（ゴアシリーズ）「上等だ……… テメエらみたいな奴らは……… 全部屑鉄に変えてやるよ！」

四ノ巻

機械忍者（刀）達「デストロイ」

刀を持った機械忍者が一齐に襲いかかって来た。まずコイツらに構ってる暇は無い。真つ先に仕留めるのは

一馬（ゴアシリーズ）「はあ！」

機械忍者（銃）「デスト……グッ」

ガンナーからだ！

一馬（ゴアシリーズ）「お前らもだッ！」

オレは銃持ちを次々と倒した

一馬（ゴアシリーズ）「よし、ガンナーは潰した……残りはてめえらだ！」

オレはプライド of シヤドウを構えた。プライド of シヤドウが黒く輝いた

一馬（ゴアシリーズ）「やあ！」

機械忍者達「ギャー」

そのまま横に薙ぎ払い、周囲の機械忍者を倒した。というか、この機械忍者共、どう見ても忍者って呼ぶには程遠い見た目だな

一馬（ゴアシリーズ）「これで終わりか……」

クリスタル『一馬、おかしいとは思わないか？。こいつらはなぜこの宿場町を襲ったのか……』

……：……：　　「そういやノワールが言ってたな宿場町を抜ければ城下町、そして城……：……：　　「そう言うことか！」

一馬（ゴアシリーズ）「ゴイツらは囷か……：……：　　とすると敵の狙いは……：……：」

オレは屋根の上に登った

一馬（ゴアシリーズ）「城だな……：……：　　今すぐ飛んで行きたいとこだが……：……：　　まずは城下町からだ、見た感じ城下の方が被害が大きい……：……：　　行くぞ」

オレは黒いオーラを纏い、城下町へ向かって飛んでいった。道中、空中から宿場町で暴れている機械忍者、それとスライム（ゲイムギョウ界におけるスライムみたいなもの、スライムに犬耳と尻尾が生えている）みたいなのを倒していった。あのスライムは多分スチーム・レギオン配下だな。しばらく飛んでいると……：……：　　ネプテューヌ達が、ガトリングを持った大きなロボットに襲われていた。あれもスチームレギオンか！ん？あそこにもう一人……：……：　　っ?!嘘だろ!?!でもとにかく助けないと！クリスタル！ビジョン of ロストを

クリスタル『分かった！』

一馬（ゴアシリーズ）「狙い撃つ……… ダークシユート！」

オレは黒いオーラを纏った矢を撃ったそして、その矢は

「終わり……… ギャー!?!」

奴の頭部を貫いていた

パープルハート「な、何!?!」

ブラックハート「矢!?! 何処から!?!」

一馬（ゴアマガラ）「大丈夫か? みんな」

オレは降り立った

ホワイトハート「新手か!?!」

グリーンハート「一馬くん!」

お、ベールさんは気づいてる

ホワイトハート「はあ!?! コイツが一馬!?!」

一馬（ゴアシリーズ）「鋭いなあ〜ベールさんは……… 一馬だよ」

パープルハート「よく聞いたら声は一馬ね」

ブラックハート「あなた……… 森で見た白と青の姿になれば良かったじゃない!」

一馬（ゴアシリーズ）「ああ、あれはただの気分転換だよ」

ブラックハート「気分転換!?!」

? 「あ、あの……」

うおつ、やっぱり近くで見ると……写真で見たことがある!

? 「ねぷちゃん、この黒い鎧の人は誰なの?」

パープルハート「安心してあすちゃん、彼は味方よ。一馬、紹介するわ。磨愛辺国の刃仁破四忍の一人、あすちゃんこと飛鳥よ」

飛鳥さん……向こうでは、会った事はないが、月光や閃光から聞いたことがある……あと写真も見せてくれたな……

飛鳥「初めまして、飛鳥です!」

一馬(ゴアシリーズ)「ど、どうも。坂田一馬です」

グリーンハート「さて、一馬くんも来てくれましたし、お城へ向かいましょう」
ネプテューヌ達も城目的か……

一馬(ゴアシリーズ)「分かりました!」

飛鳥「はい!こっちです!」

オレ達は飛鳥さんの案内で城へ向かった。その途中で

機械忍者団長「いいかみんな!シエアクリスタルは我がスチーム・レギオンの為、どうしても必要だ!磨愛辺国の者たちは、シエアクリスタルの力を溜め過ぎているとのマスターのご判断だ」

FFシリーズに出てくる暗黒騎士っぽい風貌の人物が、機械忍者達に命令していた。アレも忍者なのか？ どう見ても暗黒騎士なんだが……

機械忍者団長「我々はスチーム・レギオンの黒い翼だ！ マスターの命令は、絶対なのだ……」

おい、どこのセシル・ハーヴィだよ

機械忍者達「イエスッ！」

ホワイトハート「なんだあいつ……一人だけ一馬と似たような格好をしてるけど、ここにいる機械忍者たちの親玉か？」

グリーンハート「確かに似てますわね……」

一馬（ゴアシリーズ）「二緒にしないでくれ……」

まあ確かにゴアシリーズはどのデザインも暗黒騎士っぽい見た目だが

グリーンハート「それは置いときまして……そのようですわね。他の機械忍者に指示を出しているみたいですし、雰囲気の違いで分かりますわ」

ブラックハート「なんか忍者っぽくないわね。スチーム・レギオンはみんな忍者っぽくないけど、あいつは更に違うわ」

パールハート「そうかしら？ 見た目で判断するなんてナンセンスよ、それを言ったら他の忍者達から怒られるわ」

ああ、月光や閃光も一見したら忍者っぽく無い見た目だしな……

ブラックハート「それもそうね、たまにはまともな事も言うのね。あいつ、指示を出してるって事はリーダー格よね。見つけられたのはラッキーだったわ」

一馬(ゴアシリーズ)「んじゃあ、あの暗黒騎士忍者を倒しますか。倒せば他の奴らは慌てるはずだしな」

飛鳥「あ、暗黒騎士忍者？」

一馬(ゴアシリーズ)「ああ、あいつの見た目が、暗黒騎士っていう騎士が装備してるのに似てますから」

騎士っていうか、ジョブだけどね

ホワイト「ならお前の鎧も暗黒騎士の鎧って事か？」

一馬(ゴアシリーズ)「いやこの鎧は暗黒騎士というか……そんなことよりやろうぜ」

パープルハート「ええ、街を破壊するなんて許せない！後でみんなと観光しようと思っていたのに……」

一馬(ゴアシリーズ)「オレもまだ完全に観光は出来てないしな……」

飛鳥「そうだったんですね。あそこのお団子屋さんでみなさんと一緒に食べたかったな……」

団子か…… 良いかも。そしてオレ達は暗黒騎士忍者の前に出た

一馬（ゴアシリーズ）「おいつ！その暗黒騎士！」

機械忍者団長「暗黒騎士とは、私のことか？貴様らは、磨愛辺国のN I N J A達か。ならば一つ言っておこう」

何で忍者だけ英語なの？っていうかオレ忍者じゃねーし

機械忍者団長「我らスチーム・レギオンは、N I N J Aなら雇用相談無料！仲間になるなら殺しはしない」

勧誘だと？街を破壊してでもか？

飛鳥「忍と戦うのではなく町を破壊する…… そんな卑怯者の仲間になる気はなりません！」

機械忍者団長「人ではなく町を壊すか…… その優しさ、甘さが分からぬか！ならば仕方ない」

すると暗黒騎士忍者は長剣を出した

機械忍者団長「我が暗黒剣と忍術『暗黒』を受けてみる！」

やっぱり暗黒騎士じゃねーか！

五ノ巻

ブラックハート「相手はリーダー格の忍者、ある程度覚悟して挑むわよ！」

一馬（ゴアシリーズ）「おう！」

飛鳥「はい！私達の町を……こんなにした事は絶対に許しません！」

パープルハート「あすちゃん、わたしも同じよ。それにまっくーるの事も気になるわ」
まっくーる？ 誰だ？

一馬（ゴアシリーズ）「ま、まっくーる？」

パープルハート「あ、まっくーるって言うのは……」

機械忍者団長「無駄話をしてる場合か？」

暗黒騎士忍者は切り掛かって来た。しまっ！

一馬（ゴアシリーズ）「はあ！」

オレは、咄嗟に抜刀して奴の攻撃を防いだ。ふう、危ねえ危ねえ……

機械忍者団長「むっ!？」

一馬（ゴアシリーズ）「ネプテューヌ！その話はこれが終わった後な」

パープルハート「分かったわ」

グリーンハート「お覚悟！」

ホワイトハート「貰った！」

ブランとベールさんが後ろに回って攻撃を仕掛けた。だが機械忍者団長「甘い！」

突然奴は消えた

一馬達「っ!？」

どこへ消えた……………

機械忍者団長「ふん！」

奴はブランとベールさんの後ろに現れて、切り裂いた

ホワイトハート「うわっ!？」

グリーンハート「きやっ!？」

機械忍者団長「惜しかったな……………」

一馬「ブラン！ベールさん！大丈夫か！」

ホワイトハート「ああ……………」

グリーンハート「大丈夫ですわ……………」

ちい、まさかの瞬間移動持ちかよ……………

ブラックハート「みんな！行くわよ！」

ノワールの合図でオレ達は一斉に飛びかかった

機械忍者団長「見せてやろう。我が忍術を！はあああつ！暗黒！」

長剣が黒く輝き、奴が構えた瞬間、黒い衝撃波が飛んできた

一馬（ゴアシリーズ）「ぐあつ!？」

パープルハート達「きゃああああ!？」

オレ達はその衝撃波をまともに喰らって吹っ飛ばされた

パープルハート「これが暗黒……………」

ブラックハート「なんて威力……………」

一馬（ゴアシリーズ）「確かに強い……………が、奴は体力を消耗したはずだ……………」

ホワイトハート「なんでそんなことが分かるんだよ……………」

一馬（ゴアシリーズ）「似たような技を知ってるからな……………ゲームでだが」

グリーンハート「まあ、ゲームの……………気になりますわね」

機械忍者団長「ほう、そのNINJA、暗黒を知っているようだな……………だが疲

れは感じないぞ」

そうだった、機械忍者だった。機械だから疲れ知らずか

機械忍者団長「ふむ、よく見れば見た目が私と似ている……………もう一度問おう、我ら

スチーム・レギオンに入らないか？入れば命は取らない」

そう来たか……………

一馬（ゴアシリーズ）「悪いが、オレ達の意志は変わらない。お前達の仲間になんかならない！」

飛鳥「それ私が言いたかったのに……………」

なんか、ごめん

機械忍者団長「愚かな……………ならばこれで」

また暗黒をやるつもりなら、ならこっちも

一馬（ゴアシリーズ）「お返しだ！暗黒の波動！」

オレは相手と同じ構えを取って、大剣から黒い刃を飛ばした

機械忍者団長「何!？」

黒い刃はそのまま奴を吹き飛ばした

パープルハート「今のって……………あっちが繰り出した忍術!？」

グリーンハート「一馬くん、そのような忍術を……………はっ、まさか一馬くんの目にはしや……………」

一馬（ゴアシリーズ）「そんなものないんで。まあ、似たような技ですよ」

グリーンハート「あら、そうでしたか」

機械忍者団長「まさか、暗黒を使えるN I N J Aが他にも存在したとは……………」

パープルハート「みんな、総攻撃よ」

一馬（ゴアシリーズ）「おう！」

ネプと一馬以外「ええ！」

ネプテューヌ達は一齐に暗黒騎士忍者へ攻撃を始めた

パープルハート「はあ！」

ブラックハート「やあ！」

ホワイトハート「おりやあ」

グリーンハート「やつ！はっ！」

飛鳥「受けてみなさい！」

5人の攻撃が次々と、それこそ反撃の隙を与えずに攻撃していった

機械忍者団長「ぬお!？」

一馬（ゴアシリーズ）「はあああああ！」

オレは大剣を握りしめて向かった

機械忍者団長「しめた！喰らえ！暗………」

一馬（ゴアシリーズ）「地衝斬！」

オレは大剣を切り上げて、衝撃波を飛ばした

機械忍者団長「むっ!?!うお!？」

衝撃波は暗黒騎士忍者を空中へと打ち上げた。オレはそこから

一馬（ゴアシリーズ）「全てを断ち切る……………超究……………」

オレは飛び上がり

一馬（ゴアシリーズ）「武神覇斬ッ！」

機械忍者団長「グオオオオオオ!!？」

大剣で切りまくった。そして止めに叩き切った。暗黒騎士忍者は地面に叩きつけられた

飛鳥「凄い……………」

グリーンハート「素晴らしい技でしたわ……………」

ホワイトハート「これでこいつも終わりだな……………」

一馬（ゴアシリーズ）「オレ達の勝ちだ……………」

暗黒騎士団長「グッ…………… スチーム・レギオンを守るため、暗黒剣を極めたのに…………… 敗れたか…………… 所詮マスターには逆らえない、臆病な団長か……………」

そして、暗黒騎士忍者は機能停止した……………」

パープルハート「この忍者、剣に迷いがあつたみたい。もし生まれ変わったら、暗黒剣ではなく、聖剣使いになるでしょうね」

一馬（ゴアシリーズ）「ああ、良いパラディンになるかもな」

パープルハート「パラディン？一馬は聖剣使いをそう呼ぶのね」

一馬（ゴアシリーズ）「ああ、聖騎士って呼び方もあるけどな」

パープルハート「そうなの……」

飛鳥「凄い！そうなんですか？それなら私も、生まれ変わるよう願っておきます」

一馬（ゴアシリーズ）「おいおい……」

ツツコまないんかい。まあ、オレも乗ったが……

パープルハート「信じてくれるのね。ツツコミが入らないのは寂しいけど、なんだか

新鮮。あすちゃんのこと気に入ったわ」

飛鳥「え……？2人が自信満々で言ってたから本当かなって、私もつい信じ

ちやっただけど……」

一馬（ゴアシリーズ）「自信満々つつーか、オレの場合は乗ったっていうか……

ちゅーかこんな話してる場合っすか？」

飛鳥「……はっ、こんなことしてる場合じゃないです。お城に急ぎましょう！」

オレ達は急いで城へと向かった

六ノ巻

一馬（ゴアシリーズ）「オラ！オラ！オラア！」

オレ達は機械忍者を蹴散らしながら城へ向かっていた。つか、疲れて来た……。そりやそうだよな、この世界へ来てからずーっと戦いばっか……

クリスタル『大丈夫か？』

ああ、今のところはな……

飛鳥「ふう、お城の近くのなに、こんなところまで機械忍者達が……！」

グリーンハート「スチーム・レギオンの狙いは城のようすし、いてもおかしくありませんわ」

ブラツクハート「これって結構攻め込まれてるってことよね。飛鳥！城は大丈夫なの？」

飛鳥「大丈夫です！お城にはみんながいますし……！」

飛鳥さんの仲間…… 気になる

ホワイトハート「ま、この程度で城を落とされるようじゃ、波戸ノ国ライバル失格だけどな！」

グリーンハート「ふふ、随分遠回しな気遣いですね。素直に心配してると言ったらどうでしょう」

ホワイトハート「別に、気遣ってねー！」

一馬（ゴアシリーズ）「これ以上ブランの機嫌が悪くなったら……城はまだつすか？」

飛鳥「ここを真つ直ぐ行けば、お城の入り口、大手門です！」

あ、大手門が見えて来た……ん？誰か戦ってる……っ！あの人は！あの人も写真で見たことがある！確か……

飛鳥「あ、焰ちゃん！良かった！無事だったんだ。すぐ加勢するね！」

飛鳥さんは真つ先に向かった……焰さん、たしか焰紅蓮隊っていうチームのリーダーって聞いたな。ちなみに飛鳥さんは国立半蔵学院って学校から選ばれた忍のチームのリーダーらしいぜ

焰「ん、飛鳥か？悪いが今いいところだから手を出すなよ、こいつは私がやる」

相手は……あ、オレがあの時射抜いた奴と同型だ

巨大機械忍者「己惚れるなよ。鋼鉄の『スチーム・レギオン』その力見せてやろう」
焰「ケリをつけよう。さあ、いくぞ！いざ尋常に……勝負！」

巨大機械忍者「急いで死ねぞ！」

今の言葉どーつかで聞いたことがあるな…… ああ、SEKIROの鬼刑部か

焰「でえやあああ!!!」

焰さんは武器の…… 6本の刀で激突した。あれってBASARAの政宗が使ってた…… たしか六爪流だったか。というか背中のは使わないのかな…… ?

巨大機械忍者「馬鹿なアアア!? …… テツコ様…… ソーリー……」

決着は一瞬でついた。テツコ…… そいつが機械忍者のマスターか!

ホワイトハート「随分苦戦していたようだな」

焰「苦戦なんてしていない。って波戸ノ国の女神四忍達か。なんでここにいるんだ、おかしいだろ」

オレ気づかれてない?

ブラックハート「わたし達は磨愛辺国に親書を届けに来たの。だから、ここにいてもおかしくないわ」

焰「飛鳥、うちの大名様は同盟は飲まないって…….もしかしてまだ伝えてないのか?」

あらら、同盟は飲まないのか…….

飛鳥「それは、伝えただけ……. !それでも協力してくれるって、一緒に磨愛辺国を守ってくれるって来てくれたの!」

焰「はあ!? 同盟を拒否したのに…… 訳がわからん」

グリーンハート「混乱するのは分かりますが、あなた方だって波戸ノ国が襲撃された時に戦ってくれたではありませんか」

焰「それもそうか。ま、私は寛容だから細かいことは気にしない。刃を交えた仲、手助けしたくなる時もある」

飛鳥「ふふ、それでこそ焰ちゃん」

焰「ところで、その黒い鎧を着てる奴。お前は誰だ? スチーム・レギオンか?」

あ、気づいてた

一馬(ゴアシリーズ)「スチーム・レギオンじゃない」

飛鳥「彼は坂田一馬さん。ネプちゃん達の知り合い、ここまで一緒に戦ってくれたの
!」

ホワイトハート「まあ、一馬とはここへ来る途中で会ったばかりだけだな……」

焰「そうなのか…… 焰だ。よろしくな、坂田」

一馬(ゴアシリーズ)「よろしくっす」

飛鳥「そういうえば焰ちゃん。雪泉ちゃんと雅緋ちゃんは一緒にやないの?」

雪泉さんと雅緋さん…… どちらも同じく写真で見たことがある。雪泉さんは月

光閃光の先輩で、月閃女学館の高等部の忍チームのリーダーで雅緋さんは紫さんの先輩

で、秘立蛇女子学園の忍チームのリーダーだって………ちなみに雅緋さんの事は紫さんから聞いたぜ

焰「ああ、二人なら大名様を守ってるはずだ。この辺は片付いたし、私達も行くぞ」

飛鳥「うん、あとちよつと頑張ろう！」

2人は城へ入って行つた。

ブラックハート「……………はっ、いけない。わたし達も行くわよ！」

オレ達も城へ入った……………

〔城内〕

城の大広間では、飛鳥さん、焰さん……………そして雪泉さん、雅緋さんが、赤い髪のと……………灰色の髪のガキンチョと睨み合っていた

ブラックハート「わたし達を忘れてもらつては困るわね。魂派流と刃仁破流の二つを相手に勝てるかしら？」

?1「あなた達は、女神四忍……………それと先程報告されたアンノウン。何故ここに……………」

おっと、オレのことは知られているのか

グリーンハート「所用で来ていたのですが、そちらの忍者が町で暴れていたのを見かけて、わたくし達も混ぜていただきましたわ」

? 2 「刃仁破四忍と女神四忍が揃い、更には突然現れたアンノウンまでいる……面白い。ならば改めて挨拶しておこう。ミーはスチーム・レギオンのトップ」

グリーンハート「ええ、聞きましたわ。忍者なら雇用相談無料と言っていた方ですわよね」

? 2 「ノー!ノー!違う!忍者じゃないN I N J Aだ」

一馬(ゴアシリーズ)「どっちも同じだろ。くだらねえこわりだな」

クリスタル『いかん一馬!少し運転を変えるぞ』

へ?すると右腕が勝手に動いた……………

パープルハート「一馬!」

? 2 「ん?」

っ!?何かが右手に……………いてえ!……………ん?何だ?弾!?弾を掴んだのか!?

クリスタル『危なかった……………再び運転を変えるぞ』

あ、動けるようになった……………てえ

ホワイトハート「まさか、あいつの弾を受け止めたのか!」

パープルハート「一馬、大丈夫!」

グリーンハート「お手は大丈夫ですか!」

一馬(ゴアシリーズ)「こ、これくらい大丈夫だ……………」

実はめっちゃ痛い

? 2 「Unbilly Babo! まさかミーの攻撃を手で受け止めるとは流石はア
ンノウンと言ったところか…… それはともかく、それ以上は動くな。まだ挨拶の途
中だ。女神四忍もだ」

雪泉「速い…… 射撃動作が見えませんでした」

雅緋「うむ、言うだけのことはある。これがスチーム・レギオンのトップか。それよ
りも。弾を手で止めたあいつもすごいな……」

いや、オレじゃないです。クリスタルです

ヨウⅡゲイマ「ミーは碎頭流(さいとりゆう)マスター、ヨウⅡゲイマ。この世界の
N I N J Aとは次元が違う。信じられなければ掛かって来い!」

この世界…… まさかこの2人はオレと同じ別の世界から……

焰「上等だ…… このっ!」

焰さんは武器を構えた。すると

? 1 「ヨウ、挑発はやめてください」

ガキンチヨが止めた

ヨウⅡゲイマ「これは挨拶だと言ったはずだ。力の差を知れば、考えも変わるかもし
れん」

テツコ「それならば、私も挨拶がまだでしたね。遅くなりましたが私はスチーム・レギオンのテツコ。ヨウのマネージャーみたいなものです」

こいつがさっきの機械忍者が言っていたテツコか

パープルハート「マ、マネージャー……？」

何でマネージャーって嘘を……

ヨウ||ゲイマ「あはははは、テツコは面白いことを言う。なぜマネージャーなんだ？」
 テツコ「マネージャーの方が、それっぽいかと思ひまして、私達はN I N J Aを、強いN I N J Aを求めて」

すると誰かがヨウの後ろから攻撃を仕掛けた。お、かなり忍者っぽい……がやっぱりセクシーっつーか……

？「……… 血祭りにしてやる。戒めろ！」

戒めろ？これも何処かで…… あれでもおかしいぞだってあのキャラは男のはず……

ヨウ||ゲイマ「フツ、まだ他にもいたか。良い次元に来たな」

だがヨウはその攻撃を軽々と受け止めた

パープルハート「まっくーる!!」

はあ!?!この人がまっくーる!?!いや、まっくーるはこいつがつけたあだ名っぽいな。こ

の人の名前は他にあるはずだ……

まっくー「完全に死角をついたはず。強い」

確かに強いな。戦う時はもつと強い装備でないとな

ヨウⅡゲイマ「ああ、強い。フーよりも、ユーよりもな！」

まっくー「ならばこそ、貴様に聞きたいことがある。………俺のことを知っているか？」

は

一人称俺!?こ、これがまさか俺っ子つてやつ!?てか、もしかして記憶喪失か?この人は

ヨウⅡゲイマ「さあ?ユーなど知らん。が、ユーのその忍装束………見覚えがある」

まっくー「!?………知っていることを話してもらおう」

ヨウⅡゲイマ「先に二大国のN I N J Aと話したかったが、待つつもりは無いか、必死だな」

テツコ「ヨウ、既に話し合いをする雰囲気ではありません。私達の目的は済んでいますし………ここは」

目的だと?気になるな

ヨウⅡゲイマ「このままやり合ってもいいが………それに意味はないか」

まっくーる「……………逃がさん！」

ヨウ||ゲイマ「フツ、ならば追ってくるか？好きにしろ」

そして2人は消えた

まっくーる「……………待て！」

そしてそれを追うように消えた

飛鳥「……………行っちゃった？」

ブラツクハート「行つたみたいね。さすがはマスターと言うだけあって、大物のオー

ラがあるじゃない」

確かにオーラはあったが、デウスマストよりはマシだな

グリーンハート「ええ、強そうでしたわね。しかし銃の動作は見せていただきました

し、次は遅れを取りません」

ホワイトハート「あいつは何だったんだ。追っかけて行っちゃまったけどよ」

パールハート「まっくーる……………、わからないわ。相手が、何かを知ってそうな

様子ではあったけど……………」

雪泉「飛鳥さん……………」

飛鳥「雪泉ちゃん？」

雪泉「あの……………どうして女神四忍達が？」

雅緋「それに、あの黒い鎧の奴は誰なんだ？向こうがアンノウンと呼んでいたが……………」

飛鳥「あつ！あのね、2人とも」

雅緋「スチーム・レギオンの襲来に乗じて、あんな助っ人を連れてシエアクリスタルを壊しに来たのか？かまわんど、ここでケリをつけよう」

飛鳥「違うつ、違うの！」

雪泉「どういうことですか？」

パープルハート「ふふ、それはね、わたしとあすちゃんは仲良しになっちゃったのよ。えいっ」

ネプテューヌは飛鳥さんに抱きついた

飛鳥「きやつ、わつ。ネプちゃんつ、そんなにいきなりギュツて」

パープルハート「あすちゃん、ふわふわで抱き心地がいいわね。このまま波戸ノ国に連れて帰ろうかしら」

飛鳥「え、ええええ？」

雪泉「……………！だ、ダメです。飛鳥さんは私が……………！」

飛鳥「雪泉ちゃんつ？いきなり何……………つて、ちよつと引つ張らないで！」

おいおい引つ張り合いが始まったぞ

グリーンハート「ふふっ、ちなみに、この助っ人くんも、わたくし達と仲良しになっ
たんですよ」

こっちにはボールさんがいきなり抱き付いてきた。

一馬（ゴアシリーズ）「ちよっ!? べ、ボールさん!？」

や、柔らかい……

グリーンハート「ふふっ、照れなくても良いのですよ。それにしても、この鎧そろそろ脱いだ方が良いんじゃないやありませんの。ひと段落しましたし」

一馬（ゴアシリーズ）「そ、そうっすね…… ベールさんちよつと離れて」

グリーンハート「ええ」

ベールさんが離れると、オレは解除した

一馬「ふう……」

飛鳥「え!? 子供!？」

焰「子供!？」

雪泉「さっきの鎧をこの人が……」

雅緋「子供が助っ人だと……」

一馬「オレは助っ人っつーか何っつーか…… おわっ!？」

またベールさんが抱き付いて来た

グリーンハート「ふふっ、こっちの方が、抱き心地が良いですわ。わたくしも一馬くんを波戸ノ国に連れて帰りたいですわね」

一馬「おいおい……」

てか、まだあつちは引つ張り合いが続いてる

雪泉「絶対に離しませんっ離してください！離さないなら力づくでも」

パープルハート「ふふっ、冗談よ」

ネプテューヌは離れた

飛鳥「わっ!？」

雪泉「飛鳥さん！もう大丈夫です、悪は私が追い払います」

飛鳥「雪泉ちゃん違うの！ネプちゃん達や一馬くんは協力してくれて…… 同盟の

ことはもう知ってる。それでも……」

あ、くん呼びになった

パープルハート「気にすることはないわ、あすちゃん」

飛鳥「すみません、同盟のことは…… 本当に」

グリーンハート「飛鳥のせいでもなければ、国と国のことですし仕方ありませんわ。あなた方と共に戦えるのを楽しみにしていたけれど」

ちなみに、この人は抱きつくのをやめている

ブラックハート「もう、わたし達に何度も言わせる気？ 気にしないでって言ってるのよ」

飛鳥「うん、謝るよりも言うことあったんだ。今回はありがとう！」

雪泉「むう……。飛鳥さんっ」

飛鳥「雪泉ちゃんは何で睨むの!？」

ホワイトハート「それじゃわたし達は帰るか。怖い目で見てる奴がいるしな。一馬お前もこつちに来るか？」

一馬「あ、ああ……。どうせ行く所もないしな……。……」

雅緋「なんだ、せっかく来たのにやっていけないのか？」

ホワイトハート「親書を届けに来ただけだ。なぜか戦いっぱなしになっちゃったがな。流石に疲れた」

オレだつてかなり疲れてるよ……

ホワイトハート「それよりも、町の状況確認と、後始末のほうが重要だろ」

焰「雅緋、悪いな……。町は結構やられてしまった。スチームレギオンは引き上げたみたいだが、町を見回つときたい、手伝ってくれ」

雪泉「それに大名様への報告も忘れないでください。私達の役目です」

雅緋「分かった。それならさっさと行くぞ。それと女神四忍と……。……一馬だった

か。世話になったな」

一馬「ど、どうも……」

パールハート「ええ、それじゃまたね」

飛鳥「あ、あの、私が磨愛辺国の外までお送りします！」

そしてオレ達は飛鳥さんに着いて行った

七ノ巻

オレ達は町に着いた。因みにネプテューヌ達は城を出る時に変身解除、飛鳥さんは忍装束（……………で良いのかあは……………本人は忍装束だつて言つてたが……………）を解除した

ネプテューヌ「あー、ずいぶん壊されちゃったね……………」

町は酷い有様だった……………」

一馬「機械忍者供の姿がもうないな……………多分テツコとヨウと一緒に引き上げたつてことか……………」

飛鳥「スチーム・レギオン……………最強の流派を決めるだけなら、こんなことする必要ないのに……………」

そう言えば、テツコが妙なことを言つてたな。私達の目的は済んでいる……………そういうことか

ベール「力の誇示……………ですかしらね。あるいは挑発なのか……………」

ブラン「なんだか気になるわね。シエアクリスタルは無事だったのよね？」

飛鳥「うん。雪泉ちゃんと雅緋ちゃんら壊されてなかったつて言つてた」

一馬「テツコはこう言ってたな。目的は済んでいると……………」

ブラン「それが世界最強の流派を決める『超忍者大戦』その一端だとして……………」

一馬「超忍者大戦?」

ブラン「そう言えば、一馬は知らないわよね。少し前、波戸ノ国に襲撃して来たスチーム・レギオン。その時ヨウIIゲイマが空に映像を映して、超忍者大戦の開戦を宣言したのよ」

一馬「なるほど……………」

ブラン「話は戻すけど、磨愛辺国を落としたりわけでも、刃仁破流を壊滅させたわけでもないのに、それで一体、何を果たしたというの?」

一馬「ん……………ダメだ分からねえ」

ネプテューヌ「え、えーと……………?もつとわかりやすく言つてよ!」
こいつ……………」

一馬「はあ?つたく仕方ねえな……………スチーム・レギオンの……………その代表格のあの2人の言動は辻褄が合つてない。つまりこれには何か裏があると……………つてことだ」

ブラン「ええ、更に分かりやすく言うのと別の目的があるつてこと」

ノワール「2人の目的か……………考えすぎじゃないかしら。案外わたし達が来たから

強がり言つて、引き上げたただけだつたりして」

一馬「んなはずねえんだよなあ………」

ネプテューヌ「むう……… 2人の言動の裏には、何か別の目的があるかもしれないし、ないかもしれないんだね！」

一馬「お前……… 何も分かつてねえんだよ。それに自分も考えてるつて言いたいだけだろ！」

飛鳥「あはは、女神四忍と一馬くんは仲良しですね。次に奴らが現れるのは、波戸ノ国かもしれない。くれぐれも気をつけて」

森で会ったばかりなんだよなあ

ネプテューヌ「そうなの？そのときは、助っ人よろしくー！」

飛鳥「もちろん！必ず助けに行くからね！」

一馬「そうは言ってますけど、国は許してくれるんすかね？」

ベール「同盟も拒否されてしまいましたし。助っ人は有難いですが」

飛鳥「うっ……… その時はこっそりと」

ネプテューヌ「その時は覆面とかで正体を隠せばだいじょーぶ！突然仲間に加わった刃仁破流の覆面忍者!?これは売れる！」

一馬「何を売る気だ！」

ノワール「もう、すぐ調子に乗るんだから」

そんな感じでオレ達は町を歩いた。そして宿場町のオレ達が入って来た門へとたどり着いた

ネプテューヌ「さて、そろそろ町を出るね。今回はSSS級ミッション失敗か……」

ノワール「そういうこと言わない。飛鳥、こんなところまでお見送りありがとう」

飛鳥「いえ、みなさんにはお世話になりましたし」

ブラン「町や城の立て直し、大変だと思うけど頑張つて」

ベール「わたくしたちに出来ることがあつたら言つてください。できる限り協力いたしますわ」

一馬「オレも協力しますよ!」

ノワール「そうね、同盟は拒否されちゃったけど、何かできることはあるかもしれないから」

飛鳥「はい!その時はお願ひするね」

いざ出発……! しようとしたその時。誰かがこつちへ向かつて走つて来た……!

焰さん……! つてえっ!?

焰「おーい、飛鳥!女神四忍!それと坂田!」

何でオレが驚いたのか……! それは焰さんの着ているシャツだった。胸が揺れてる

？確かに揺れてるが違うそこじゃない。シャツにデカデカと『踊り子号』と書かれていた。何故に？まああの人は気に入ってるのだろう、うん

飛鳥「焰ちゃん？」

焰「良かった、国から出る前に追いつけたか」

飛鳥「どうしたの焰ちゃん？もしかしてお城で何かあったの？」

一馬「まさか……… 残党ですか！」

焰「違う、雪泉が大名様にお前ら女神四忍から助力を受けたと報告したんだ。さつきのことを、な……… あ、坂田お前の事は言っていないぞ。ややこしくなるからな」

一馬「そうですか………」

ネプテューヌ「雪泉ちゃん、報告がとくか言ってたね」

焰「その結果……… 大名様は波戸ノ国との同盟を決断した！両国が協力しスチーム・レギオンへ徹底抗戦するに、異議なし、とな！」

おお

ネプテューヌ「おおー!!やったね！ミッションは帰るまでがミッションだから、逆転大成功！」

焰「そのための文書も、大名様から持たされている。飛鳥と私はこのまま共に同行し、波戸ノ国の大名様……… えーと………」

一馬「そう言えば波戸ノ国の大名って誰なんだ……波戸ノ国で世話になる予定だから一応名前を……」

ネプテューヌ「いーすんのこと？」

え？いーすん？てことは波戸ノ国の大名って……おいおいマジかよ

焰「そう、だったか……？とにかく大名様のいーすんに文書を渡しに行くよう命令が下った！」

ブラン「そう呼んでいるのはネプテューヌだけでしょ。大名の名はイストワールよ」

焰「そうだったか。まあ大名様の前では間違えないようにするさ」

一馬「マジかよ、イストワールさんが大名かよ……意外だ……」

ブラン「あら、イストワールを知ってるのね」

一馬「ああ、とは言っても別の世界のイストワールさんだけだな」

焰「別の世界？どう言うことだ？」

ベール「一馬くんは別の世界から来たんですのよ」

飛鳥「えーっ!?!別の世界から!?!」

焰「本当か!坂田!」

一馬「ええ、まあ……でも、この話はまた後で……」

焰「そうか……」

飛鳥「そういえば、雪泉ちゃんと雅緋ちゃんは一緒じゃないの？」

焰「2人は別任務で周辺諸国の情報収集が命じられた。私と飛鳥は文書を届けた後、そのまま女神四忍と行動を共にしろとのことのお達しだ」

飛鳥「そっか。別任務ならしやうがないね」

焰「これからよろしく頼む」

ベール「ふふ、苦勞した甲斐がありましたわね。こちらこそよろしくお願いしますわ」

一馬「同盟、出来ちゃった……」

ノワール「わたし達が組めば恐いものなし、スチーム・レギオンに反撃開始よ！」

ネプテューヌ「敵だったキャラが味方に！これは勝ちフラグ！わたしはリーダーのネプテューヌだよ！」

ベール「ネプテューヌリーダー、ですか？また勝手なことを言い出しましたわね……」

一馬「ネプテューヌがリーダーとかこの先が不安だ……」

ネプテューヌ「むー！一馬！それは無いよ！ハツハツハツ！タイタン級の大船に乗ったつもりで任せなさい！」

一馬「余計不安だ、沈みそうなんだが……」

飛鳥「あはは……それじゃあ行きましょうか。これからよろしく願います！」

こうしてオレ達は磨愛辺国を後にした

八ノ巻

オレ達はガラパの森（オレとネプテューヌ達が初めて会った森、名前はベールさんが教えてくれた）を通過して波戸ノ国へ向かっていた

焰「そう言えば、お前別の世界から来たって言うってたな。どうやって来たんだ？」

ネプテューヌ「あー！それ気になってた！やつぱりー何かに激突して目が覚めたらここにいたとか？」

一馬「いや、自分の部屋の押し入れに入ってここへ来た」

ノワール「お、押し入れから？」

ネプテューヌ「おお、珍しいパターンだね！」

ブラン「でも、なぜここへ来たのかしら？」

一馬「それは………女の子の声が聞こえたからだ、助けてってな」

ネプテューヌ「見ず知らずの女の子の声を聞いて危険を顧みずに異世界へ向かう………うんうん、王道だねえ！」

王道なのか？

一馬「あははは………そういやさ、ここの世界の名前ってどんなの？」

ブラン「ここは、幻影夢忍界よ」

一馬「幻影夢忍界……」

それからブランはこの世界のことを少し教えてくれた。簡単に言うといくつかの大国といくつもの小国があつて、それぞれの国が永きに渡つて覇を争つていて、いつしか争いは各国の忍者同士の直接対決を意味するようになったとのこと。そして各国の忍者には独自の流派を持っている

ネプテューヌ「ちなみに波戸ノ国は大国だよー!」

飛鳥「磨愛辺国も大国です!」

一馬「な、なるほど……で、波戸ノ国と磨愛辺国の流派つてそれぞれどんななの
だ?」

ブラン「わたし達は命令(コマンド)術式で強力な武具を操る『魂波(こんぱ)流』
焰「対して私達は反射(アクション)術式により身体能力を強化して戦う『刃仁破流』
だ」

アクションとコマンドね……

ブラン「分かつたかしら?」

一馬「ああ、大体分かつた」

ネプテューヌ「一馬にしつもん!ねえねえ!どうやって鎧とか纏つていたの?」

飛鳥「もしかして、別の世界の忍術？」

一馬「あー、えーっとこれは……こいつのお陰です」

オレはクリスタルを見せた

ネプテューヌ「おお、綺麗で真っ白い石だ！」

ベール「綺麗な宝石ですわ！」

焰「その石が関係してるのか？」

一馬「焰さん、正解だ。こいつはリンクルストーン・クリスタル。こいつにはある能

力があってそれが……」

クリスタル『物の創造だ。まあ他にも能力があるが一番はこれだ』

ネプテューヌ「ねぶう!?石が喋った!?!」

飛鳥「まさかその石に妖怪が取り憑いているの!?!」

ブラン「一馬、その宝石を渡しなさい、取り憑いている妖怪を退治してあげるわ」

一馬「違う違う!妖怪なんて取り憑いてない」

一同「へ？」

一馬「こいつ自体に意志があるの……はっ、石なのに意志がある!はい、アル

トじゃないと!」(アルトじゃないとの決めポーズ)

「……………」

いかん、つい言ってしまった

ノワール 「何よ、今のは……」

焰 「気のせいかな、急に寒くなって来たぞ……」

クリスタル 『今のは、石と意志をかけた大変おもしろいギャグです』（高音ボイス）

一馬 「お願いだからギャグを説明しないで……… じゃねえよ！お前何言ってる

だよ！」

クリスタル 『だって、アルトじゃないとはこれがないと……… なあ？』

一馬 「なあ？じゃねえ！」

ブラン 「それはともかく。あなたは？」

クリスタル 『ゴホン、我はリンクルストーン・クリスタルだ。能力は物の創造、一馬

が考えた物ならなんでも出せる』

ネプテューヌ 「ねぷう!?何でも!?それってチートじゃん！」

ま、まあチートだよな。うん

ネプテューヌ 「じゃあさ！強力な武器でスチーム・レギオンを……」

クリスタル 『残念だが、制限がある』

ネプテューヌ 「がーん！」

嘘言いやがった………

一馬「とにかく、こいつが相棒のクリスタルだ」

クリスタル『これからこいつ共々よろしく頼む』

ネプテューヌ「よろしくー！」

飛鳥「はい、よろしくお願いします」

ベール「ちよつとお待ちになつて、もしクリスタルが一馬くんから離れた場合……」

一馬「その時オレは……… 唯の喧嘩が強い子供ですよ」

ベール「まあ！ いけませんわ！ もし離れ離れになつた時用に特訓しなくてわなりませんわね。大丈夫ですわ、わたくしが色々と教えますわ。そう、色々………」

ベールさんの目が……… 絶対に特訓じゃ済まされないぞ

ノワール「ベールそこまでよ」

ベール「あら、わたくしとした事が………」

一馬「はあ……… それにしても、波戸ノ国はまだなのかな？」

ブラン「もう着くわ」

一馬「お、そうか………」

すると門が見えて来た………

一馬「この先が………」

ノワール「ええ、波戸ノ国よ。それにしても、妖怪とは遭遇しなかったわね」
ネプテューヌ「うーむ、本当なら何処かでエンカウントしてるはずなのになー」
一馬「ま、奇跡的だったって事で。それにしても広そうな街だ」
ノワール「実際広いわよ」

一馬「まじか」

焰「観光したいが……まずは親書だな」

飛鳥「そうだね！」

こうしてオレ達は波戸ノ国へ入った

九ノ巻

オレ達は波戸ノ国に到着して、城へ入った

ネプテューヌ「ただいまー！いーすん！」

イストワール「みなさんお帰りなさい」

おお、この人がこの世界のイストワールさん…… やっぱ服装以外は変わらんな…… あ、プルルートの方のイストワールさんとは違うか

イストワール「磨愛辺国の忍がいると言うことは…… 同盟を組むことが出来たんですね…… そちらの方は？」

一馬「坂田一馬です」

イストワール「坂田一馬さんですか。初めまして、私は波戸ノ国の大名、イストワールです。以後お見知り置きを」

一馬「ど、どうもこちらこそ……」

イストワール「さてこれから詳しく話をしたいところですが…… みなさんお疲れの様ですし、お風呂はどうですか？」

ネプテューヌ「お風呂!? やったー！」

焰「そうだ、大名様からの親書が」

イストワール「それもお風呂から上がった後で……」

焰「そうか……」

一馬「あの……男のオレは……」

イストワール「ご心配なく、ちゃんと男湯がありますから。一馬さん、一人だからつて走ったり、飛び込んだりしたらダメですよ？」

一馬「分かりました」

んな事しないっつーの。ていうか注意してくるって事は、広いんだな……そしてオレ達は風呂へ入った

〔男湯〕

一馬「あゝ」

風呂は大浴場だった……あゝ染みるゝ

ネプテューヌ「良い働きをした後のみんまで入るお風呂は格別！最高だねえゝ」
壁の向こう側でネプテューヌの声が聞こえる。

ネプテューヌ「一馬！気持ちいい？」

一馬「ああ、最高だ」

ネプテューヌ「それはよかったー！」

お、会話は出来るか

焰「なんか悪いな。親書を届けに来たのに風呂をもらってしまい。しかも城の中って事は偉い人しか入れないんだろ」

オレにとつては偉い人用だろうが風呂は風呂だな、うん

ノワール「そんなの気にしなくていいわよ。同盟も結んで、わたし達と一緒になんだし、飛鳥も焰も遠慮なんていらなからね。勿論一馬もよ」

一馬「助かる〜」

飛鳥「ありがとう！ノワールさんつて、しつかりしてて、面倒見が良くて、うちの黒髪クラス委員みたい。いてくれて安心です」

焰「確かに。ノワールは腕も立つし、私もついつい『お姉ちゃん』っていいいたくなる。不思議なもんだ」

ん？焰さんがノワールさんの事をお姉ちゃんつて言いたくなる。ノワールさんをお姉ちゃんと呼ぶのはユニ……もしかしてユニと焰さんの声つて似てる？て事は自動的に美希とも声が似てるって訳だ。あー待てよ確かにユニが変身したら焰さんみたいな声になってたな

ノワール「もう、大げさね。波戸ノ国にいる間はいくらでも頼つて、わたし達は一緒に戦った仲間、戦友なんだから！」

一馬「確かに、戦友だなあ〜」

ベール「あら、そういえばネプテューヌとブランは静かですわね、どうかしましたか？」
ブランはともかくネプテューヌが静かなのは珍しいな……………

ネプテューヌ「ノワールがわたしたち以外と仲良さそうにしてる。距離を縮めようとして空回りするところまでがお決まりなのにさ。これは世界観の融合によつて生まれただ歪だよ！こんなの絶対おかしいよ！」

一馬「おい。何変なこと言つてんだよ、別におかしくはないだろ。それにお決まりとか……………何処のどいつが決めたのか分からんが、それでも言い過ぎだ！」

ネプテューヌ「おかしいもん！だつて……………」

ベール「一馬くんの言う通り、流星にそれは言い過ぎですわよ。ブランが静かなのはいつも通り、それとも……………飛鳥さんと焰さんの一部分に圧倒されているのでしょうか？」

言わなくても分かる。胸だ……………

ブラン「勝手な事を言わないで、ちよつと考え事をしていただけよ。ま、まあ目立つし、目に入るから観察はしてるけど、それだけよ」

ベール「見てはいるのですね……………しかしそれ以外の考え事と言うと……………」

ブラン「あのイストワールが善意だけで、お風呂まで手配してくれるとは思えない。

この後、何か依頼が待っているんじゃないかって。しかもとても面倒な依頼……その準備の為の時間稼ぎをしている可能性があるわ」

ベール「イストワールは大名として国民のためによく働いていますわ。ウィークポイントにはちよつと時間が掛かってしまうところですが」

時間がかかるのは共通なんだな……

ベール「ここは素直に休息の時間として受け入れたらどうですか？」

焰「ブランは意外と疑り深いんだな、そういうのも理解した上で黙って楽しむのが大人つてもんだろ」

ノワール「そうよ、ブランは最近疑り深くなってるわよ。これはわたし達への任務成功の労いと飛鳥と焰、一馬の歓迎！ミツシヨンはどうせあるんだし、問題ないでしょ」

飛鳥「問題つて言えば、あぶないよ焰ちゃん。ここつて覗かれ放題だし、侵入され放題だよ！第一男湯に一馬くんがいるんだし……」

ああ確かに上が空いてるな……ま、んな事はしないが

焰「落ち着け、飛鳥。いつもとは違う。周りをよく見ろ、ちゃんとした風呂だぞ。万が一、覗かれたり、侵入されたところで！何か問題あるのか？」

一馬「オイオイオイオイオイ、オイオイオイオイオイヨ！飛鳥さん、オレはそんな事はしないよー」

ノワール「オイオイ言い過ぎよ……………てか、最後オイヨって言ってたし……………」

飛鳥「そうなの？」

一馬「ああ、絶対に覗かない」

飛鳥「良かった……………」

ベール「まあ確かに気にした事はありませんわね。見られて恥ずかしい身体ではありませんし……………若干一名を除いては。ですわよね、ブラン……………」

一馬「失礼ですよ、ブランに」

ブラン「挑発しているつもり？それなら残念だったわね。いつものベールの安い挑発には乗れないわ。今回の同盟で、磨愛辺国の事、刃仁破流忍者の事を調べ尽くすつもりよ。そして、わたしは身も心も成長すると……………そう決めたわ」

おお

ブラン「後はついでに一馬の事も調べたいわね」

一馬「オレはついでかい！まあ良いけど」

飛鳥「……………本当だ、ちゃんとした大浴場だしみんな気にしてない。波戸ノ国では安心して入れるんだ、良かった」

一馬「その話を聞く限り……………大変ですね」

飛鳥「そうなの……………なのでつい、心配になってしまった……………」

焰「ちなみにだが、私の忍仲間には狭い風呂でも勝手に入って来るぞ」

おいおい……

ベール「それはお互いを知る為のスキンシップで事ですわね。そうですね。そうですね！せつかくですし、わたくしが身体を洗って差し上げますわ。ささつ、飛鳥さんと焰さん」

飛鳥「え、いや、そんなの悪いよ。それに安心して入れるなら、ゆつくりしたい」

焰「確かに、こちらも忍務で来ているんだし、そこまで世話になるわけにはいかない。今回は遠慮しとく」

ベール「そう遠慮なさらずに、わたくしに頼ってくださいまし」

ブラン「そうね、客人の背中を流すくらいはするべきよね。同盟国となった今、スキンシップも大切なはず……」

焰「お、おい飛鳥！なんか2人の目が恐いんだが……」

飛鳥「これじゃいつもと変わらないよー!!」

壁の向こう側で何が起ころうとしているのか……想像したくない。よし出よう
ベール「ふふつ、一馬くん、壁に耳を当ててよく聞いてくださいね？」

一馬「え、えつと……サラバァーイ！」

オレは逃げる様に浴場から出た

ブラン「逃げた……」

ベール「まあ、逃げちゃいましたわ」

飛鳥「一馬くん！助けてー！」

焰「おい飛鳥！一馬に助けを求めたら、こっちに来るだろー！」

飛鳥「そうだったあ……」

ネプテューヌ「まーこの先は思春期くんにはちよつと刺激があるからねー。でも、見られたら見られたで一馬の青春のページにはなつたかもー」

ノワール「そんなこと言わないの！」

つぶねーもしあのまま聴いてたらどうなっていたことやら……

クリスタル『お前……もう良いのか？』

一馬「ああ。それより着替え」

クリスタル『今出してやる』

そしてオレは服を着て、脱衣所の椅子に座ってネプテューヌ達が出るのを待った……

十ノ巻

ネプテューヌ達が風呂から出るのが遅いので、歩いていたら、イストワールさんと遭遇した

一馬「あ、イストワールさん……………」

イストワール「あら一馬さん。ネプテューヌさん達はまだお風呂に入っていますのね…………… ちょうど良かった。一馬さん、貴方に聞きたいことがあります」

一馬「聞きたい事？」

イストワール「はい、一馬さんは、一体何処から来たのですか？」
おおう、やっぱり聞いてきたか……………」

一馬「あー、えーつと…………… 別の世界から」

イストワール「別の世界？と言うことは一馬さんはこの世界の人間じゃ無いと」

一馬「はい。えーつとここへ来たのは……………」

オレはここへ来た経緯を話した

イストワール「…………… にわかには信じ難い事ですが、嘘をついてる様にも見えません…………… 分かりました、貴方を信じましょう。この世界で分からないことがあれば

何でも聞いてくださいいね」

一馬「あ、ありがとうございます！」

その後、ネプテューヌ達が来て、焰さんが親書を読み上げた

焰「……よって、我が国は波戸ノ国との同盟を受け入れ、スチーム・レギオンの脅威を退けるまで、共に戦う。以上だ」

イストワール「はい、磨愛辺国大名の意は確かに。こちらも異論はありません」

ベール「何気に、きっちり期限を入れ込んできましたわね。退けるまで、と」

ブラン「国と国との話だもの。きっちりしている方が信用できるわ」

曖昧だったらこの先何が起こるか分からんしな

焰「大名様から、私と飛鳥は今後波戸ノ国の忍と行動を共にするよう言いつかっている。これからよろしく頼むぞ！」

飛鳥「はい！刃仁破流の忍式名。これより忍務にあたります。よろしくお願いします！」

これで正式に仲間か……

ネプテューヌ「おおー！これで、2人は正真正銘の仲間ってことだねー！よろしくね！ところで一馬はこれからどうするの？」

これは言えってことか？

一馬「……ここへ来て、帰るまでグータラするのもアレだからな。それにそれじゃあここへ来た意味も無い……オレもスチーム・レギオンと戦うぜ！」

イストワール「宜しいのですか？ 貴方はまだ若いですし。忍ではありませんから……」

一馬「それでも、やらなきゃならないですよ！」

ネプテューヌ「一馬はガラパの森や磨愛辺国と一緒に敵と戦ったよ！ わたしが保証する！」

ベール「わたくし達、ですわよね？」

イストワール「ネプテューヌさんがそう言うのでしたら……分かりました。一馬さん、これから、よろしくお願いします」

一馬「はい！」

ネプテューヌ「これで一馬も正式に仲間！ それじゃあ、早速みんなの実力を見るために、一万回の塔とか登っちゃおう？」

んなもの街の景色を見た感じ無かったような……無かったな。第一そんなに高いのなら、視界に嫌でも入るはずだ

飛鳥「え、えええ!? ネプちゃん!? 波戸ノ国にはそんなものまであるんですか」

焰「ほう、なんだか分からんが、やってやる！」

この人達信じようとしてるよ!?

ネプテューヌ「おっ、ノリがいいねー、ほむほむ!」

焰「ほむほむ?」

ネプテューヌ「愛称だよ! アダ名って言った方がいいかな。焰ちゃんでしょ、だからほむほむ! あすちやんだけアダ名じゃおかしいしね」

「そういやブラキの太刀といいフロンティアで昔あったあるコラボ装備のコラボ元のキャラといい、「ほむら」と名前があるとほむほむってアダ名になるお約束があるのか?

焰「飛鳥はそうだったな。まあそういうことなら構わないが」

一馬「そんな塔無かっただろ。この城へ向かう時景色にそんなのは無かったぞ」

イストワール「ネプテューヌさん! ふざけるのもいい加減にしてください! 一万回の塔なんて、波戸ノ国にはありません! それはゲームの話でしょう」

ほらやっぱり

ベール「ゲームだからと言って侮ってはいけませんわ。体力と忍耐力が求められ、最終的には運が試される。運も実力のうちと言いますし」

確かにそんな言葉あるけども

焰「ゲーム……………? 修行になるなら試してもいいぞ。波戸ノ国がどう利用してるか

興味があるしな」

一馬「焰さん、その人の言ってる事本気にしちやダメつすよ」

焰「そうなのか？」

ベール「まあ、一馬くんだったら……」

まあオレも人のことは言えないが、この2人に比べたら遥かにマシだ！……多分

イストワール「コホン、実はみなさんにはお願いしたいことがあり、その件は後ほど話しましょう。その前に直接聞いておきたいことがあります。敵の戦力とブランさんから報告があった、敵の目的についてです」

ブラン、いつのまに報告を……

ブラン「表向きは『超忍者大戦』、最強の流派を決めると言っていた」

ネプテューヌ「敵はうんざりするぐらいいたよ！どこにいたんだってぐらい！最強を
目指すだけあって数は力だよね！」

戦いは数だよ兄貴！ってか……

焰「数だけじゃないぞ、中には強い奴も混じっている。私が戦った奴は骨があった」

ブラン「相手はそれなりの力を持っているのに、波戸ノ国と磨愛辺国からはあつさり
撤退。お城には魂波流と刃仁破流が揃っていたのにな」

焰「そりや二つの流派が揃っていた上に、あの黒い忍者も乱入してきたから、尻尾を

巻いて逃げたんじゃないか？」

一馬「ヨウIIゲイマはドンパチやろうとしてたが、テツコが『目的を達した』と言っていた……引つ掛かっているのはここだな」

飛鳥「そこは磨愛辺国でも気になっていて、私と同じく刃仁破四忍の二人、雪泉ちゃんと雅緋ちゃんが調査に行ってます」

イストワール「なるほど、磨愛辺国が動いてくれるならば、敵の目的に関しては磨愛辺国に任せましょう。波戸ノ国では敵の拠点、つまり、空中戦艦の場所と移動先を調査しましょう」

今すぐにもでも乗り込む………は無謀だな

イストワール「ヨウIIゲイマの実力は分かりませんが、私達二国、それと一馬さんで協力すればきつと相手を押し返すことが出来るはずですよ。敵の場所が判明次第、こちらから攻め込みます。守っていてもばかりでは埒がききません」

ネプテューヌ「いーすんってその作戦好きだね………捕まったりしないと良いけど」

ノワール「ま、わたし達らしいわよね。今回は飛鳥と焔と一馬もいるしきつと大丈夫よ」

前にもこんな作戦をやったことがあるんだな………

焰「ああ、私達がいるんだからそんな心配はいらない。捕まっても上手いこと逃げ出してやるさ」

一馬「オレが捕まったら……オレなりに逃げ出してやるぜ！」

ノワール「その前に捕まらないようにしてほしいわね……それで調査結果が出るまで、何をしたら良いのかしら。何かあるんでしよう？」

イストワール「はい、ちょうど戻って来たみたいですね」

一馬「？」

すると。誰かの足音が聞こえた。後ろを振り向くとそこには

コンパ「いーすんさん、ただいま戻りましたです」

ネプテューヌ「あ、こんばだ、やほー！」

この世界のコンパさんが来た。流石にもう驚かないぞ

コンパ「ねぶねぶたちも無事だったですね。えーとそちらは……」

飛鳥「あ、私達は刃仁破流の忍で、飛鳥です。こっちは同じく焰ちゃん……」

コンパ「思い出したです、有名ですから……はっ!?ということはここまで侵入を許してしまつた。もしかしてわたし達ピンチですか？」

ノワール「違うわ、コンパ落ち着いて……って、落ち着いているわね」

確かに、慌ててない……

イストワール「コンパさん。私達波戸ノ国と磨愛辺国は無事、同盟国となりました。お二人は使者であり、これからは共に戦う仲間です。それと、こちらの方は坂田一馬さん、この人も共に戦う仲間です」

一馬「ど、どうも」

自分で言いたかったなあ〜

焰「私達にも一応紹介してほしい。そいつは何者だ？強いのか？」

コンパ「医療忍術を専門としている忍者。コンパです。だから、ねぶねぶ達みたいに強くないですよ」

戦闘用だけじゃなく、医療用の忍術もあるんだな

ブラン「わたし達魂波流の顔役の一人よ」

一馬「顔役……って何だ？」

ブラン「顔役って言うのは、簡単に言ったら、町で有名な人……って言えば良いかしら」

一馬「なるほど……」

こっちのコンパさんは意外と凄いい立ち位置なんだな。イストワールさんと同じく……

ネプテューヌ「こんばあー同盟まで色々あったんだよー。磨愛辺国にダアって行く

途中、敵がザザツつと現れて、それから一馬と出会ってゼーんぶドンツ！つと倒してき磨愛辺国に着いてからも、かくかくしかじかでまた敵が登場！かと思つたら帰つてくし、そんなこんなで無事ミツシヨン達成！」

一馬「おおおい、何つー大雑把すぎる説明なんだ……………」

コンパ「おおー、そう言うことが……………よく分かつたです！ねぶねぶ頑張つたですぬ」

ノワール「……………本当に？今ので？」

一馬「あの二人には通じ合つたんだろう……………」

イストワール「それでコンパさん。戻つて来たという事は先方との話はまともりましたか？」

コンパ「はい、バツチリです。あいちゃんが待つていたので、準備ができたらくモツ神社に行くですよー！」

やつぱりアイエフさんもいるのか……………

ベール「まあ、あいちゃんか？各地を忙しく飛び回っていましたが、久しぶりにお会いできますわね」

ブラン「三人に説明しておく、あいちゃんというのは『アイエフ』、クモツ神社の巫女よ」

え？巫女？

一馬「諜報員じゃ無いの？」

ブラン「違うわ……その言い方、あなたが知ってるアイエフは諜報員のようね」

一馬「ああ」

コンパ「？どういう事ですか？」

ネプテューヌ「こんば！一馬はね、何と！別の世界から来たんだよ！」

コンパ「ふええええ！？そうなのですか!？」

一馬「ええ、まあ」

ブラン「ちなみに聞くけど、あなたが知っているコンパってどんな感じ？」

一馬「あー、ナース見習い？」

ブラン「ナース見習い……立ち位置がすごく違うのね……」

コンパ「一馬くんが知ってるわたし……気になって来たです」

ブラン「でも今は気にする事は無いわね。この話はここまで、これから神社に行くことになるけど、スチーム・レギオンと関係なくても大丈夫？」

一馬「オレは別に」

焰「ああ、構わないぞ！これも忍務だから気にするな」

イストワール「それでは、私はこの後の指示を出しますので、話は終わりにしましよ

う。次のミッションが決まったら連絡をします」

コンパ「みんなもう行けるですか、それなら案内するです。久しぶりに会うのであいちゃん喜ぶですよー！」

そして、オレ達はイストワールさんと一旦別れて、コンパさんの案内でクモツ神社へと向かった

十一ノ巻

コンパ「あいちゃーん、待ったですか？みんなを連れてきたですよ！」

ここがクモツ神社……で、あそこにいるのがこの世界のアイエフさんか……なるほど、巫女服着てるから本当に巫女のようにだ

アイエフ「あら、意外と早かったじゃない。迷子にならなかった？コンパのことだからもつと掛かるかと思ってたわ」

「そういう意外とすんなりと着いたな」

コンパ「むう、あいちゃんひどいです。お城と神社ぐらいで迷子になったりしないですよ」

「他は迷子になるってことか？」

アイエフ「冗談よ。迷子はともかく、寄り道したり、ネプ子達が問題起こしたかもしれないじゃない」

「それはあり得る可能性だ。でも大人しかつたな……」

ネプテューヌ「あいちゃんひどいよー！わたし達はSSS級ミッションを華麗に達成してきたところなんだからね！」

アイエフ「ごめんごめん、冗談だつてば。みんな久しぶり、変わらないようね。待ってたわよ」

飛鳥「ふふつ、波戸ノ国の人達はみんな仲良しですね。神社の巫女は硬いイメージがあるんですけど」

一馬「確かにそういうイメージはある……」

アイエフ「そちらは刃仁破四忍の二人。それと……誰？まあまずはそつちの二人から、どうやらネプ子の言つたとおり同盟を結べたようね」

飛鳥「はい。初めまして飛鳥です。ねぶちゃん達と行動するように言われています」

アイエフ「そんなに畏まらなくていいわ。私はアイエフ。波戸ノ国のクモツ神社の巫女よ」

焰「焰だ。私たちのことや同盟のことを知つてるとなると、お前も只者じゃないな」

アイエフ「ふふつ、ご想像にお任せするわ。さてあなたは……」

一馬「坂田一馬、ネプテューヌ達と共にスチーム・レギオンと戦う事になつた………旅人だ」

一応嘘ついたが………

アイエフ「嘘つかないで、本当のことを言つたら？安心して、信じるわよ」

一瞬でバレた!?仕方ない

一馬「本当は……」

ネプテューヌ「一馬は別の世界からこの世界に来たんだよ！」

一馬「おい！」

アイエフ「別の世界………これはちよつと流星に信じ難いけど………本当なの？」

一馬「はい」

アイエフ「………どう見ても嘘ついてる顔じゃ無いわね。分かった、信じるわ。これからよろしくね一馬」

似たようなことイストワールさんにも言われたなあ

一馬「はい！」

アイエフ「それじゃ本題に入らせてもらうけど、クモツ神社の説明は………一馬に要るわね」

一馬「お願いしまーす」

アイエフ「幻影夢忍界の西には『府示山』があるわ」

一馬「『富士山』？それなら」

クリスタル「一馬、アイエフが言っているのとお前が知っているのとは違うと思うぞ、読みは同じ『ふじさん』だがな。多分字が違う』

そうか………

アイエフ「府示山がどうかしたの？」

一馬「いえ、何も！」

アイエフ「そう、続けるわね。そこには死者の魂の行く先、冥界へ繋がってるって話の『クモツ比良坂』と呼ばれる道があつて、そのクモツ比良坂を管理しているのが『クモツ大社』で、クモツ神社は分社。全国各地にあるのよ。だから国に属してないの」

ネプテューヌ「えっ!? お祭りだったり、新年には参拝しに行く所じゃないの!？」

アイエフ「そんなわけないでしょ。全く……」

ノワール「クモツ比良坂の管理って何か特別なことでもやってるの？」

アイエフ「結果よ。封印とも言えるけど。供物を奉納し死者を慰める儀式をおこなっているわ。クモツ比良坂は常に霧で覆われており、強い思念に反応してさまざまな幻影を映し出すって言われていて、中には、死んだはずの人が現れて、『お前も落ちて来い、こちらに来るのだ』って話もあつて、だから管理が必要なの」

FF10の異界よりおつかねえな……… いや、異界とは違うのかな？

ノワール「そ、そうなのね……… 聞かないや良かったわ……」

コンパ「だから、お葬式やお祓いとかをクモツ神社でやっていたですね」

アイエフ「それじゃ今度こそ本題よ。クモツ神社には悩みや相談事が持ち込まれるんだけど。スチーム・レギオンの襲撃のせいで手が回らないのよ。中には危険なものも多

くて……………」

要はクエストか

ネプテューヌ「嫌な予感……………もしかしてわたし達がその危険なことをやるの？」
コンパ「クモツ大社に話をしたですよ。ねぶねぶ達が協力するですつて、いーすんさんには事前に相談済みです」

ネプテューヌ「な、そんなの聞いてないよー!!大名だからつて、いーすん勝手にオツケーしないでよね!」

アイエフ「わたし達も助かるわ。女神四忍と刃仁破四忍が引き受けてくれるなら、特に危険なものをお願いするわね」

一馬「あの一、オレも手伝いたいなーなんて……………」

アイエフ「アンタ……………戦えるの?」

一馬「ええ!」

ネプテューヌ「一馬も戦えるよ!だつて一緒に磨愛辺国でスチーム・レギオンと戦つたもんねー!」

一馬「こいつの言う通りですよ」

アイエフ「ネプ子と言うのなら……………分かったわ。お願いするわ、一馬。クモツ大社にも後で言っておくから」

一馬「どうもありがとうございます」

飛鳥「危険でも協力はするけど、そんなにたくさんあるなら、別の忍務がある場合はどうしたら？」

アイエフ「こっちはミッシヨンの合間でいいわ。クモツ神社からの依頼を受けて解決してくれたらちゃんと報酬も出すわよ」

あーなるほど、クエストと言うよりはワールドで言うところのバウンティ、ライズで言うところのフリーサイドクエストみたいなものか

焰「そういうことなら異論はない。これも修行のうちだ。バイトみたいな物だと思つて引き受けよう」

ネプテューヌ「あいちゃんやみんなが困つてるならやるしかない！なんだかんだ断れないのが主人公だからね。でも、まずは簡単なのからお願いね」

一馬「それもそうだな……」

アイエフ「それじゃ試しにみんな一つずつ受けてもらえるかしら」

コンパ「もし怪我してもわたしが治すので、安心して行って来てくださいです!!」

それは助かる……かも。さて、どれを……お、良いのがあった

一馬「アイエフさん、オレはこれで」

アイエフ「いい、意外と早く選んだわね……どれどれ……これなら良いわよ」

ネプテューヌ「えー!?一馬、もう選んだの!」

ベール「どんな依頼ですの!?!危険な依頼だったらわたくしも!」

一馬「えーつと、スライヌ討伐?」

ノワール「スライヌ討伐……まあそんなに危険じゃ無いわね」

一馬「ああ、んじやサクツと討伐……」

クリスタル『一馬、我はサポートはしないぞ。代わりに……』

クリスタルがそう言うと、オレの目の前にロングソードが現れ、地面に突き刺さった。

この長さでデザイン……CCFF7のやつだな。バスターソードを装備するまで

ザックスが装備してたやつ……しかしあちらとは違って鞘に入ってるし、何より

ちよつと重いな……これは

クリスタル『この剣のみで戦え、因みに重さもあるぞ』

これは良い威力が出そうだ

コンパ「ふえ!?!いきなり武器が現れたです!」

アイエフ「それ、アンタの忍術?」

一馬「いや、これはオレの持つてる石の効果で……」

アイエフ「石の効果なの!」

一馬「ええ……」

コンパ「不思議な石です」

アイエフ「まさか、その石に妖怪が取り憑いて……」

一馬「妖怪は取り憑いてないっすよ」

アイエフ「あらそうなの」

一馬「そうです。んじやオレは一足先に……」

ブラン「一馬、行くのなら……これ」

オレはブランから小袋を渡された。結構重みがあるな

一馬「これは？」

ブラン「この世界のお金よ、露店があるから、戦いに役立ちそうなのを買いと良いわ」

一馬「サンキューブラン。んじや行って来まーす！」

ベール「無茶したらダメですわよ！」

オレはクモツ神社を後にした

十二ノ巻

一馬「ここが露店か……」

町に来て、看板に露店の場所が書かれていたからすぐに見つけれたぜ。

一馬「人で賑わってるなあ〜」

クリスタル『一馬、一応言つとくが、どこから来たつて言われた時、簡単に異世界から来たなんて言うなよ、笑い物にされるぞ。旅人つて言つとけ』

りよーかい

一馬「さーて、何を買おうか……」

「そのあんちゃん!」

一馬「ん?」

「あんただよ、その刀を背負つたあんちゃん!」

一馬「あ、オレですか?」

オレは突然店のおっちゃんに声をかけられた……… 道具屋か………

「あんちゃんここじゃ見かけない顔だな……… もしかして旅人か?」

一馬「まあ、はい」

「その刀だけでよくここまで来れたなあ、どうだ？うちで丸薬買っていかねえか？」

一馬「丸薬？」

正露丸のことかな？

「丸薬を知らねえとは……さては物凄く遠いところから来たな？」

一馬「はい、すつごく遠いところから」

「そうか……よし！説明するぜ、丸薬つてのは……」

丸薬とは簡単に言うのと忍達が主に任務中に食する携帯食らしい。ちなみにクリスタルが言うには地球にも存在してるとのこと……月光達がいるから丸薬もあるよな……うん。それに正露丸つて名前の薬もあるし……

「以上が丸薬の簡単な説明つて言ったところだ。分かったか？」

一馬「はい！」

「そうかそうか、よし！聞いてくれたお礼だ。ほらよ」

おっちゃんの小袋を二つくれた

一馬「これは？」

「片方には傷を癒すのに最適な兵糧丸、もう片方には疲労を癒す飢渴丸が入ってるぜ」

一馬「ど、どうも……えーつと代金は……」

「金はいらねえよ、さつきも言ったろ？聞いてくれたお礼だつて、けど、今度からは金は

取るぜ?」

一馬「ありがとうございます!それじゃあオレはこの辺で!」

オレは店を出た

「おう!気をつけなよ!若い旅人!」

なんかツイてるなあ〜よし!依頼書に書いてあったガラパの森へ行くか!

「ガラパの森」

一馬「ここだな……………」

森へ着くと、いきなりモンスターがお出迎えしてくれた

スライヌ「ぬら〜」

ネコマサ「フシャー!」

へえ、いろんな見た目のやつがいるんだな。どれも可愛い見た目だが、モンスターは

モンスター……………倒させてもらうぜ。メインはスライヌだがな。オレはロングソード

を抜刀して構えた

一馬「いらつしやいませ!」

そのままモンスター達に突撃した

一馬「はっ!おりゃ!」

スライヌ「ぬらっ!?!」

テングダケ「っ!？」

口程にも無いな………むっ

ネコマサ「シャー！」

猫武者が刀を構えながら襲ってきた。チャンス！試してみるか

一馬「よっ！」

オレは猫武者を倒して奴が手放した刀を拾った

一馬「こいつは使わせて………ん？」

猫武者消滅と同時に刀も消えた

一馬「奪った武器で戦おうと思ってたが………」

クリスタル『諦めることだな』

一馬「はあ………」

おぼけスイカ「！」

一馬「いたっ!？」

あの野郎、種を飛ばしてきやがった………仕返してやらあ！

テングダケ「！」

一馬「ぐおっ!？」

すると後ろから何かに殴られた。あのキノコか！さつき切った奴の仲間か！

クリスタル『ボケーつとする暇があったら戦え、神社でも言ったがサポートは一切しないぞ』

一馬「そうだったな…………… テメエら、さっきの仕返しだ!!!」

オレは近づいてキノコ、そしてスイカを被ったお化けみたいなのを倒した。霊体だが切れるのか……………

一馬「さてと、ターゲットは…………… いた!」

スライヌ達「ぬらっ!?ぬらっ!」

オレが睨むと、スライヌ達は逃げ出した

一馬「逃すか!」

オレは追いかけた…………… しばらく追いかけていると、開けた場所に出た。そこにはスライヌが数匹いた

一馬「さて、鬼ごっこはおしまいだ。人に迷惑をかけた罪は償ってもらうぜ!」

するとスライヌ達は一斉に集まった。まさかこれは!スライヌ達は融合してどんどん大きくなった

スライヌ(大)「ぬらあ〜」

そしてオレの目の前に巨大なスライヌが現れた

一馬「そうきたか……………」

だが、やるしかねえ!

一馬「やつ!やつ!はあ!そら!」

オレは四回連続で切った……………が

スライヌ(大)「ぬら?」

効いてなかった。くつ、ならば!

一馬「はあ……………でえやあ!」

オレは突いた。がそれもぽよんつと跳ね返され、更に

一馬「あつ!」

跳ね返された反動でうっかりロングソードを手放してしまった

スライヌ(大)「ぬら!」

一馬「がはっ!」

それを見たスライヌはしめた!と言わんばかりに、オレを体当たりで吹っ飛ばした

一馬「くつ……………はっ!奴は?」

何処だ何処に……………まさか!

スライヌ(大)「ぬ……………ら……………!!」

気づいた時には上から……………押し潰された……………

一馬「ぐわああああ!」

スライヌ（大）「ぬららら〜」

笑っているのか……………だが、負けるわけにはいかねえ

クリスタル『どうする？この脅威をお前の考えで突破できるか？』

ああ、出来る……………勝利の法則は決まったぜ！

一馬「おいデカブツ、笑つてるところすまねえが……………最後に勝つのは……………」

オレだ」

オレは立ち上がり、不敵に笑みを浮かべながらスライヌにそう言った

スライヌ（大）「……………ぬらああああ!!!」

それにキレたのかスライヌは大きく飛び上がった。そう来るだろうと思つたぜ

一馬「勝利の法則は決まった！はっ！」

オレは少し穴を掘って、そこへロングソードを思いっきり突き刺した。ただし刃が上を向くように。あとはしっかりと埋めて、押し潰される範囲から離れた。落ちてくる間に、オレはおつちやんから貰った兵糧丸を一つ食べた……………苦い……………が、身体中の痛みが引いていくのを感じた。薬草食ったらこんな感じなのかな……………

スライヌ（大）「ぬらあ〜」

スライヌは落ちてきて、ロングソードに……………刺さった。よし、成功だ！

スライヌ（大）「ぬらあああああ!？」

そしてスライヌは破裂し、元のスライヌ達に分裂した

一馬「よっこいせ！」

オレはロングソードを引き抜いた

スライヌ達「ぬらあく……」

一馬「さて、これでフィニッシュだ」

オレはスライヌを次々と切り裂いた

一馬「ふう……」

クリスタル『まさかあんな方法で……』

一馬「まあ、勝てたからよし、さて帰るか」

クリスタル『帰り道もサポートしないぞ。自分の足で国に戻れ』

一馬「はい」

そしてオレは何とか波戸ノ国へ戻った。道中川で手を洗ったぜ。後、ロングソードは消えた

「クモツ神社」

一馬「ふう……」

アイエフ「あら、おかえりなさい」

コンパ「一馬くん、大丈夫ですか？」

一馬「ええ、何とか……ちよつと予想外の事態が起こったけどね」
 ネプテューヌ「予想外って何!？」

あ、ネプテューヌ又達帰ってたんだ……あれ? 飛鳥さんと焰さんがいない……ま
 だ帰ってきて無いのかな

一馬「ああ、実は」

オレは依頼の時に起きたことを説明した

一馬「と言うわけ……わっ!？」

話し終えた途端にベールさんが抱きついてきた

ベール「一馬くん、本当に良かった……無事で……」

一馬「そんな大袈裟な……」

ベール「大袈裟になりますわ!」

一馬「ベールさん……」

ノワール「しかし、よく倒せたわね……」

一馬「まあ、うん作戦勝ちというか……」

ブラン「しかし、合体して大きくなるとは……」

ネプテューヌ「ともかく、一馬が無事で良かった!」

アイエフ「一馬、これ報酬よ、よく頑張ったわね」

アイエフさんからお金を貰った

一馬「ありがとうございます」

ネプテューヌ「ふう〜疲れたから拠点へ戻ろうよ、こんぱも来る〜?」

コンパ「はいです!」

一馬「おいおい、飛鳥さんと焰さん、まだ戻って来てないぞ?」

ネプテューヌ「あいちやーん2人が帰ってきたら案内お願い!」

アイエフ「全く……分かったわ」

ネプテューヌ「よろしくねー!じゃあ拠点へレッツゴー!」

オレ達は拠点へと向かった

十三ノ巻

ネプテューヌ「とうちやーく！ここがわたし達の基地だよ！」

一馬「おおう」

ここが……まず出てくる言葉が……THE和室だ……おつ

一馬「おお、手裏剣に苦無に刀が……」

オレは壁にあつた武器を手に取つて眺めた

ノワール「嬉しそうね……」

ベール「まあ、目がキラキラしていますわね」

ネプテューヌ「武器を見て興奮するなんて、男の子だねえ」

ブラン「振り回したらダメよ」

一馬「分かつてゐるって……よし、終わり」

ブラン「もうういいの？」

一馬「ああ」

ネプテューヌ「それにしても……はあーっ疲れたい。あすちゃんやほむほむに

は悪いけど、先に休もつと。まずは遊ぶ？おやつ？それとも……」

ん？ネプテューヌがオレの方を向いた？

ノワール「わ、た、し。じやないわよ。もうふざけるのもほどほどにしなさいよね」
なんでわたし？オレの方へ向いたのと何か関係があるのか？

ネプテューヌ「あー、ノワール！わたしの台詞取らないでよね、冗談を楽しむくらい
の余裕がないと嫌われちゃうよー」

ノワール「そ、そのくらいで嫌われるわけないでしょ。もう、調子狂うわね」

ベール「そうですね。みなさん、緑茶でもいいかがですか？お茶をいただきながら、お
二人の帰りを待つ、そして何をするか決めれば良いですわ」

こっちのベールさんもお茶好きなのか……

ネプテューヌ「やったー！おやつだ！」

一馬「そういやここへ来てから丸薬以外何も口にして無いな……」

ノワール「もう、しょうがないわね。まあいいわ、少し休憩しましょ」

ベール「コンパさんも一緒に緑茶はいかがですか？」

ブラン「今後のことを考えると、この辺で修行することも考えた方が良いわね」

ネプテューヌ「えー、修行？」

一馬「修行か……」

やっぱ重い物背負ってトレッキングとかかな？

コンパ「修行…… あー！それならちょうど良かったです！この建物の裏で、魂波流秘伝の修行を出来るようにしたですよ。ついて来てくださいです」

コンパさんはスタスタと外へ出た

ノワール「秘伝って……」

ブラン「魂波流の修行で、裏でやるって言ったらアレよね。『乳桃瞑想（にゆうとうめいそう）』……」

ベール「行くしかありませんわね…… コンパさんは魂波流の顔役ですし、断れませんか。それに、わたくし達のために用意してくれたと言うのならやるしかありませんわ」

秘伝の修行…… 気になる！てなわけでオレ達はコンパさんについて行った。この時オレは後悔した。まさかあんな修行だったなんて……

一馬「な…… あ……」／／／

着いた場所は温泉だった…… そしてネプテューヌ達は変身してコンパさん曰く修行用の衣装に着替えた。その衣装が薄着でかなりエロくこの時点でアレのだが、一番はここからだつた

パールハート「せっかくの温泉なのに、普通に入れないなんて。きやつ、とつと。相変わらず難しいわね……」

今オレの目の前では、薄着のエロ衣装を着たネプテューヌ達が、温泉に浮かんでいるでっかい桃の上に座ってバランスを取っている

パープルハート「……………はっ！そうよ、自然と一体化するのよ！水の流れに逆らわず、桃と共にわたしは水になるの」

グリーンハート「もつてもいない力に頼るのは止めた方が良いですわ。ネプテューヌはじつとしていられない性格ですし、苦しいでしょうけどね」

こつちも苦しいんだよ！色んな意味で！

ホワイトハート「そうだな、落ち着きも足りねえし、ちゃんと修行になって良いんじゃないかねえか？」

ブラックハート「ブランも普段ならともかく、その姿だと落ち着きないでしょ。この修行ならわたしかベールが一番よね」

一馬「あ、あのコンパさん、これが修行？」

コンパ「はいです、魂波流秘伝の修行、乳桃瞑想です……………そういえば一馬くん、ここへ来てから顔が真っ赤ですよ？」

そりや真っ赤になるよ！修行がまさかこんなエロかったとは……………

一馬「ひやつ!?ぜ、全然赤くなっていないよー」

コンパ「真っ赤です」

パールハート（まあ、一馬ったら赤くなってる。かわいいわね）

グリーンハート（一馬くんの顔が………かわいいですわ！）

クリスタル『やれやれ、まだなのか………慣れないといつか大変な目に遭うぞ』

一馬「どう言う意味だ」

クリスタル『教えない』

一馬「この野郎………うおっ!？」

オレがネプテューヌ達の方を見ると、そこではノワールとブランが桃をぶつけていた

ホワイトハート「うわっ………おもしろえ、叩き落としてやる」

えーっと落ちたら下温泉、ネプテューヌ達は薄着………ここから導き出される答え

は………ああ完全に理解した。一つ言いたい、こんな修行考えたバカは誰だー!!!

グリーンハート「はあ………落ち着きが無いのは二人も一緒ですわね。わたくしの

様に静かな水面の心を持つことをオススメしますわ」

ブラツクハート「なに大人ぶってんのよ。パールは若さが足りないだけでしょ!」

ノワールウ!?それはダメだろ!パールさんはすっげえ綺麗なのに!

グリーンハート「ふっ、ふふふ。あーきゆうにばらんすがー。えいつ」

パールさんの桃がノワールの桃へぶつかった。気にしてるよ………完全に気にして

るよ

ブラックハート「あ、危ないわね！静かな水面の心はどうしたのよ！」

グリーンハート「わたくしは水、そして浮かぶ桃。静かな水面とて、嵐が来れば荒波となります。まずは嵐を止めなければいけませんわよね？」

それらしいことを言ってるけど、さっきの発言気にしてるよね？

パープルハート「水に桃って、わたしが最初に言ってたでしょ。ちよつと、みんな止めて。暴れるとこつちまで…… あつ、あつ、もうダメ！」

全員落ちた……

コンパ「みなさん、魂波流の基本がなつてないですよ。波戸ノ国を守る忍者として頑張るです。それでは、仲良くやり直しですよ」

パープルハート「次は頑張らないと……」

そしてみんな温泉から出て来たのだが……

一馬「っ!」

ブラックハート「どうしたのよ一馬…… あっ!」(手で隠す)

ホワイトハート「何驚いて……っ!み、見るんじやねえ！」(手で隠す)

グリーンハート「あら…… ふふつ、もっと見ても良いんですのよ？」(見せつける様なポーズ)

パープルハート「そうね、目に焼き付けると良いわ。わたし達のか、ら、だ、をね」(見

せつける様なポーズ)

全員濡れて、透けていた…… あ、やべ

一馬「ぐはあ！」(鼻血ブー)

会心の一発！オレは鼻血を出しながらぶつ倒れた…… ああ、なんかどーでも良くなつて来た……

ブラックハート「一馬!？」

コンパ「一馬くん大丈夫ですか!？」

グリーンハート「あらあら……」

パープルハート「青春の一ページにはなったかもね。ふふっ」

ホワイトハート「気を失っていやがる……」

コンパ「さ、みなさんは修行の続きです。一馬くんはわたしが見ておくです」

クリスタル『やれやれ……』

十四ノ巻

気がつくとも基地に戻っていた……オレがぶつ倒れてる間に飛鳥さん、焰さんも帰ったようで、オレが起きた時には二人とも基地に来ていた。後、アイエフさんも居た。あれ？コンパさんが居ない

一馬「なあ、コンパさんは？」

ネプテユーン「こんばなら……あれ？どこへ行ったんだっけ？」

ノワール「もう、イストワールのところでしょ！彼女は顔役なんだから」

ネプテユーン「そうだったそうだった」

忘れるなよ……

焰「坂田、お前鼻血を出して倒れたんだってな」

一馬「……は？」

飛鳥「……一馬くんのエッチ」

一馬「返す言葉もございません」

ベール「あの時の一馬くん、可愛かったですわ……思い出すだけで……うふふ

ふ」

ブラン「よくよく考えてみたら、あの格好は確かに少し刺激があるわね」

一馬「少しどころじゃない様な……」

ノワール「信じられない様だけど、あの修行は昔からあの格好らしいわ」

一馬「そうなのかなぁ」

アイエフ「飛鳥も焰も馴染んでるわね……これで長年戦ってたっていうんだか

ら、不思議よ」

するとコンパさんが来た。慌てている様だが……

コンパ「ねぶねぶ！いーすんさんから伝令が来てます！緊急事態です！緊急ミツシヨンです！」

ネプテユーン「ええー！?!緊急ミツシヨン!?!依頼もあるのに……忍者って忙し

すぎでしょー！」

仕事って大体そんなもんだろ……多分

ベール「緊急ミツシヨンだなんて、断る理由がありませんわ！」

コンパ「はいです。波戸ノ国との同盟国、武威ノ国（ぶいのくに）からの緊急要請です！いーすんさんは武威ノ国と連絡を取り合って、スチーム・レギオンへの対応を協議中だったです」

一馬「スチーム・レギオンが!?!」

コンパ「あ、一馬くん、お体は大丈夫ですか？」

一馬「ああ、バツチリですよ！」

コンパ「それは良かったです」

焰「スチーム・レギオンが動いたか……ヨウゲイマがいるかもしれない。次は逃さん」

飛鳥「うん！波戸ノ国と同盟を結んでるって事は武威ノ国も磨愛辺国と同盟国つて事で良いよね！……あれ、武威ノ国つていうとどこだっけ？」

ブラン「武威ノ国はそこまで遠くはなかったはずよ。早く助けに行きましょう」

一馬「ああ！」

ネプテューヌ「同盟国のピンチ！おっと、こうしちやいられないね、あいちゃん、こんぱ、行ってくるよ！」

アイエフ「武威ノ国は波戸ノ国から南、『ヘドセト峽』を越えればすぐよ、ネプ子は真面目にやればできるんだから気を引き締めなさいよ」

コンパ「ねぶねぶのやる気スイッチが入ったみたいですし、大丈夫です！みんな気をつけて、いつてらっしゃいます！」

こうしてオレ達はヘドセト峽へ向かった

「ヘドセト峽」

ベール「ヘッドセト峽に入りましたわ」

一馬「この先に武威ノ国が……ん？これは！」

オレは地面に何かの跡があるのを見つけた

一馬「この跡は……もしかして、戦闘の跡か？」

ベール「もしかして、スチーム・レギオンでしょか？」

焰「いや、近くに妖怪の気配を感じる。妖怪と忍じやないか？」

なるほど、モンスターか……一理ある

ブラン「妖怪ならどこにでもいるわ。ましてやこんな人気の無い峡谷なら当然よ」

飛鳥「ええ、結構いそうですよ。みんな気をつけて！」

ノワール「それならここから変身して、峡谷を抜けましょ。みんな、遅れるんじゃないわよ？」

いわよ？特に一馬」

一馬「ま、まあ何とか……頑張ってみるぜ！」

ネプテューヌ「分かっているって、ダンジョン前では必ず変身しなきゃいけないからね
！」

オレの場合は最初はこのままで戦うか！みんなは変身し、オレはロングソードを装備
した。そして腰には……ショットライザーが装着された。何で？

クリスタル『射撃武器はあると良いと思つてな。それに』

いざという時には変身できるって事か。了解

パープルハート「変身完了ってあら？一馬は変身しないの？」

一馬「ああ、まずは自分の身体能力で何処までやれるか……」

ブラックハート「ミツシヨン中なのよ!？」

グリーンハート「危険ですわ!」

一馬「分かっているヤバイ時は変身するから。これで」(ショットライザーを指差す)

ホワイトハート「そいつは………初めてお前と会った時に腰に付けてた銃か」

一馬「ああ、こいつはショットライザーってんだ」

焰「その銃で妖怪と戦ったのか？」

一馬「厳密には、変身してですけどね」

飛鳥「え、変身!？」

パープルハート「つまりそのショットライザーに変身する力があるって事？」

一馬「ま、まあそうなるかな？」

本当はキーもいるけど

ブラックハート「分かったわ……でも、無茶はしないでよね」

一馬「ああ」

ブラックハート「じゃ、改めて行くわよ!」

オレ達は走り出した。お、来たか！モンスター共

一馬「いらつしやいませ！」

オレはロングソードを抜刀した

飛鳥「何でいらつしやいませなの!？」

一馬「気にしないでください」

焰「いや気にするぞ！もしかして、何処かに店があるのか？」

ブラツクハート「あるわけないでしょ！」

そんな会話を他所に、オレはモンスターを次々と切つていった

ホワイトハート「ふーん、変身しなくても少しはやる様だな」

一馬「どうも………っ！ブラン！」

オレはバツクルからショットライザーを取つて、ブランに向けて構え、撃つた

一馬「うっ!？」

痛え！咄嗟に片手で撃つたが、反動がすげえ………
な
今度からは両手で構えないと

ホワイトハート「うわあ!？」

撃たれた弾はブラン………
をすり抜けて、後ろに迫っていたモンスターに当たつ

た

妖怪「プギヤ!？」

ホワイトハート「あぶねーな! 当たったらどうすんだよ!」

一馬「すまん、お前の後ろに敵が迫っていたから咄嗟に……」

ホワイトハート「後ろに敵? …… あ」

ブランは後ろを向いた。そこには倒れて消えかけているモンスターがいた

ホワイトハート「あ……… ありがとうよ………」

一馬「良いって事よ。オレだって、伏せろって言わなかつたしな……… ごめん!」

伏せろって言っとけば………

ホワイトハート「謝んなくて良いって」

一馬「そ、そうか………」

飛鳥「二人ともー! 早くー!」

ホワイトハート「あっ! いけねえ! 行くぞ! 一馬!」

一馬「おう!」

オレとブランは走った。やっぱみんな忍者だから足が速いなあ

一馬「邪魔だ!」(ショットライザーを両手で構える)

オレは向かって来たモンスターをショットライザーで次々と撃ち抜いていった。そ

して、滝のある場所へ入った。その時だった

一馬「おお、滝が綺麗だ……ん？」

上から人が落ちて行くのが見えた……不味い！

飛鳥「今、上から人が！忍の女の子が滝壺に飛び込みました！」

ブラツクハート「妙にゆっくりじゃなかった？何かの忍術かしらね」

一馬「っ！」

オレはロングソードとショットライザーを置いて、滝壺に飛び込んだ。少しでも軽くしないと

パープルハート「そんなことも知らないの？アレはスローモーション効果……

あれ？一馬は？」

ホワイトハート「一馬ならさつき武器を置いて飛び込んだぞ」

「水中」

息が持つうちに見つけないと……何処だ、何処に……意外と深いな……クリスタル「一馬！目の前にいたぞ！」

目の前を見ると、確かにいた。待ってるよ！よし、手を握った！あれ？この人、よく見たら格好が……って考えてる場合じゃねえ！オレは女の人の手を握りながら、上がった。ん？格好を見て考えてしまったが、それ以前にこの人怪我をしている！

一馬「ぜえ……はあ……はあ……ぜえ……」

? 「はあ……… はあ………」

ホワイトハート「おい! 一馬が上がって来たぞ! 落ちて来た奴も一緒だ!」

グリーンハート「一馬くん! 大丈夫ですか!? そちらの方も………」

一馬「お、オレは大丈夫です……… それよりこつちの人怪我しますよ………」

飛鳥「あーっ! 本当だ! 早く手当てを!」

? 「誰っ?! 邪魔をしないで!」

おお、警戒されてるゝ

パープルハート「お、落ち着いてよ。わたし達は波戸ノ国の忍者よ」

? 「波戸ノ国の………」

そしてネプテューヌ達は女の人を手当をした。オレはクリスタルに頼んで一瞬で服を乾かしてもらった

ユウキ「滝壺から引き上げて、手当してくれたことは感謝するよ。ありがとう。私は武威ノ国の忍者、ユウキ。覇亜茶流（ばあちやりゆう）のユウキ。そして、武威ノ国の忍者、ある姫の忍者。それで君達は何でここに?」

目的の国の忍者だったか………」

パープルハート「あなたが、ユウキ? わたしは波戸ノ国の忍者ネプテューヌ。対外的にはパープルハートって言えば分かる?」

ユウキ「あー、君達が、見たことあると思っただ。波戸ノ国の最強の忍者、女神四忍。もちろん知ってる。でも、なんで7人もいるの？それに一人は男の子だし……」

一馬「オレは坂田一馬、遠くからやって来た旅人……だが今はこの人達と一緒に戦っている」

パールハート「どうして嘘を言うのよ」(小声)

一馬「異世界から来たーなんて言っても信じてくれるか？普通は」(小声)

グリーンハート「そ、そうですわね……」(小声)

ユウキ「旅人ねえ……あなた達は？」

飛鳥「私は磨愛辺国の刃仁破四忍の一人飛鳥。えつと、磨愛辺国と波戸ノ国は臨時同盟中で、こちらの焰ちゃんも忍務で行動を共にしてるの」

ユウキ「波戸ノ国と磨愛辺国が同盟……？長年戦ってたはずだよ」

ホワイトハート「スチーム・レギオンって知ってるか？そいつらが誰かれ構わずケンカ売ってるからな。敵の敵は味方って奴だな。今は、武威ノ国からスチーム・レギオンが攻めて来たって救援要請があつて向かってるとこだ」

ユウキ「なっ!? やっぱり。こんなことしてる場合じゃない。姫のところに戻らないと！」

グリーンハート「おまちなさ。一人では自分の国に戻れなかったのでしょうか？何が

あつたか話してくださいるかしら」

ブラックハート「わたし達も武威ノ国に行くから、情報を知りたいのよ。急いでるならさつさと話して。一緒に行つたほうが早いわよ」

ユウキ「んー、噂が本当なら君達強いんだよね。君は分からないけど」(一馬を見る)
一馬「あはははは……」

ユウキ「……… まあ良いか。それなら、武威ノ国を、姫を助けるのに協力してくれる？」

飛鳥「うん、もちろん。私達はの為に来たんだから。約束する、忍びの名に懸けて」

一馬「はい！国を、人を助ける。それがオレなので！」

ユウキ「分かつたよ。それじゃあ話すね」

ユウキさんは話してくれた。武威ノ国で何があつたのかを………

十五ノ卷

ユウキ「私は武威ノ国周辺の妖怪が増えたことと、ある抜け忍を探すっていう二つの任務についてたんだ。その途中、少し前に姫から連絡があつて、武威ノ国に何かあつたみたい。それがきつとスチーム・レギオン。だから、急いで城に戻ろうとしたんだけど、妖怪が次から次に湧いて襲つてきてね。それでメンドーになつて滝に飛び込んだ」

モンスターが次々に湧く……… 偶然だろうか………

グリーンハート「それは大変でしたわね。忍者が逃げ切れないほどの妖怪、偶然でしようか」

焰「妖怪が忍を妨害なんてするか？逃げようとした忍を追つてくるとも思えないんだが、なんか気になるな」

一馬「はい、仮説。誰かに洗脳……… 操られてる……… つてところですかね？人を意図的に襲うのつて、意図的に操られているつて事に………」

ユウキ「正解、一馬の言う通り、妖怪達は操られてる。間違いなくあいつのせい、いつも邪魔ばかりして、また姫を狙つてる」

ストーカーか？そいつは

ユウキ「姫はね、本当に可愛いんだ。妹みたいで、ちょうど一馬と……とここで君何歳？」

一馬「えつと…… 14です」

ユウキ「14歳で旅か…… それはともかく、14歳なら姫とそんなに歳は離れてないね」

オレとそんなに歳は離れてないのか…… そのああるつて姫は……

ユウキ「姫の話の続きをするけど、笑った顔、照れた顔、拗ねた顔も、怒った顔も全部！ そんな姫だから、狙う奴がいる、私が守らないと」

一馬「ユウキさん…… つてベールさん？」

ベールさんがいきなりユウキさんに近づいた。それもキラキラした顔で

グリーンハート「その気持ち分かります。優しくて、守つて、甘えられて、それ以上に甘やかす。それこそが理想の姉妹ですわ！ 弟も良いですけど、やはり妹も捨てがたいですわ！」

あースイツチ入ったっぽい

ユウキ「姫は簡単に甘えたりしないよ。気丈に振る舞つてるかと思えば、気がついたら疲れて眠つちやつたり、会つてみると分かるよ。本当の姫の可愛さはね」

グリーンハート「なるほどそうでしたか…… ユウキさん！ これまで、姫にお会い

する機会もなく、ご挨拶したいと思っていましたわ！是非、ご紹介してください！

あーあ、興奮してるよ

ユウキ「どうしようかなー。姫が良いなら良いんだけど。でも波戸ノ国にも話せる人はいたんだね。いいよ、私から聞いてあげる」

パープルハート「二人のテンションがおかしいわ……………。パールも妹系の子にとりあえず手を出そうとするのそろそろ止めたら？今は一馬がいる事だし」

一馬「あははは……………」

パープルハート「わたし達だって最近妹に会っていないのに……………。これも時代の流れなんだから、パール、そろそろ諦めたほうがいいわよ」

一馬「驚いた……………。この世界にもいるんだな……………。ネプギア達は」

ホワイトハート「その言い方、知ってるんだな、ロム達のことを」

一馬「ああ、つと言つても別の世界の……………。だけだな」

ホワイトハート「なるほどな」

ブラックハート「これに関してはネプテューヌの言う通りね。ああある姫つてあれでしょ。伝説の血筋とかって。失礼があつたら同盟に深いヒビが入るわよ」

伝説の血筋、気になるな

グリーンハート「これは、わたくしの念願。使命のようなものです。その程度の障害

で諦めるわけにはいきません」

一馬「いや、諦めないんですか」

グリーンハート「当然ですわ！」

ブラツクハート「一体何と戦ってんのよ」

飛鳥「あの、空気読めてないかもだけど、話が終わったならそろそろ行かない？ ユウキちゃんも元気になったみたいだし……」

一馬「それもそうですね。こうして話してる間にももしかしたら……」

ユウキ「そうだった！ 話は終わり、約束通り協力してもらおうからね。来て！」

オレ達はユウキさんに着いて行つた。途中モンスターがわんさか湧いてきたが、難なく倒していった。それにしても、ユウキさんは爪が武器か…… 見た目も相まって何処か猫っぽい…… っと、しばらく進んでいると

ユウキ「もうすぐ武威ノ国だ。みんなやるじゃん、会えたのはラツキーだったかも」
お、もうすぐかあ

一馬「いやあくそれほど」

飛鳥「私、武威ノ国は初めてです。自然が多いんですよ」

一馬「自然が多いところか……」

グリーンハート「ふふっ、楽しみですわね。もうすぐわたくしのあある姫に会えます

し」

この人さつきからこんなテンションだよ。しかもわたくしのあある姫って……この人もユウキさんと言っていたストーリーカーと同族じゃ……

ユウキ「ちよつと待って。姫は私にしか心を開かないし、軽々しく話すことは許されないんだから」

ホワイトハート「わたしたちの目的はスチームレギオンを倒して、武威ノ国を救う事だ、忘れてねえだろうな」

グリーンハート「……………わ、わたくしが忘れるはずありませんわー」

一馬「絶対忘れてただろ……………」

クリスタル『一馬！前方に何かが隠れているぞ！』

何っ!?

一馬「っ！そこにいるのは誰だ！」

オレはショットライザーを前方に構えた。すると灰色の肌をしたいかにも普通じゃない老人が現れた

？「どうるふふふ、よくぞ見つけたな小僧。そして、峡谷を抜けて来るとは、さすが覇亜茶流のユウキ」

ユウキさんを知っている？

ユウキ「お前は、妖壺太夫！（ようつぼだゆう）どの面下げて武威ノ国に戻つて来たんだ」

妖壺太夫「どうふふ、わざわざ別れの挨拶に来てやったというのにつれないな。心配しなくても今すぐに出て行つてやるだの！」

すると妖壺太夫はあるものを見せて来た。それは。オレと同じくらいの青い着物を着た女の子だった。まさかこいつが……

ユウキ「ああある！」

一馬「っ！」

こいつがあるか！ちつ、人質とは……… イラツとするぜ

妖壺太夫「ユウキ、国とある姫のピンチに城を空けるとは、覇亜茶流忍者失格だの。それとも、帰ろうとしたら妨害にでもあつたぬの？どうるふふふ」

そうか、そう言う事か、モンスターを洗脳していたのはこいつか！

一馬「お前！」（シヨットライザーを握りしめて構える）

妖壺太夫「おつと、そんな物騒なものをわしに向けてどうするだの？撃つたりでもしたら姫が大変な目にあうだの。ぬふふふふ」

人質を盾か………

一馬「ぐっ………」

ユウキ「チツ、ホント、ヤな奴。全部お前のせいだつて分かつてる。姫を返せ」
グリーンハート「なんてことを……… あある姫にだつて選ぶ権利はありますわ。

あなたよりも相応しい相手がいるではありませんか！」
自分だつて言いたいんだろうな………

焰「お前が妖怪を差し向けたのか。カグラを目指す者として、妖怪に関わるものは狩らせてもらう」

ブラックハート「こんなのさっさと片付けて、あある姫を救いませよ！」

ホワイトハート「だが、この状況、恐らく城の状況もやばそうだな………」

妖壺太夫「ぬふふふ、ユウキやあんのうんの小僧の他にわらわらと他国の忍者がおるようだの。残念だが城はもう手遅れ、スチーム・レギオンの機械忍者の前に既に落ちたのだの」

一馬「何だと？」

ブラックハート「さすがに早すぎるわ！」

妖壺太夫「今のわしは妖怪軍団の首領だ。スチーム・レギオンとわしが手を組めば、こんな田舎の忍者など相手にならなかつただの」

ホワイトハート「手を組んだだと？バカが、利用されるだけだつてのに」

妖壺太夫「当然だの、その代わりわしも利用するのだ。お陰である姫と二人つきり。

るふふふ。これから二人のはにむーんを過ごすので、さらばだの！」

そして、妖壺太夫はあるを連れて消え、代わりにモンスターが大量に現れたあいつがストーカーだったのか……しかし、どうに気分が悪い

ユウキ「ちつ、またこいつらか。道中の奴らとは違って、意外と手強いから気をつけて」

たしかに手強そうだ。見たところ固そうな奴もいるな。クリスタル、コングだ

クリスタル『分かった』

左手にパンチングコングプログライズキーが現れた

パープルハート「何もないとこからいきなり。しかもたくさん出せるなんてズルいわね。それでもみんなやるわよ！」

一馬「ああ！」（シヨットライザーをバックルに戻す）

《パワー！》

オレはキーを起動してシヨットライザーに装填した

《Authorize Kamen Rider… Kamen Rider…》

飛鳥「カメンライダー？」

焰「もしかして、変身なのか？」

キーを展開して

一馬「変身！」

《《シヨットライズ！》》

トリガーを引き、現れた銃弾を右ストレートで破壊した。砕かれた銃弾はシューティングウルフの時と同様、鎧となり装着された

《《パンチングゴング！Enough power to annihilate a mountain》》

オレは仮面ライダーバルカン、パンチングゴングに変身した

飛鳥「変身した!?!」

焰「ほう、それが銃で変身した時の姿か」

ホワイトハート「初めて会った時とは違うな……前は青だったぞ」

焰「どういうことだ？」

ユウキ「な、何!?!一馬が鎧を着た?どうなってるの!?!」

グリーンハート「わたくしも詳しくは知りませんわ……」

パープル「どことなくゴリラっぽいわね……」

まあ、パンチング「ゴング」だし。さてと

一馬（バルカンPK）「お前らを……ぶっ潰す！」

十六ノ巻

一馬（バルカンPK）「おりゃあ!!」

オレは骸骨に向かってパンチした、骸骨は槍を構えて防ごうとする

骸骨「っ!」

だが、パンチは、槍を破壊し、そのまま骸骨を砕きながら殴り飛ばした

ユウキ「へえその鎧を着ると、かなり強くなるんだね」

一馬（バルカンPK）「……………結構威力あるんだな……………」

いや、作中でも確かにパワーはあったが……………

パープルハート「変身した自分が驚いてどうするのよ……………何て言ってる場合

じゃ無いわね、はあ!やあ!」

ネプテューヌ達もモンスターと戦った。みんなは武器や忍術を駆使して戦っているが、今のオレは殴って殴って、とにかく殴ってモンスターを倒してる

ホワイトハート「へっ、わたしの敵じゃねえぜ!」

焰「ブランはこの類には強いようだな。それに引きかえ飛鳥は……………」

飛鳥「そんなこと言つて、焰ちゃんこそそろそろお化けに耐えられないんじゃない?」

焰「そ、そんなことはないぞ！お化けなんか遅れを取るか！」

焰さんって霊系が苦手なのか…… たしかに今戦ってるモンスターの中には、あのスイカを被った霊（とその亜種っぽいもの）がいるが、怖いのかな？

パールハート「これは、刃仁破四忍の弱点見たり、なのかしら？」

飛鳥「あははは……」

一馬（バルカンPK）「とにかくコイツらを一掃してさっさと武威ノ国へ行こうぜ！
すると、厳つい見た目のモンスターが現れた

？「コイツ！」

一馬（バルカンPK）「何だコイツは？」

ユウキ「コイツはハツキヨイ！気をつけて強い部類に入る妖怪よ！」
なるほど、相撲が得意そうなモンスターだ

ブラックハート「でも見た感じ、あれで最後のようね

一馬（バルカンPK）「だったら、さっさと片付けるまでだ」

オレはキーのボタンを押した

《パワー！》

そして待機音が鳴り響く

ホワイトハート「この音、前にも聞いたことがあるぞ」

グリーンハート「確か前は妖怪を倒した時に……………という事は、これは決め技ですわね！」

ハツキヨイ「ヨツ？」

一馬（バルカンPK）「出てきて早々悪いが、これで退場だ」

シヨットライザーのトリガーを引いた

《パンチング、ブラスト！ファイバー！》

オレは右手に力を込めて構えた

一馬（バルカンPK）「はああああ！宇宙の彼方まで……………」

そして、全力の右のストレートをハツキヨイの顔面へ繰り出した

一馬「吹っ飛びやがれえ!!!」

ハツキヨイ「ヨツ!? ヨー……ーイ!!!（おいどんの出番これだけでごわすかあ!?）」

ハツキヨイはそのまま空の彼方へと吹っ飛んで行った

「キラーン！」

《パワー！パンチング、ブラスト！ファイバー！》

一馬（バルカンPK）「ふう……………」（変身解除）

ユウキ「飛んで行っちゃった……………」

パープルハート「見事にお星様になったわね」

飛鳥「でもこれで、妖怪は全て倒したよね？」

グリーンハート「ええ、妖怪を出して押し付けるだなんて、これはまるでトレイン、違法行為に値しますわ。まあこれも一つの修行としてこなしましたが！」

えーつとベールさんの言っているトレインとは、電車じゃなくて、MMORPGで大量のモンスターのヘイト、つまり敵視を取って連れ回す行為だよ……これってトレインになるのかな？むしろ召喚士って言った方が良いかもしれない……

ブラックハート「ま、わたし達の敵じゃないわね」

一馬「ああ、それよりだ、さっきのジジイ、妖壺太夫と言ったか。それとああるは？」
ユウキ「こら！呼び捨てにしない！」

ブラックハート「一馬、いきなり呼び捨ては失礼すぎるわよ」

一馬「わ、悪い……」

そういや、トワやアコ、それにひめも姫だったけか……

ユウキ「全く……次から気をつけてよね」

一馬「はい」

ま、心の中では呼び捨てで呼ぶけどねー

ホワイトハート「少し見てみたが、ダメだ、さすがに見当たらねーな。ユウキ、さっきのやつは何だったんだ？よく知ってたんだろ」

ユウキ「アイツは妖壺太夫、覇亜茶流の抜け忍。国を追われ、私も追っている………
また、まんまと逃げられたけどね。妖壺太夫は異大陸の妖術を使い、あある姫を手に入
れようと狙っていたんだ。本当にしつこい奴だよ」

異大陸……… だから旅人って言ってもそんなに怪しまれないのか……… な？

ユウキ「一馬、異大陸の妖術について何か知らない？旅人なんだよね？」

うおつ！いきなり聞いてきた！誤魔化すか

一馬「い、いやあオレは何も………」

ユウキ「そつか、知らないんだ………」

一馬「ごめん」

ユウキ「いいよ、気にしないで」

ふうく助かった

焰「あれは妖術なのか。妖怪を作れる術ってのは厄介だな」

あれはどちらかというところと召喚魔法の分類になるのかな、一応

ユウキ「あれは持っている壺と『暝惑拜神』（めいわくはいしん）って術で妖怪を出し
たり操ったりして、作ってるわけじゃないはず」

やっぱり召喚魔法か。てか術名が……… 迷惑配信って……… たしかに迷惑だつ

たが

ユウキ「妖壺太夫はそれを使い、妖怪軍団の首領を名乗ってる。ズルい奴だよ」

ホワイトハート「そして、しつこいんだろ。つたく、ろくな奴じゃねえな妖壺太夫……………」

飛鳥「それでどうしよつか。妖壺太夫を探すのか、それともこのまま武威ノ国に行く？」

ユウキ「妖壺太夫は姫に危害を加えたりはしない。でも、だからこそ姫の身が危険だ。この辺をしらみつぶしに探す」

一馬「そうは言っても。あんた、その様子じゃ場所が分からないっすよね？」

ホワイトハート「迷うとこだが、危害を加えないっていうなら、武威ノ国、城の確認が先だろうな。武威ノ国が本当に落ちたのかどうか…………… 敵は妖壺太夫だけじゃなく スチーム・レギオンもだ」

パープルハート「ええ、それがいいわね。もしまだ戦ってる人や傷ついた人がいたら、助けるわよ」

ユウキ「…………… わかった。私も国の様子は気になるから、そっちが先で良い。案内する。ところで一馬…………… 鎧を纏った時から思ったんだけど、背中の方はどうしたの？ それにさつきまで腰に巻いていたのも無いし……………」

一馬「ああ、それはコイツが消したんですよ」

オレはクリスタルをユウキさんに見せた

ユウキ「何この石？」

一馬「こいつはリンクルストーン・クリスタル、オレが異大陸にいた時に出会った石にして、オレの相棒です」

ユウキ「へえ〜」

クリスタル『よろしく頼む』

ユウキ「うわ!? 喋った!? まさか妖怪がその石に」

これで何度目だよ……………

一馬「取り憑いてる訳じゃありませんよ、コイツ自体が喋ってるんで。で、コイツには能力があつて、物の創造、つまり作ることが出来るんですよ」

ユウキ「凄い石なんだね！」

一馬「はい！」

ユウキ「つて、こうしてる場合じゃないよね、みんなこっち！」

オレ達はユウキさんに着いて行つた……………そこでオレ達が目撃したのは……………

ユウキ「あつ……………随分やられちゃつてる。くそつ今の町を見たら、姫悲しむだろ

うな……………」

一馬「こりゃひでえな……………」

ボロボロにされた武威ノ国の町だった……

飛鳥「ひどい、町が……間に合わなかった」

パールハート「ごめんなさい。守れなくて」

一馬「せっかく守るって言ったのに……これじゃあヒーロー失格だな……」

ユウキ「これは君たちのせいじゃない。だから気にしないで」

一馬「……残党が残っているか、探してくる」

飛鳥「待って！この辺に敵はもういないみたい。でも、これじゃお城も……イラつとすませ……もっと早く来ていれば……」

パールハート「そんなの分からないわ。磨愛辺国だつて城は守れたじゃない」

一馬「行ってみよう！ユウキさん！城は！」

ユウキ「……城はこつち、行くよ」

オレ達は再びユウキさんに着いて行つた

十七ノ巻

オレ達はユウキさんの案内で城に入った。入ったるとある違和感に気づいた。それは

一馬「荒らされてない……敵の残骸もないことから推測するに……ここに
は来なかったのか？」

ユウキ「大名様が無事か確かめないと……みんなこっち！」

オレ達は再びユウキさんに着いて行った。広前へ着くと、一人の男の人が倒れてい
た。まさかあの人は！

ユウキ「大名様!?!」

やつぱり、ああるの親父さんか！ユウキさんはすぐに大名の元へ向かった

パープルハート「し、死んでる……!?!」

一馬「一言目がそれか！こんな時にふざけてる場合じゃねえだろ！」

ブラツクハート「……い、生きてるわよね？」

一馬「多分な」

パープルハート「待って二人とも、それは誤解よ。わたしの経験上、この方が助かる

可能性がなくて、むしろ泣いたり思い出を語りだす方が良く無いわ」

経験上？ネプテューヌは今までそんな修羅場をくぐり抜けて来たのか？怪しい、ふざけてる様にしか見えない……？

ブラックハート「やつぱり、ふざけてるわよね」

一馬「ああ」

ユウキ「大名様！大名様！」

ユウキさんは必死に声を掛けた。すると

武威ノ国大名「ううう………」

焰「おお、本当に無事だな。そう言われると思い当たる節がある………これが魂波流か」

一馬「焰さん………乗せられちゃだめつすよ」

焰「そうなのか？」

ホワイトハート「もしかして、焰は影響を受けやすいのか？どうせ怪我とかしてないのを見て言っただろ」

ユウキ「良かった。大名様は無事だったんだ。何かあったらどんなに姫が悲しむか」

武威ノ国大名「ユウキ、戻ったか………。そちらの方々は、波戸ノ国の女神四忍。救援に来てくれたのか？」

グリーンハート「はい、波戸ノ国の大名イストワールからの命を受け、救援に参りました。……………」
ですが、少々遅かった様で、申し訳ありません」

武威ノ国大名「こちらこそ、不甲斐ない……………」
そちらの二人は確か、磨愛辺国の……………」

飛鳥「私は、あの、磨愛辺国の刃仁破四忍の一人、飛鳥です。波戸ノ国と同盟を結んだので行動を共にしています」

ホワイトハート「飛鳥が言っていることは本当です。スチーム・レギオンに対抗するために、波戸ノ国と磨愛辺国は同盟を結び、今は仲間です」

武威ノ国大名「そうか。それで君は？君も磨愛辺国の者かな？」

一馬「オレは坂田一馬、異大陸から来た旅人です。ですが今は訳あって、波戸ノ国、磨愛辺国と共にスチーム・レギオンと戦っています」

ユウキ「大名様、スチーム・レギオンつてのが来たんだよね？私が来た時には居なかったけど」

武威ノ国大名「うむ、ここに来たのは、スチーム・レギオンのマスターを名乗る者と、そのマネージャー。そして妖壺太夫だ」

あの二人が……………」

焰「てことは、磨愛辺国の時と同じだな。その二人はヨウガイマとテツコ。また自

ら乗り込んで来たのか……………」

武威ノ国大名「確かにそう名乗っていたはずだが、わしはすぐに妖壺太夫の忍術で気絶させられて……………」そうじゃ娘は!? ああるは無事か?」

ユウキ「姫は妖壺太夫に連れてかれた。私の目の前で、ごめんなさい」

武威ノ国大名「なにつ!? 姫は伝説の……………」いや、今はそんなことはどうでも良い。

ユウキ、新たな任務を言い渡す、娘を取り戻せ」

伝説の血筋つてのはノワール から聞いたが伝説のなんなんだ?

ユウキ「分かっている。姫は取り戻す。絶対に」

武威ノ国大名「女神四忍、破仁刃四忍、そして坂田殿よ。姫の救出に手を貸して貰えないか? そして、ユウキと一緒に連れて行ってほしい。必要ならイストワール様に親書を書こう」

やはり、イストワールさんが地位的には上なのね……………」

パープルハート「別に要らないわ。親書運ぶのつて面倒なもの。いーすんには適当に言っておくから」

ブラックハート「言い方は気になるけど、元々同盟国なんだし良いんじゃない。ユウキはもう仲間でしょ」

ホワイトハート「悪くはないかもな。イストワールがスチーム・レギオンの情報を集め

てるし、あある姫も一緒に探してもらおうぜ」

武威ノ国大名「ユウキもそれで良いな？本当は国を挙げて搜索したいが、我が国はこんな有様だ」

ユウキ「…………… うん、分かった。ホントは一人でも行きたいけど、この人たちは強い。姫のことを考えれば当然だ」

グリーンハート「それでは決まりですね。行きましょう！必ずや大名様の願いを叶え、あある姫を助け出しましょう！」

おお、抑えてる……………

ユウキ「仲間か…………… 私は一人で守れるって思ってた。でも結果は見ての通り、君達の力を私に、姫のために貸して欲しい」

パールハート「ええ、こちらこそよろしく。みんなちよつと変わって…………… 個性のだけど、悪い人はいないわ。仲良くしましょう」

一馬「一番変わってるのはお前だ、ネプテューヌ」(小声で)

飛鳥「…………… 仲間は嬉しい。けどあまり多いと私がまた地味に思われるかも。ここは一つ个性的ってのをアピールしないと…………… ！」

一馬「いや、飛鳥さんは地味じゃないぜ」

飛鳥「本当？」

一馬「はい、例えば……」

? 「飛鳥さんは本当に真つ直ぐで素直で明るくて……、飛鳥さんらしさをたくさんお持ちですよ」

一馬「そうそう、つて……… ヴェ!？」

飛鳥「雪泉ちゃん!? 何でここに、別任務だつて言つてたのに」

振り返るとそこには雪泉さん、そして雅緋さんがいた

一馬「雅緋さんも! どうしてつすか?」

雅緋「私たちの任務はスチーム・レギオンの目的の調査。だが、それは分かった。今はお前達に合流し、それを伝えることだ」

焰「分かったのか! 何だったんだ、奴らの目的つてのは?」

雅緋「あわてるな、まずは経緯からだ。スチーム・レギオンが攻めた国を見て回った。正確に言うなら、攻められた跡をな」

雪泉「はい。そうすることで、スチーム・レギオンの狙いが分かるかもしれないと、私達は考えたんです」

雅緋「ああ、この国も、おそらく……… それを確認してから続きを話そう」

雪泉「武威ノ国の大名様。この城にもある天守閣の部屋に、立ち入りの許可をいただけませんか?」

武威ノ国大名「天守閣……………つまりシエアクリスタルか。分かった、許可しよう」
 この世界のシエアクリスタル……………そうか！あいつらの狙いはシエアクリスタル
 か！

ホワイトハート「シエアクリスタル？」

オレ達は天守閣に入った。そこには光を失った巨大なクリスタルがあった

雅緋「やはり……………ここもか、決まりだな」

一馬「光が……………無い。クリスタルって普通は輝いてるはずだ」

クリスタル『わずかな光も感じられない……………完全に光を失っている』

ユウキ「あいつらがやったんだ……………」

雪泉「間違いありません。このシエアクリスタルも、シエアエネルギーを失っていま
 す」

シエアエネルギー……………たしかオレの知ってるゲームギョウ界じゃ、信仰で生まれ、
 国を保つための大切なエネルギーだって聞いたな

ホワイトハート「その言い方から察するに、やっぱり他の国も？」

雪泉「はい、スチーム・レギオンに落とされた国は……………すべての国で、シエアク

リスタルの輝きは失われ、シエアエネルギーが空になっていました」

やはりそういうことか

雅緋「当然、私たちの磨愛辺国もな」

飛鳥「でも、シエアクリスタルは問題ないって言ってなかったつけ？」

雪泉「ええ、無事だと思っていました。壊されてはいませんでしたから……輝きを失っていたのも、国が攻められ、皆が不安になった一時的なものと考えていました」

ユウキ「ふーん、シエアエネルギーね、そんなの集めてどうするんだろ。君達はずつと奪い合ってたんでしょ」

ブラツクハート「わたし達はエネルギーを奪い合ってたわけじゃないわよ。シエアエネルギーって臣下、臣民の『忠義』がエネルギー化したもの。シエアクリスタルが、そのエネルギーを集積して、エネルギーが多いほど輝いてるのよ。その力で国の運営を安定させているんだけど」

こっちでは信仰じゃなく、忠義なのか

ホワイトハート「シエアエネルギーは何でも出来る万能な力、ってわけじゃねえ、むしろ扱いにくい。国の象徴的な意味合いが強いんだ。シエアクリスタルが輝いてるほど、国の皆が安心して暮らせてることだな」

ユウキ「姫は国民の事をいつも気に掛けてて優しい。シエアクリスタルがこんなに暗いと姫は悲しむかな。そんなのヤダな」

雅緋「磨愛辺国や他の国も輝きが戻っていなかった。再び輝きを取り戻すまでどれだ

けかかるやら」

パープルハート「シエアエネルギーってそんなに簡単に奪えたのね。それなら奪った方がお得だわ」

グリーンハート「時々鋭いことを言いますわね。少なくとも、わたくたちには出来ません。これはスチーム・レギオンだけの技術だけなのでしよう」

焰「こちらもだ、だから私たちの忍務は、シエアクリスタルの破壊だったのか」

ブラックハート「破壊って言っても、簡単にできるものじゃないわ。安定した国のクリスタルって……すごく硬いのよ」

一馬「確かに。それにこのデカさ、盗むと言うのも、簡単には無理だな……」

ホワイトハート「ああ、まだ破壊する、傷をつける方が楽だ」

飛鳥「盗むのはやっぱ難しいんだね。硬くて大きくて重いクリスタル。いつか絶対に破壊して見せます！って……あれ？私たちの任務ってかなり難しい事？」

グリーンハート「攻め込むことに意味がありますわ。修練を重ねた末に出したハイスコアに傷が付いたら落ち込みますわよね？そういうことですわ」

オレの場合は、逆に闘志が沸いてきたぜ！ってなるなあ

ブラックハート「もう、分かり辛いわよ！ま、全面戦争を避けた結果だから意味はあるわね。もしも普通に争ったら、両国とも滅びるかも」

ホワイトハート「国を落としていないのに退いた理由は納得した。だが、また分からない事が出来ちまったな」

雪泉「スチーム・レギオンの目的は『シエアエネルギーを奪う』で間違いありません。そして分からないのが、この後に何をするかです」

雅緋「私たちに出来ないことが出来る。つまりこちらの予測ができない。だからお前達の所に来たわけだ」

雪泉「私達もみなさんと行動を共にし、戦力を集め有事に備えます。刃仁破四忍の雪泉、これより同行しますね」

雅緋「同じく雅緋だ。これで刃仁破流も揃ったし、飛鳥と焰だけでは肩身が狭かっただろ」

焰「馬鹿言うな。私一人でも刃仁破流の力を見せられた。しかし、四忍全員がそろっていけば怖いものなしだな」

飛鳥「私たちは平気だったから、むしろ私も焰ちゃんも、妙に馴染んじやってたかも」
雪泉「心配は無用でしたね。飛鳥さんと焰さんなら必ずやり遂げられると信じていましたが、安心しました」

飛鳥「ありがとう雪泉ちゃん。なんとか乗り越えてきたよ」

パープルハート「なんだか賑やかになったわね。それじゃあ戻りましょうか、みんな

に波戸ノ国を案内するわ！」

ブラックハート「戻ってもそんな暇ないわよ。イストワールに報告すべきこともでき
たし、あつちで何か分かったことがないか聞かないとね」

グリーンハート「わたくし達の今回のミッションは失敗かしら。ミッションは必ずク
リアしたかったのですが、仕方ありませんわね」

パープルハート「そういえばそうよね、いーすんに小言言われそう。やっぱりもう
ちよつとゆつくりして行かない？何か手伝えることがあるかもしれないわ」

ホワイトハート「そうだったとしても、ネプテューヌは手伝わらないだろ。戻るぞ」

ユウキ「君たち不思議だね。仲間同士ですぐ言い合つて、ケンカして、そつか、これ
が仲間なんだ」

一馬「そうつすね……………」

それにしても腹が減ってきた……………　　そういやここへ来てから丸薬しか口にしない
な……………　　はあ……………

十八ノ卷

オレ達は今、ヘドセト峠を通つて波戸ノ国へ歸つてる。その途中だった

一馬「はあ………」(疲れた顔)

オレは少しよろめきながら歩いてた

雪泉「一馬さんどうかしました？」

一馬「ヴェイツ!？」

雪泉「ひやつ!？」

雪泉さんがいきなり声をかけてきた

一馬「な、何？雪泉さん？」

雪泉「ちよつとお顔の調子がよろしくなかつたようなので………」

一馬「だ、大丈夫ですよ、全然問題ありませんって」

ここは誤魔化そう……

ユウキ「そうかな？君さつきこーんな顔をしてたよ？」(疲れた顔のモノマネ)

一馬「マジですか……… ははっ、確かに疲れてますよ……… あ、そうだ、露店でこ

れを貰ったんだっけ」

オレは袋から飢渴丸を出して食べた

一馬「ふう…… 少しは疲れが取れたはず」

「ぐぐるるる〜」

全員「……………」

オレの腹の虫が鳴り響いた

ホワイトハート「疲れが取れた様だが、お腹は空いてるのか……………」

一馬「…………… うん」

ブラックハート「そういえば、もう夕暮れ時ね、波戸ノ国に着く頃には夜になってると思うわ。帰って報告したら、ご飯にしましょう。それまで我慢できるかしら？」

一馬「出来るぜ！」

パープルハート「それじゃあ、早く波戸ノ国へ戻りましょう！」

オレ達は先へ進んだ…………… が

一馬「そういうやオレ、この世界に来てから口にした物って、丸薬だけだわ」

オレはふとこんな事を口に出してしまった

ユウキ「この…………… 世界？」

ユウキ、雪泉、雅緋意外「あ」

一馬「あ、やべ」

うっかりとこの世界って言ってしまったあ!

ユウキ「どう言う事! 異大陸から来た旅人じゃないの!」

雪泉「この世界に来てからってどういうことですか!」

雅緋「まるで別の世界から来た様な言い方だな」

一馬「あー、えーつと、それはその………正直に話します。信じられないようで

すけど、オレはこの世界とは違う世界から来ました」

ユウキ、雪泉、雅緋「………」

一馬「信じなくても良いですよ。オレを笑ったって良いですし………妄言を吐く

嘘つき野郎って言っても良いですよ」

パープルハート「自分で言うのね………」

飛鳥「自分でそこまで言っちゃうんだ………」

雪泉「そ、そこまでは言いませんよ。あの………」

ユウキ「どうしてあの時嘘をついたの?」

一馬「言ったってどうせ信じてくれないでしょ?」

ユウキ「いや、うん、確かに………でも、今なら信じれる。妖怪と戦った時のあの

姿………どう見ても………じゃ見かけないからね」

雪泉「それでしたら私達が初めて会った時のあの黒い鎧もこの辺りでは見かけません

からね」

雅緋「ああ、あの見た目から察するに遠いところから来たというのは推測できたが、まさか別の世界からだつたとは……………」

一馬「ほんと……………嘘ついてごめんなさい！」

ユウキ「良いよ、許してあげる」

一馬「良かったあ〜」

ブラツクハート「話は終わったかしら？行くわよ。日が暮れちゃうわ」

オレ達は再び波戸ノ国へ向けて進んだ。そして波戸ノ国へ着いて、イストワールさんに武威ノ国で、起きたことを話した

イストワール「武威ノ国は間に合いませんでしたか……………」

雪泉「シエアクリスタルにエネルギーもありませんでした。奪われたものと見て間違いないありません」

ネプテユーン「ごめんね、いーすん。なんだかんだ間に合うと思つてて油断して……………」

ユウキ「それは違うよ、私達の国の力不足つてだけ。元武威ノ国の忍者妖壺太夫がスチーム・レギオンに協力したのも原因」

イストワール「わかりました。女神四忍の皆さんご苦勞様でした。刃仁破四忍のみな

さん、一馬さんもありがとうございました」

ネプテューヌ「あれ？怒らないの？」

ネプテューヌはイストワールさんを何だと思ってるんだよ

イストワール「ネプテューヌさんは私を何だと思ってるのですか。敵の動きをもっと早く察知さえできていれば、あるいは……」

一馬「間に合ったかもしれない……と」

イストワール「はい。ユウキさん、申し訳ありませんでした。同盟国でありながら、お力添えをすることが出来ず。波戸ノ国の大名として、お詫びいたします」

ユウキ「そういうのは大名様をお願い。私は助けてもらった側で、姫つきとはいえ、ただの忍者だから」

ブラン「反省はこれくらいにして今後のことを……と言いたいところだけど、それは明日にしましょう。今は夜、それにお腹も空いたしね」（一馬の方を見る）

一馬「あははは……」

イストワール「それもそうですね。お食事にしましょうか」

一馬「やつと飯が食えるー！」

ネプテューヌ「一馬は結構我慢してたもんねー」

ベール「我慢した分たくさん食べてくださいね」

一馬「はい！」

そして、オレ達は晩飯を食べた

一馬「うーん、美味い！おかわり！」

ノワール「おかわりするほど美味しいのは分かるわよけどね……………どれだけ食べる気よ！もう5杯目じゃない！」

一馬「だってすげえ腹減つてたもん」

ノワール「だからってね……………」

腹減つてるから遠慮はしない

焰「一馬！どっちが多く食べるか勝負だ！」

一馬「お、負けませんよ！」

ノワール「はあ……………」

イストワール「あははは……………あ、そうだ一馬さん……………」

食べていると、イストワールさんがオレの耳元で

イストワール「後でお話があります」

一馬「ん？」

そう言った。オレに話？何なんだ？そして、食事が終わった後、オレとイストワールさんは二人つきりになった（アナス……………クリスタルもいるけど）

一馬「さて、オレに話って何ですか？」

イストワール「はい、実はみなさんが武威ノ国へ救援に行っている時、ちょうど調べ物を終えた直後でした。私の頭に声が聞こえたのです」

一馬「声？」

イストワール「はい、声は私と非常に似ていました。しかも信じられない事に、その声の主は……………」
「私は別の世界のイストワール」と言ったのです……………」

一馬「っ！」

まさか……………よく分からないが、オレの知っているイストワールさんがこのイストワールさんに連絡出来たことは分かる！

イストワール「多分、貴方が知っている私だと思えますが……………」

一馬「はい！……………多分」

イストワール「やっぱり……………あちらの私が貴方のことを言っていました。そして貴方をあちらの世界へ戻したいとも言っていました……………」

戻れる……………か……………だがお断りだな

一馬「……………イストワールさん、向こうのイストワールさんに伝えることが出来たら、こう伝えてくれ……………オレは戻りません、オレはこの世界でやるべきことがあるからって」

イストワール「一馬さん……………
分かりました。あちらの私に伝える方法は教わ
りましたので、伝えてみます」

一馬「ありがとうございます」

イストワール「……………あの時、言いそびれましたが本当にすみません、貴方を巻き
込んでしまつて……………」

一馬「いえ、気にしてませんよ。オレ、結構なお人好しなので」

それにオレは、向こうでもかなりの修羅場をくぐり抜けて来たからな……………」

一馬「じゃあオレはこの辺で……………お休み、イストワールさん」

イストワール「はい、お休みなさい」

オレは城を後にし、拠点へと向かつた……………」

十九ノ巻

拠点へ向かうと、ブランがオレの部屋になる客室へ案内してくれた。久しぶりに布団で寝たぜ……そして翌日

ブラン「スチーム・レギオンの動きはどう？本拠地は分かったの？」

いきなり城での話し合いが始まった。少し眠い……

イストワール「本拠地はあの空中戦艦自体です。そして、おそらくステルス、隠れる機能があります。それ以外にあの大きさを見失う訳がありません」

ハイパージャマーとかミラーージュコロイドを使ってるのかくいや、厳密には違うだろうけども

イストワール「また、新たな動きとしては『忍スタグラム』という、SNSコミュニケーションを作り、宣伝している模様です」

忍スタグラム？インスタグラムなら知ってるが……

飛鳥「に、忍スタグラム？って何ですか？とってつけたような『忍』。それなのに気になつてしまう……悔しい」

一馬「オレの世界でも、インスタグラムってのがありましてね……まあやってない

から詳しくないけど」

イストワール「会員制で、スチーム・レギオンに加わった者だけが見られる情報もあるようですが、詳細は分かりません。そして加わる忍者はいるようです」

一馬「そいつら馬鹿だろ」

ノワール「どつかで聞いた手口ね………餌で釣って人を集めコミュニティを作る、後から追加でお金を取って儲けるやり方でしょ」

そんなのだったら直ぐにそのコミュニティ抜けるわ、脅しがあっても真つ向からぶつかってやるさ

イストワール「事実、スチーム・レギオンに人が集まっています。基本的には忍者は各国が抱えています、流派を抜けてしまえば鞍替えは可能です」

一馬「アホらし、プライドが無いのかそいつらは……」

雅緋「確かに、くだらん。その程度で抜ける奴らなど、何百集まろうと相手にならん」

ベール「あある姫が拐われたのは関係あるのでしょうか？基本的には集まってくるのを待つスタイルで、無理やり連れて行かれたのは初めてですね」

一馬「あのクソ野郎の独断じゃないかな？」

焰「いや、そうとも言い切れん。スチーム・レギオンは人を集めてるんだらう？伝説

の巫女の血を引くある姫が加わればさらに集まる。どうだ？」

雅緋「伝説の巫女、か。話には聞くが、私からすればだからどうしたという話だ。もし、あある姫が向こうに付いたら焰は移るのか？」

焰「それはない。自国ならともかく、よく知らない他国の姫のために国や仲間を裏切れん。姫って特別な力があるんだろ？そっちならどうだ」

一馬「え、あある姫って特殊能力があるんですか？」

ユウキ「うん、仮想幻影（ビジョン）って言って、姫の周囲の景色を別の場所に映すっただけで、それに身体に負担があつて、長くは使えないんだ」

一馬「へえ〜」

ビジョンって名前からして未来予知かと思つたが、違つた…………… 要は体力を消耗するテレビ電話か……………

ベール「スチーム・レギオンは『超忍者大戦』の宣戦布告の時に科学力で似たような事をしていましたし、特別必要としているとは思えません……………」

オレがここへ来る前にそんな事があつたのか……………

イストワール「もし力が目当てだとしたら、伝説の巫女の血筋たるゆえん、もう一つの力かもしれません」

ユウキ「姫のもう一つの力…………… あー、昔いた悪鬼を退けたって力のことかな。姫

のそんな力、私も見たことないけど」

ネプテューヌ「ユウキちゃんも見たことない秘密の力!? きつと、怒りと共にスーパーある姫に」

一馬「そんな超サイヤ人な力はないだろ」

ネプテューヌ「超サイヤ人? よく分からないけど……あ、じゃあアルティメットな魔法が使えたりするとか?」

魔法……アイツら元氣かなあ

イストワール「残念ながら、力の詳細は分かりません。伝わっているのは、ユウキさんの言った悪鬼にまつわる伝承のみです。かつて、この幻影夢忍界は、強大な悪鬼の脅威に晒されました。シエアは枯れ、忍者は力尽き、あらゆる国が滅亡するところでしたが、それを倒したのが『魂波源流斎（こんぱげんりゆうさい）』と『伝説の巫女』です」

ノワール「魂波源流斎って、魂波流の始祖の名前よね」
イストワール「はい。波戸ノ国と武威ノ国には深い関係があり、その時から二国は同盟国なのです」

そんなに昔から同盟なのか……

ネプテューヌ「えっ、てことはわたし達も伝説の忍者じゃん! 伊達に女神を名乗ってなかったんだね」

ブラン「わたし達は別に子孫とは限らないわ、流派を受け継いでるだけで、ああある姫は正統な血筋よ」

イストワール「悪鬼を退けるほどの力を持つていたのは確か、その力が何だったのか、受け継がれているのか。そちらも調べてみましょう」

飛鳥「でも、姫を拐っていたのは妖壺太夫だったよね。スチーム・レギオンと手を組んだって言ってたけど……」

ブラン「互いに利用し合つてるとも言ってたわ」

ユウキ「元々妖壺太夫は姫に惚れてて、何度も狙つてたから、目的が一致したんだろ
うね」

確かにハネムーンとかほざいてたからな…… アイツは許せねえぜ！

一馬「ますます許せねえ……」

雪泉「ええ、なんと卑劣な……好きだからと言って拐うなど許せません。私なら相手のことを探り、趣味、思考、欠点まで調べ好きになつてもらおうよう努力します。それが愛です」

一馬「雪泉さん、それ完全にストーカーです」

雪泉「そうなのですか？」

一馬「ええ、完璧に」

雪泉「そんな……」

ネプテューヌ「えーと、結局さ、次ってわたし達何すれば良いの？ いーすんの調べ物を待つだけなら、人数も増えたし、だから話さない？」

お気楽だな……

ブラン「次どうするかをみんなで考えてるのよ。今情報を整理せずにいつするの？」
すると警報みたいな音が鳴り出した

一馬「警報?！」

飛鳥「何この音?……あ、みんな外! スチーム・レギオンの船です!」

オレ達は外を見た、上空を見ると、スチーム・レギオンの船が浮いていた。まともに見るのは初めてだが、かなりデカいな

ユウキ「へえ、あれが……随分大きいんだね。少し前には何もなかったのに、急に現れるんだ」

ノワール「遠くてよく分からないけど、前に見た時と様子が違うわね……なん
か光ってるわよ」

本当だー光ってる

すると巨大な映像が現れ、その映像にはヨウゲイマとテツコが映っていた

ヨウゲイマ「ごきげんよう! 波戸ノ国の大名イストワール、と言ったかな。及び同

盟国のN I N J A連合の諸君とアンノウン。そこからでも見えるだろうか？ ミー達のマザーシップ、スチーム・ノヴァだ」

テツコ「説明は私がします。今、このスチーム・ノヴァの砲塔、ノヴァジェネシスにエネルギーを充填中です。狙いは、波戸ノ国を中心とした幻影夢忍界全土。充填が終わり次第発射します」

よくベラベラと喋る……挑発か？

ヨウIIゲイマ「黙って撃つても良かったが、碎頭流が奇襲だけと思われるのは、アウトオブマインド！ N I N J A連合諸君とアンノウンにも起死回生のチャンスを与えよう」

テツコ「さあ、最後の戦いを始めましょう」

そして映像が消えた

イストワール「あれはおそらく罠でしょう。あえて通告してきた以上、間違いなく待ち伏せしているはずですが、あそこにあんなものを残しておくわけにはいきませぬ。なんとしても総力を結集して止めなくては。幻影夢忍界全土……波戸ノ国が撃たれる前に！」

ユウキ「私は行くよ！ 姫があそこにいるかもしれない！」

ベール「姫がいるかは半々と言ったところかしら。ですが、待っているだけでは姫は

取り返せませんし、半分の可能性に賭けるべきだと思いますわ」

ブラン「そうね、行きましよう。この状況も考え方を換えればチャンスよ」

ノワール「ええ、敵の本拠地を探す手間が省けたじゃない！これでこつちから攻められるし、後悔させてあげましよう」

雅緋「波戸ノ国の大名様は甘いな。忍にはタダ命じればいい」

焰「そういうな、逃げるなんて言わないだけでした。忍なら売られたケンカは買う、いつでも相手になつてやる」

雪泉「忍なら正々堂々と来るべきです。人質を取つて脅すような行為に正義はありません」

飛鳥「ここで逃げるようなのは忍じゃない。私もみんなと同じ気持ち！」

一馬「オレは忍じゃないが、向こうから挑発してきたのなら……へっ、その挑発、乗つてやるぜ！」

ネプテューヌ「それじゃいーすん、そういうことだからちよつと行つて来るね！今度こそミツシヨン達成してくるから、待つててねー！」

イストワール「みなさんありますがどうございます。スチーム・ノヴァは北『ニンガジャ森林』の上あたりと思われまます。ご武運を」

ネプテューヌ「そつち行くよりさ、空から行かない？ねえ一馬、空飛べる物出せる？」

一馬「ああ、ジエツトスライガーにダンデライナー、コアスプレNDER他にも色々ある………」

焰「おお、どれも聞いたことがない物ばかりだ。だが襲撃されるのなら危険だな………」

ネプテューヌ「そっか……… じゃあいーすんの言う通り、ニンガジャ森林に行くしか無いね！」

一馬「だな、だが、あの装填スピードから察するに……… かなりの時間があると見た、だからゆっくり準備しようぜ。まあゆっくりしすぎなものもアレだが」

ブラン「そうね、準備しないとこちらがやられるってこともあるし」

ベール「それでは、拠点で準備ですわね」

オレ達は拠点へ戻って準備をした……… オレの場合はロングソードを装備するだけだけだな。後は丸薬の確認、服装の確認だけ……… よし、さーて外へ……… ん？あそこに雪泉さんと雅緋さんとユウキさんがいるな。何か話してるな。少しこっそり聞いてみるか

雪泉「素敵ですね。どなたが相手であれ、好きと思えるのは素晴らしい事です」

雅緋「それはそうだが……… 姫と忍では身分が違いすぎないか？」

雪泉「ふふふ。身分を越えての好意……… とても素晴らしいと思いますよ」

身分を…… そういや、オレ（オタク寄り一般中学生）ってあきこ（金持ちのお嬢様）と付き合ってるんだっけか。それにことは（マザー・ラパーパの力を受け継ぎし者、つまり女神）とも……

ユウキ「心配しなくても私達は、姫を助けたら一緒にデートする予定。それぐらい仲良しなんだ」

お、女同士で出かけるのってデートって言うのか？ 男同士は少し…… 知っているけど

雅緋「デート…… 姫と忍が……」

雪泉「その実現のためにも、私達も全力で戦わねばなりませんね」

ユウキ「雅緋は照れてるんだね。周りのことなんて気にすることは無い、大事なのは自分の気持ちだ！」

雅緋「まあ、戦う理由は人それぞれか…… そう言えば聞きたい事がある。ユウキ、もし、もしだ、あある姫に好きな男の人が出来たらどうする？」

ユウキ「もし出来たら？ そうだなあ…… 普通にお祝いするよ。妖壺太夫みたいな奴だったら許せないけどね」

雅緋「そうか…… そこにいるのは分かってるぞ一馬」

一馬「ヴェイツ!？」

バレテラ、まあ忍者だから朝飯前か。オレは三人の前に出た

ユウキ「盗み聞きは良く無いぞーこのこの♪」

ユウキさんが頬を突つついて来た

一馬「あははは………」

雅緋「そうだ一馬。お前が戦う理由は何だ？」

いきなりだなあ

一馬「戦う理由ですか？そうですね………人々の笑顔を守る為、ですかね」

世界の平和……は規模がデカすぎるからな

雪泉「人々の笑顔を守る為………素晴らしいですわ」

雅緋「ああ、だがちよつと子供っぽい理由だな」

一馬「子供なので」

でも今はこれがオレの戦う理由だ。そしてオレ達はネプテューヌと合流していざ！

ニンガジャ森林へ！

二十ノ巻

「ニンガジャ森林」

ノワール 「ここがニンガジャ森林よ。この辺は国が無くて、森自体は広いし、当然妖怪もいる。うんざりするわ」

焰 「で、スチーム・ノヴァに近づいたらどうやって侵入するんだ？

一馬 「そこは、オレが空を飛んで穴を開け侵入口を作り、そこからオレが運びますよ」
ネプテューヌ 「そっか！ さっき言ってた空飛ぶ乗り物達で。ドツカーンってするんだね！」

一馬 「え、まあ、うん」

本当はレウスとか空飛べるモンスター防具で空を飛んで穴を開けるんだがな

ノワール 「そんなことしなくても、わたし達って招待されたようなものでしょ？ きつと梯子とか降りて来るわよ！」

いやあ、流石に梯子は無いと思うけどなあ。きつとUFOみたいに光で回収されるー的な

一馬 「言っておくけど、これ最終手段だからな」

ネプテューヌ「よし！さっさと行こう！」

そしてネプテューヌ達は変身して進んだ。

一馬「まだ距離はあるな……………」

襲ってくるモンスターを倒しながら進んでるとオレはそう呟いた
ホワイトハート「おい、まさかお腹すいたとか言わないよな？」

一馬「全然腹減ってねえよ……………」

ブラツクハート「まあ、あれだけ食べてたら……………ねえ……………」

雅緋「ああ……………っ!?待て、みんな！」

オレ達は雅緋さんの言葉で一斉に身構えた。すると

まっくーる「……………」

前からまっくーる(仮名)さんが現れた

グリーンハート「あなたは！まっくーる。磨愛辺国でお会いして以来ですわね」

ユウキ「黒い忍者……………知り合い？」

まっくーる「……………新顔がいるな……………俺と戦え」

まさかのこの人戦闘民族思考か!?

パールハート「待って、まっくーる。わたし達今は忙しくて……………」

ユウキ「へえ、みんなの知り合いだけあって、なんかぶっ飛んだ感じの忍者だね」

雅緋「おい、この殺気、本気だぞ。お前らの仲間じゃないのか!？」

確かに。さつきから感じるな……マジでやるつもりだ

グリーンハート「わたくし達は敵だと思っていないのですが……なにやら記憶

喪失らしく、ちつとも話を聞いてもらえませんか」

雅緋「そういうことなら戦った方が早い。なに、悪いようにはしない」

一馬「ちよ、ちよつと待って、ここは話し合いを……」

まつくーる「……血祭りにしてやる、戒めろ」

一馬「だーめだこりや……仕方ない」

クリスタル。ジンオウガで行くぞ

クリスタル『分かった』

一馬「装着!」

オレはジンオウシリーズを装備した(ロングソードはそのまま)

パープルハート「あら、あの黒い鎧やショットライザーで変身しないのね」

一馬(ジンオウシリーズ)「前にも言いましたよ。気分転換だって」

焰「気分転換……なんとも軽い理由だな」

まつくーる「……戒めろ」

一馬(ジンオウシリーズ)「軽くてごめんなさいね……つと、来ますよ!」

オレ達は散らばって回避した

ユウキ「あの人が知り合いじゃなかったの？」

雅緋「仕方ない、やられる前に仕掛けるぞ！」

グリーンハート「ええ、初対面の忍者とは戦わないと気が済まないみたいですよ」

まっくーるさんはユウキさんの方へ襲い掛かったユウキさんの爪とまっくーるさんの刀がぶつかり合った

まっくーる「……猫耳に尻尾？ 貴様……忍者か？」

ユウキ「だったら何？ そう簡単には……やられないからね！」

ユウキさんは押し返してまっくーるさんを吹っ飛ばした

まっくーる「ぐっ!?!……その耳と尻尾があれば……もしかして……戒めろ」

まっくーるさんは再びユウキさんへ向かった。させるかよ！

一馬（ジンオウシリーズ）「ユウキさん！」

オレはユウキさんの前に出て、まっくーるさんの刀をロングソードで止め押し返した
ユウキ「一馬……」

まっくーる「……退け、忍者ではない貴様に要はない」

一馬（ジンオウシリーズ）「へえ、忍者じゃ無いから……ですか」

少々手荒な真似になるが、仕方ない！

一馬「はあ！サンダーストラッシュュ！」

オレはロングソードに雷を纏わせて、雷の斬撃を繰り出した

まっくーる「!?」

まっくーるさんは簡単に回避した

まっくーる「貴様、少しは出来るようだな」

一馬（ジンオウシリーズ）「そりやどーも……………なあまっくーるさん、戦うのをやめましようよ」

オレはロングソードを納刀してこう言った

雅緋「一馬！情けは無用だ！」

一馬（ジンオウシリーズ）「雅緋さん……………こっち多数であっち一人、どう考えても……………イジメになってしまいます！」

まあこっちの世界でも多人数VS一体という構図の戦いはあったが、あれは相手がデカイ、強いだったからなあ

飛鳥「そ、そうだよ。よくよく考えたら可哀想だよ」

雅緋「良いか。まっくーるは記憶がないんだろう？そしてその感情の無さ、私にも経験がある。感情の動き、死の恐怖から記憶を思い出すはずだ」

一馬「雅緋さん基準!?!てか記憶喪失の経験あつたんですか……………それはともかく、そ

れで記憶が戻らなかつたら、どうするんですか!」(戻った)

まつくーる「……………何!?俺に足りなかつたのは死の恐怖だったのか。それならば誰でも良い、俺を痛めつけろ!」

一馬「ちよつと待てえ!?アンタ何信じちやつてんの!」

雪泉「そうです!雅緋さんと同じ理由で記憶喪失になつたとは限りませんしこんな所で瀕死になられても困ります」

まつくーる「……………そうか。すまん……………俺は記憶というものを失つていな」

雅緋「いや、私も悪かつた。しかし、ならどうする?私達は急ぎだ、また邪魔をされてはかなわん」

パープルハート「ふつ、数々の記憶喪失を克服して来たわたしの出番ね!記憶喪失なんて後々になると勝手に思い出す。つまり時間が解決してくれるわ!」

コイツが記憶喪失だったとか胡散臭え

ブラックハート「それはネプテューヌの話でしょ!そんなことで解決したら苦労しないわよ」

まつくーる「……………何!?ただ、待てば良かったのか。ならば天井裏に隠れて時を待たねば」

ホワイトハート「信じるのかよ！ まっくーるは影響受けやすいな、確かに何かありそうな場所だが、こいつは適当に言ってるだけだ」

一馬「そうそう、乗せられちゃダメっすよー」

まっくーる「……………そうか。すまん……………俺は記憶というものを失っていてな」
さつきもこんなやりとりあつたぞ

一馬「塚が明かん！ まっくーるさん、一体いつから記憶がないのか話してただけですか？ 昔の記憶がないんですよね？」

まっくーる「……………気づいた時、俺はどこかの街道にいた。そこで通り掛かった者に自分のことを聞き、どこかの嫡男に似てると言われた。嫡男というくらいだからきつと大きな家だと思い、一番大きな家を探し、家族との再会を願い帰った……………そして捕まった」

一馬「……………アンタ相当のバカだろ！ そして捕まった？ 当たり前だろ！ アンタは女なんだからよ！」

グリーンハート「信じやすい性格は昔からのようですわね……………」
まっくーる「すまん……………俺は記憶というものを失ってな」

一馬「もうええわ！……………しかし、これは記憶どころの問題じゃ無いな……………」
雪泉「みなさん静かに、今は話を聞いてください。なんだか続きが気になります」

おいおい

まっくーる「他にも『魂の欠片』を探せと言われたこともある。そこに俺の記憶が残っている」と

ん？どこかで聞いたことが…… やつぱり戒めろといいこの人…… 似てる！
ちよい昔にあつた忍者ゲームのキャラに！でもあの時考えた様にあの人は男だぞ
ブラックハート「それよ！それっぽいので来たじゃない。もしかして強い忍者なら
魂の欠片を持つてる可能性が高い、だから襲い掛かってきたとか？」

まっくーる「…… いや関係がない。一つも見つからず、どんなものかも分からん」
関係ないんかい！

まっくーる「だが、記憶を探すうちに似た様なことがあり、戦つて、守つて、隠れて、
逃げて、寿司を食わせて、俺は気づいた。俺は、強い。俺に残されたのは体に染みつい
た忍術のみ。どうやら俺は手練れの忍者らしかった」

ユウキ「ん、話は終わり？それで君は、何で忍者と戦つてるの？忍者と戦えば記憶が
戻るとか？」

まっくーる「…… なに?! そうか、俺は忍者との戦いの中で記憶を取り戻そうとし
ていたのか、そうに違いない！」

一馬「やつぱこの人バカだ…… それはともかく。今聞いた事の他に手掛かりは無

いのですか？」

まっくーる「…………… スチーム・レギオンの忍者。奴は俺を知ってる素振りを見せた」
雪泉「ヨウ||ゲイマのことですね。それで、あなたもスチーム・ノヴァに向かつていて。その道中で私たちを見つけ、襲って来た」と

まっくーる「…………… そうだ。新しい忍者と戦っておきたかった。すまん…………… 癖でついな」

一馬「癖だったのかい！」

飛鳥「そんな理由!?そこは記憶を失ったからじゃ無いんだ」

ユウキ「ねえ、悪い奴じゃ無いみたいだし、誘ってみるのはどうかな？」

お、良いアイデア

パープルハート「それもそうね。ねえ、まっくーる。わたし達もあの船に行くんだけど、一緒に行く?その代わり今後いきなり襲い掛かっちゃダメよ」

まっくーる「…………… 行こう。ゴウだけにな」

一馬「即答!?!ん?ゴウってもしかして…………… 名前ですか?」

ゴウ「…………… ゴウ、俺の名は鴉のゴウだ」

おいおいマジか、鴉のゴウってオレが頭の中に出ていた忍者ゲーム『忍道』の主人公だぞ。何で女に……………

クリスタル『一馬、考えてみる。並行世界に忍道と似たような世界、もしかしたらゴウは女かもしれない世界がな』

そっか！パラレルワールドか！つまりこのゴウさんはもしかしたらパラレルワールドから来たのかもしれない

グリーンハート「名前は覚えていたのですか………みんなまつくーるで定着していたのに今更、わたくし最初に聞きましたわよね？」

オレ定着してないんだけどなあ

ゴウ「すまん………名乗るタイミングを失っていてな」

ユウキ「あはは、やっぱりね。君は変わってるから、仲間になれると思ってたよ」

一馬「ゴウさんも仲間になったし出発………と言いたいが、オレ達も自己紹介しないとな」

そしてオレ達は自己紹介して、先へと進んだ

二十一ノ巻

モンスターを倒しながら進んでいると、ゴウさんが

ゴウ「一馬……お前は異大陸からの旅人だつて言つてたな」

つと言つてきた。ゴウさんには悪いが、オレはいつも通り、異大陸からの旅人つて設定で通している

一馬「はい、それが？」

ゴウ「お前がこれまでの旅で俺の記憶に関する事は……」

一馬「残念ながらありません」

ゴウ「……そうか」

一馬「なんか……すいません」

ゴウ「いや良い。すまん……」

まあ記憶というか並行世界のゴウさんのことなら一応ゲームで知ってるんだけどね。

一馬「それにしても……そろそろだな」

オレは空を見上げた、空にはスチームノヴァが見えていた。とは言つても侵入口は今のところ見当たらないが……

飛鳥「うん、ここまででは強敵の襲撃はなかったね」

ホワイトハート「ああ、拍子抜けだな。もつと手応えのある奴らが襲つて来ると思ってたんだぞな」

ゴウ「ヨウガイマ。船の中までお預けか」

グリーンハート「しかし、船の中は強敵だらけかもしれないわ。油断しているとあつという間に足元をすくわれますわよ。今の状態の一馬くんは特に……ね？」

一馬「が、頑張りますよ！にしても……誰かに見られてる気がする」
実はさつきから変な視線を感じるんだよなあ……

焰「見られてる？気のせいだよ」

一馬「そうですね？」

グリーンハート「いえ、もしかしたら気のせいではないかもしれないわ、ここは既に敵地、常に気を張らなければ。急な襲撃があつたらどうするのです？」

ゴウ「……俺の体は無意識のうちに気配を探っている。常に臨戦態勢だ」
一応いつでも抜刀出来る様にしとくか………
つて!?

？「フンフンフツ、フンフンフツ！」

飛鳥さんの後ろで紫の如何にも忍者なロボットが動いているのが見えた

一馬「飛鳥さん！後ろ！」

飛鳥「え？」

？「あ」

みんな「っ!？」

飛鳥「きやつ、な、何者ですか！」

？「やつと気づいてくれたで御座るか！さつきから如何にもな雰囲気を漂わせて立っていたのに……!!」

あ、このロボが変な視線の正体か！

ゴウ「すまん……俺は記憶を失っていてな……」

一馬「それ、関係ない」

？「それで御座る！くっ、さすが拙者、見事なまでの存在感の無さっ！だがこれで、やつと名乗れるで御座るな」

このロボ、感情があるってことはすでにシンギュラリティに達してるってことか……

一馬「あんた、名前は何だ！」

？「わ、我こそは、そそそそそ、その……すすすす……御座る……」

一馬「……は？」

まさかこいつ、ロボの癖にコミュ障なのか？

飛鳥「えっと、声が小さくてよく聞こえなくて。あの、名乗る時はもつとこう胸を張って、飛鳥、舞い忍びます！こんな感じ」

？「なんて優しい少女で御座るか。あ、飛鳥殿は天使のようで御座るな。拙者……い、今の言葉を励みに、頑張るで御座る！」

飛鳥「そんな大袈裟な……でも、うん、頑張つて！」

ステマックス「我こそは、スチーム・レギオンの刺客にして、豪商アフィモウジャス様に仕える忠義の忍。ステマックス！」

敵か！でもこのロボ……悪いロボじゃない気がするなあ

飛鳥「ステマックスさん！やれば出来……」

ホワイトハート「つておい、刺客!? 敵じゃねえか。何仲良く教えてんだ。それにお前ら、常に気を張つてたんじゃなかったのか？」

ゴウ「……バカな！俺に気づかれずに接近するとは、貴様も忍者か、かなりの使い手と見た！」

グリーンハート「ええ、さすがは刺客。まさかわたくし達に察知されずに近づくとは……改めて気を引き締めましょう」

ステマックス「え、いや、そ、その……拙者は……何もして……ない……で御座るよ」

ん?もしかしてステマックスって……

ステマックス「ま、待つで御座る……せ、拙者にちゆ、注目される……とはは恥ずかしいで御座る」

女が苦手的な?

ホワイトハート「何だこいつは、お前が注目されるよう名乗ったんじゃねえか……

今、アフィモウジャスって言ったか?」

ゴウ「何者だ、そいつも忍者なのか?」

ホワイトハート「いや、確か金のためなら何でもやるって豪商で、あまりにあくどい稼ぎ方をするものだから、波戸ノ国の出入りを禁止され、追放されたはずだ」

一馬「そのアフィモウジャスって奴が、今はスチーム・レギオンに加わっているのか?」

ステマックス「そうで御座る、アフィモウジャス様は宣伝隊長兼、金庫番として辣腕をふるって、おられるで御座る!」

ら、らつわん?

クリスタル『辣腕とは、テキパキ処理する能力があると言うことだ』

なるほど。ていうかオレと話す時は普通なのか……

ステマックス「拙者が、アフィモウジャス様から与えられた任務は、ここでおまえ達

を足止めすること！」（辺りを見回して、少し後ろに下がる）

一馬「おい、後ろに下がってるぞ」

ステマックス「ひやつ!? こ、これはその……」

一馬「もしかしてあんた、女性が苦手なのか?」

ステマックス「そ、そんなことは無い、でござるよ!」

一馬「慌ててるじゃねえか…… よーしならこうしよう、足止めの戦いなら、オレが受けて立つ! オレが勝てば進む、負けたらあいつらと一緒に大人しく帰る。どうだ!」

ステマックス「お主と…… それなら承知で御座る。ではこの先の広場で待つて
るで御座る。御免!」

そしてステマックスは奥へ向かった

一馬「と、いうわけで、戦って来るぜ」

焰「お前一人で大丈夫なのか!」

グリーンハート「相手はそれなりの強さだと思われますわ。大怪我したら……
ああ」

一馬「大丈夫だ、問題ない」（笑顔でサムズアップ）

ブラツクハート「かなり自信があるわね……」

パープルハート「そのセリフ心配だわ……………」

一馬「さつきゴウさんと戦った時のような鎧とかがあるから。じゃ！」

オレは奥へ向かった

飛鳥「一馬くん……………心配だなあ」

ユウキ「じゃあ、みんなで見に行く？」

ゴウ「あの忍者の強さ、見せてもらおう……………」

オレは広場へと着いた、広場にはステマックスがいた

ステマックス「来たで御座るな」

一馬「ああ」

ステマックス「改めて、我こそは、スチーム・レギオンの刺客にして、豪商アフィモウジャス様に仕える忠義の忍者。ステマックス!!」

一馬「ならオレも名乗るか。装着！」

オレはジンオウシリーズを装備した

一馬（ジンオウシリーズ）「オレはクリスタルに選ばれし悪を狩る狩人！坂田一馬！」

（雷が落ちる）

ステマックス「いざ！」

一馬（ジンオウシリーズ）「タイマン……………」

ステマックス「参るで御座る！」

一馬（ジンオウシリーズ）「はらさせてもらうぜ！」

二十二ノ巻

一馬（ジンオウシリーズ）「……………」

ステマックス「……………」

オレ達は互いに睨み合っていた……………」

一馬（ジンオウシリーズ）「はあ！」

先に動いたのはオレだ。オレはロングソードを抜刀してステマックスに向かった

一馬（ジンオウシリーズ）「ちえああああ!!」

ステマックス「っ！」

ロングソードを振り下ろした瞬間、ステマックスは消えた

一馬（ジンオウシリーズ）「消えた!?!」

何処だ!何処に……………」

ステマックス「どこを見てるで御座る。はあ！」

後ろか!

一馬（ジンオウシリーズ）「ちい！」

オレはロングソードで、奴の刀を防いだ

ステマックス「ほう、拙者の刀を止めるとは。だが、攻撃が遅いで御座るな」

一馬（ジンオウシリーズ）「まだ一回だけだぜ。これから当ててやるさー」

オレはロングソードで切ろうとしたが、どれも全て交わされた

一馬（ジンオウシリーズ）「く、くそっ！」

ステマックス「どうしたで御座るか？拙者に当てるんじや無いので御座るか？」

一馬（ジンオウシリーズ）「……………速いな……………流石は忍者と言ったところか……………」

ステマックス「当然で……………」

ステマックスの左腕の盾が、巨大な手裏剣になった。そう来たか

ステマックス「御座る！」

ステマックスは手裏剣を投げて来た

一馬（ジンオウシリーズ）「はっ！」

オレはジャンプして回避した。その瞬間

ステマックス「その行動は丸わかりで御座るよ」

一馬（ジンオウシリーズ）「っ!？」

目の前にステマックスが現れ刀を振り下ろして来た

一馬（ジンオウシリーズ）「ぐわああ!？」

オレは地面に叩きつけられた。うげ……………結構痛い

ステマックス「更に！」

一馬（ジンオウシリーズ）「ぐっ?!」

ステマックスは更にオレを踏みつけて来た。そして消えたと思つた次の瞬間

ステマックス達「分身で御座る！」

ステマックスは分身して、オレを囲んだ

ステマックス達「どうで御座るか、大人しく女神四忍達と共に国へ帰るで御座るか？」

一馬「……………へへっ、まだだ」

オレは立ち上がった

ステマックス達「まだ立ち上がるで御座るか……………しかし、この分身の術を見破れる

で御座るかな？」

一馬「……………ああ、見破れるさ」

オレはロングソードを天に掲げた

ステマックス達「刀を天に……………何をするつもりで御座るか！」

すると、ロングソードが電気を纏つた

ステマックス達「刀に雷が!？」

一馬（ジンオウシリーズ）「いくぜ、ギガ……………スラッシュ!!!」

オレは電気を纏ったロングソードで回転切りをした周りに雷の刃が飛び、ステマックスを分身ごと吹き飛ばした

ステマックス達「ぬうおおお!!？」

ステマックスは本物を残して消えた

一馬（ジンオウシリーズ）「はあ…… はあ……」

オレは装着解除した

ステマックス「くっ…… 拙者の分身の術をそんな力技で…… さすがはあんのうんと言われただけのことにはあるで御座るな。一馬殿……」

一馬「そりや…… どーも、で、通してくれるかい？」

ステマックス「まだで御座る！できれば使いたくなかったで御座るが、かくなる上は…… 上は…… く、くそう……」

それほど渋るとは、一体……

一馬「……」

ステマックス「これでもくらうで御座る……！」

ステマックスは何かをばら撒いた

一馬「何だこ…… おおう!？」（顔が真っ赤になる）

それは何と写真しかも、地球で言うエツちな写真ばかりだった

ブラックハート「一馬どうしたの!?! って、こ、これ……!!?」（顔が赤くなる）

ネプテューヌ達も来たのか……って、ほとんどの人達も赤くなってる。冷静になってる人もいるが……。ベールさんが写真と一緒にばら撒かれた封筒を手を取った

グリーンハート「これは、破廉恥画集……ですわね。きわどい格好のコスプレ美少女が、いっぱい。作者は……好春磨（こすまろ）。有名絵師ですわ」

一馬「おお……」

何故だ、本当なら目を瞑るはずが、がつつり見てしまう!

ブラックハート「ベール、冷静に分析しないでよ。くだらない、そのまま捨てておきなさい。あと一馬! まじまじと見ないの!」

一馬「こりやすげえ……」

実は気になってたんだよなあ、こういうの、でもみらい達が居るから買いに行こうにも買に行けないんだよなあ、学校の友達にも、こういうのをすすめされたけど……

クリスタル『やれやれ』

グリーンハート「もう手に入らないものもありますし、捨てるには少々勿体ないですわね。それにノワール、そう言いながら一冊手に取っているではありませんか」

ブラックハート「こ、これは違うわ!どんな服か少し気になっただけよ」
オレはノワールの持っていた画集を手に取った

一馬「どれどれ?おお!」

ブラックハート「ちよつと一馬!?!」

グリーンハート「あらあら、熱心に見ていますわね♪破廉恥画集は男の子にとっては目に毒の物でもありますが、大切な物でもありますからね」

ブラックハート「また冷静言ってる……………」

ゴウ「この派手な服装は何だ。しかも薄着で下着すら無い、これは新しい忍び装束か」
グリーンハート「好春磨は、そういう風に見える作風が売りですわ。履いているのかわからないのか、付けているのかわからないのか……………」

あいつらの興奮していた気持ち少し分かる気がする

ステマックス「い、今がチャンスで御座る……………これにて御免!」

ステマックスは一瞬で逃げてしまった

一馬「あ!」

ブラックハート「手裏剣でもなく、こんな破廉恥な物をばらまくなんて。わたし達でこの本を処分しなきゃいけないじゃない」

ホワイトハート「だな、参考資料つてわけにもいかないしな。どう処分するんだ?」

馬、ゴウお前達ならどうする？」

ゴウ「……………ここに俺の記憶の手掛かりがあるかも知れない」

一馬「……………ゴウさん、流石にそこには無いですよ」

ゴウ「そうか……………」

ホホワイトハート「こいつら……………」

パープルハート「まっくーるがどんな記憶を失ったのか気になってくるわね……………それよりも、この画集どうするの？」

一馬「じゃ、オレが捨ててくるぜ！」

とは言ったが、勿体無いしもともとはステマックスの大切な物だから取っておこう

ブラックハート「待ちなさい！持ち帰る気でしょ！」

バレた。ここは誤魔化すか

一馬「持ち帰らない。この目に焼き付けたから」

ブラックハート「焼き付けちゃったのね……………じゃあ捨てて来なさい」

良かった

一馬「りようかい」

オレは画集を封筒に入れ、広場を離れた。そして……………クリスタルに画集を入れて戻った

クリスタル『全く、我の中にこんな物を入れて………』

一馬「ただいまー」

ブラツクハート「意外と早かったわね」

一馬「ああ、投げてくるだけの簡単な仕事だったしな」

焰「大雑把だな……」

一馬「さ、行こうぜ！早く止めに行かないと！」

オレ達は先へと進んだ

二十三ノ巻

遂に来た…… スチーム・ノヴァ…… の真下に！

飛鳥「やつと着いた。すつごいエネルギーが溜まつてるように見えるけど、あれでどのくらいなんだろう。急いだ方が良いよね」

ユウキ「すぐそこに姫が、もう手が届く、手が……」

ユウキさんはジャンプしてるが届かなかつた。そんなんで届いたら苦労はしないぜ
ユウキ「ふう、これはちよつと無理だ。君たちどうする？」

一馬「いくらなんでもそれは無理でしょ。大方穴から光が…… 降りてきた」

上から一筋の光が降りてきた。ピンゴ

一馬「よし、先に行くぜ！」

オレは光に飛び込んだ。すると目の前の景色が一瞬で機械チックな景色になった

一馬「クリスタル、侵入成功だよな？」

クリスタル『ああ、ここはスチーム・ノヴァの内部でまちが間違いない』

直ぐにネプテューヌ達も来た…… ユウキさんはちよつと浮かぬ顔をしてたけ

ど

一馬「んー? …… あっ」

目を凝らして奥を見ると、ステマックスがいた

ステマックス「…………… 待っていたで御座る」

一馬「ステマックス……………」

ブラックハート「あなた、森林で一馬にやられたばかりよね? それに最後は逃げ出し、何をしに来たのよ」

ステマックス「アレを取り戻しに来たで御座る。拙者、一時の気の迷いでとんでもないことをしたと、後悔し、深く反省したで御座る。さ、早く返すで御座る」

パールハート「アレって? わたし達、何も買ってなければ盗ってもないわよ」

アレってまさか……………」

ステマックス「は、破廉恥画集で御座る。拙者の様な者が、あんな破廉恥な画集を持っているのは意外かも知れぬが、アレは大切なもの、返すで御座る!」

やはりそういうことか(OMO)

飛鳥「そんな全然、気にしなくていいよ。ああいうのを持ち歩くのは普通のことだつて」

ブラックハート「ま、人それぞれだし別にとかく言うことでもないわ、気にする必要なんてないんじゃないかしら。ま、イメージ通りといえばそうかもしれないわね」

もしオレがああ言うのを持ってたら、みらい達もこんな反応するのだろうか……………

ステマックス「ガーン……………　そ、そう思われていたで御座るか。拙者はもう終わりで御座る……………」

落ち込んだじゃったよ……………

ブラックハート「そ、そこまで落ち込むなんて、なんか悪かったわね」

ステマックス「もう遅いで御座るよ。さあ、アレを返すで御座る。そうすれば拙者は大人しく去るで御座る」

取っというて良かった……………　さっさと……………

パープルハート「あの、ステマックス、怒らないでほしいのだけど。画集なら一馬が投げ捨てちゃったわ。今頃、妖怪達にグシャグシャにされてるかもしれないわ」

一馬「へ？」

おい、オレが言う前に……………

ステマックス「なななななな、なんと……………。拙者がアフィモウジャス様より回

収を命じられた、大切な画集を……………　一馬殿が……………　拙者はこれより修羅とな

ろう……………　たとえこの命燃え尽きようとも、画集の仇討ちで御座る！」

うわ、すげえ殺気……………　じゃねえ!? 誤解されてる!?

一馬「いや、あの……………ステマックス実は」

ステマックス「問答無用！画集を投げ捨てた罪、その命で償うで御座る！」
聞く耳持たずか！

一馬「くっ、無駄か……………ネプテューヌ達は先に行け、オレはステマックスを止める！心配すんなよ、絶対に止める」

オレはサムズアップした

パープルハート「その言葉……………死亡フラグにしたらダメよ」

飛鳥「みんな！ここは一馬くんに任せて先に行こう！」

グリーンハート「一馬くん、どうかご無事で……………」

ネプテューヌ達はステマックスの後ろの通路へ進んだ。進んだ瞬間、扉が閉じてオレはステマックスとこの部屋に閉じ込められた

ステマックス「画集の敵討ちをし、直ぐにあの者共も止めて見せるで御座る。いざー！」

一馬「装着！」

オレはジンオウシリーズを装備した。くっ、この殺気、森林とは別レベルだ。相手は本気だ

一馬（ジンオウシリーズ）「だあああ!!!」

オレは雷を纏った拳で殴りかかった

ステマックス「……………」

ステマックスはあの時と同じ、高速で回避した。逃すか！

一馬（ジンオウシリーズ）「迅雷！」

オレもスピードを速くし、ステマックスに追いついた

一馬（ジンオウシリーズ）「オラオラ！」

オレは再び殴った。今度はヒットした

ステマックス「ぐっ、拙者の速さに追いつくで御座るか！しかし、今の拙者は修羅。速

さはこんなものではないで御座る!!!」

ステマックスは更にスピードを上げ……………消えた

一馬（ジンオウシリーズ）「っ!？」

ステマックス「ふん！」

一馬（ジンオウシリーズ）「があ!？」

突然背後からステマックスに吹っ飛ばされた。

一馬（ジンオウシリーズ）「そこか！迅」

ステマックス「はっ！」

後ろを向いて迅雷を発動しようとしたその時、ステマックスは無数のクナイを投げて

来た

一馬（ジンオウシリーズ）「いつ!?」

ステマックス「せやつ！」

そして最後に、一気に懐に攻められ、刀で吹っ飛ばされた

一馬（ジンオウシリーズ）「うわあ!?!」

オレは壁に叩きつけられた…………… つええ

ステマックス「これが修羅と化した拙者の本気で御座る…………… さあ、覚悟するで御座る」

ステマックスはゆっくりと向かって来た…………… オレは立ち上がった。クリスタル装着解除だ。そして……………

クリスタル『ふむ、分かった』

ステマックス「ふん、諦めたで御座…………… ん?その腰に巻いてる物は一体!」

オレの腰にはとあるベルトが装着されていた…………… そして、オレは右手を天井に向けて掲げた。すると右手に光が現れ、光が収まると青いクワガタムシのメカのような物を掴んでいた

ステマックス「なんで御座るかそれは!」

一馬「…………… 変身!」

オレは青いクワガタメカ…………… ガタツクゼクターをライダーベルトにセットし

た

《HEN—SHIN》

セツトすると腰から徐々にオレの体を鎧が纏った

ステマックス「その姿は一体………」

オレは仮面ライダーガタックに変身した

一馬（ガタックM）「ステマックス、お前を止められるのはただ一人、オレだ！」

さあ、行くぜ！

二十四ノ巻

ステマックス「拙者を止めるとな？ そんな鈍そうな鎧でか」

この姿だと遠距離攻撃はあるが、それも無意味になるな

一馬（ガタツクM）「確かにこの姿じゃ鈍そうって言われても仕方ないか。見せてやるよ、この鎧の真の姿をな！」

オレはガタツクゼクターの顎を弾いて少し開かせた。すると、待機音が鳴り、装甲が徐々に開く

一馬（ガタツクM）「キャストオフ！」

そして、一気に顎を倒し切った。

《CAST OFF》

その音声が鳴ると、装甲、マスクドアーマーが飛び散り、両側にあるクワガタの顎をモチーフにしたツノが起き上がって頭にくっついた

ステマックス「むっ!？」

ステマックスは飛んできたマスクドアーマーを最も簡単に回避した

《CHANGE STAG BEETLE》

こうしてガタツクは重装甲のマスクドフォームから、装甲をパージして身軽になったライダーフォームへとキャストオフした

ステマックス「多少は身軽になった様だな。だがそれでは拙者の速さにはまだ及ばないで御座る！」

ステマックスは消えた

ステマックス「ふははははは！この動きについて来られまい！」

一馬（ガタツクR）「確かにそのまま戦つてもあんたのスピードには追いつけない。だが……言つたはずだ。お前を止められるのはただ一人、オレだつてな」

一氣にカタをつける

ステマックス「止められるものなら止めてみ」

一馬（ガタツクR）「クロックアップ！」

オレはベルトの右にあるスラップスイッチを押した

《CLOCK UP》

鳴り響いた瞬間、ステマックスの姿が見えた。いや、正確にはオレ以外動きが物凄く遅くなったと言つた方がいいか

ステマックス「るうーでえー」

喋りも遅くなつてゐる。近づいてみるか。オレは走つてステマックスに近づいた。奴

の目には一瞬で近づいたってことになるだろう

ステマックス「ぬぁーにぃー!?」

オレはガタツクゼクターのボタンを押した

《1、2、3》

ガタツクゼクターの顎を閉じ……

一馬（ガタツクR）「ライダーキック!」

一気に顎を開いた

《RIDER KICK》

一馬（ガタツクR）「はぁ!」

そしてステマックスに回し蹴りを浴びせた。そして後ろを向いたまま、スラップス
イツチを再度押し、クロックアップを解除した

《CLOCK OVER》

ステマックス「うぉおお!」

クロックアップを解除した途端、ステマックスは吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられた。
そして、閉まっていた扉が開いた。オレはガタツクゼクターを外して変身解除し
た……クリスタル、大丈夫だよな?

クリスタル『心配ない、出力は落としてある。お前の回し蹴りも大丈夫か?』

ああ見えて手加減してるから大丈夫なはず……………

ステマックス「ぐぬう……………まさか拙者の速さを上回るとは……………」

良かった

ステマックス「だが……………ここで倒れては……………破廉恥画集に……………多くのコ

スプレ少女達に、このままでは顔向けできないで御座る……………」

今だ！クリスタル。アレを！

クリスタル『分かった』

クリスタルは中からエロ画集の入った封筒を出した

一馬「おいステマックス、これを見ろ！」

ステマックス「……………っ!?そ、それは!」

ステマックスはオレに近づき、まじまじと封筒を見た

ステマックス「……………」

一馬「あ、あんたがばら撒いた破廉恥画集、本物だぜ？」

ステマックス「中身はあるで御座るか？」

一馬「ああ、この通り」

オレは封筒を振った。中身がある音が鳴った

ステマックス「ああ……………一馬殿……………捨ててなかったので御座るな……………」

一馬「ああ、捨てるのは勿体無いと思つて、アイツらにバレない様に隠してたんだ」
 ステマックス「それならなぜあの時に言わなかつたで御座るか。それなら争わずに済んだで御座つたらうに」

一馬「言おうと思つたが、ネプテユース。女神四忍のパールハートに先に言われてな」

ステマックス「それで御座つたか……………それはともかく、辱いで御座る！」

ステマックスに封筒を渡した

一馬「じゃあ、オレは司令室に」

ステマックス「司令室で御座るか？なら拙者もお供するで御座る。早くアフィモウ

ジャス様にこの事を……………ぐっ」

ステマックスは片膝をついた

一馬「おい、大丈夫か？」

ステマックス「先程の一馬殿の蹴りが……………」

マジか……………加減したと思つてたんだが……………

一馬「あ……………ごめんなさい」

ステマックス「良いで御座る」

一馬「早く行かないとな……………あ、そうだ」

クリスタル、今からイメージするバイクになれるか？

クリスタル『……………これにか？分かった』

一馬「それ！」

クリスタルを投げると、クリスタルは輝いて、金のラインが入った黒いサイドカー付きバイクになった

ステマックス「いきなり乗り物が！」

オレはバイク……………サイドバツシャーに乗った

一馬「あんたはそっちに乗って」

ステマックス「承知……………うむむ、拙者にはかなりギリギリで御座るな」

ステマックスはサイドカーに乗った

一馬「んじゃ、道案内頼むぜ！」

ステマックス「承知！」

クリスタル、操縦は任せただぜ

クリスタル（サイドバツシャー）『了解』

サイドバツシャーはオレとステマックスを乗せて出発した

※良い子のみんなは大きくなって（大体高校生から）から免許を取ってバイクに乗ろ

うね

とおっさんの声が聞こえた

一馬「ステマックス。今の声は？」

ステマックス「アフィモウジヤス様で御座る！」

今の声が!?!するとステマックスはサイドカーから降りて

ステマックス「……………アフィモウジヤス様！拙者、拙者は死んでいないで、御座る！」

と大声で言った。クリスタル、扉のロックを外せるか？

クリスタル（サイドバツシャー）『ああ。その為に、一元に戻るぞ』

オレは降りた。クリスタルは元に戻った

クリスタル『我をあの扉に近づけろ』

オレはクリスタルを扉に近づけた。すると直ぐに扉が開いた

クリスタル『これくらいのロックなど我の前には無力だ』

すげえな……………

アフィモウジヤス「おお、おおっ！ステマックス生きておったか！さすがワシの忠義の忍者！」

うお！この人もロボットかよ！こつちもシンギュラリティに達してるな……………

ブラックハート「一馬!?!なんであの忍者と一緒なのよ！」

一馬「どうにか抑えて、そして隠してたエロが…… 破廉恥画集を返した」

ユウキ「…………… え、つてことはあれを捨ててなかったってこと？」

一馬「ええ、だつて捨てようにも…………… あつちのものだから返そうと思つて……………

嘘ついちゃつた」

グリーンハート「全く…………… わたくし達に嘘をつくなんて…………… めっ、ですわよ

？」

一馬「ごめん……………」

ステマックス「拙者、誓いを果たさぬまま死ぬで御座るよ！世界中の破廉恥画集を集め、破廉恥画集に埋もれて過ごす誓いを！」

そんな夢が…………… あれこれは言わないぜ

アフィモウジャス「ステマックスううううー！！！」

ステマックス「アフィモウジャス様あー！！！」

良かった良かった

ブラックハート「なによこの茶番。あなた達、いいから早く砲撃を止めなさい！」

アフィモウジャス「それなら…………… もう止まつておるぞ！貴様らが侵入した時点で

な」

ホワイトハート「ああ、どう言うことだ？」

クリスタル！エネルギー反応は？

クリスタル『……………「反応は無いな」

なるほどオレ達はまんまと「釣られた」と

アフィモウジャス「エネルギーを主砲に溜め、そう見せていただけ。ヨウの指示だ。その小僧は知らないようだから、もう一度言おう。貴様らは「おびき出された」とな。ワシの役目は、ここで貴様らの相手をし、足止めと時間稼ぎをすること。最初から適当に時間を稼いだら逃げるつもりだった」

焰「その割には、本気を出してたよな。戦ったんだ、わかるぞ」

アフィモウジャス「それはステマックスがその小僧にやられたと聞き、頭に血が上がつってしまったのじゃ」

一馬「おい、一体アフィモウジャスになんて言ったんだ」

パールハート「今頃あの忍者は、一馬にやれてるでしょうね、って言ったのよ」

一馬「おいおい……………」

ステマックス「アフィモウジャス様…………… そうだ、アフィモウジャス様に渡したいものが」

すると、ステマックスはエロ画集の封筒を見せた

飛鳥「本当に捨ててなかったんだね……………」

アフィモウジャス「おお！これはまさしく虎穴国で独占販売された好春麿の破廉恥画集！でも何故これが？お主が逃げる時に投げつけたと聞いたが？」

ステマックス「あちらの一馬殿が全て回収していたので御座る。そして拙者に返してくれたで御座る」

アフィモウジャス「そうか……………小僧、いや一馬よ！」

一馬「な、何でしょうか？」

すげえ威圧感……………

アフィモウジャス「この破廉恥画集をステマックスに返してくれたことを感謝する！」

一馬「いやいや、気にすることないぜ。捨てるのを勿体ないって思って取っておいただけだから」

アフィモウジャス「お主が捨ててなかったら今頃……………」

一馬「あははは……………それにしても、オレ達をここへ釣った意味……………そう言うことか。繋がった」

雪泉「分かったようですね」

一馬「はい雪泉さん。奴らの狙いは波戸ノ国のシエアクリスタルです」

グリーンハート「正解ですわ、一馬くん」

飛鳥「大變！女神四忍のみんながここにいたら、波戸ノ国が落とされちゃう！」

パールハート「ええ、いーすんやみんなが心配よ。急いで戻りましょう」

一馬「ああ、マツハで戻ろうぜ！」

ゴウ「アフィモウジャス。ヨウはそこにいるんだな？」

アフィモウジャス「知らん、と言いたいところだが、シエアクリスタルを狙っているのならいるはず。今までもそれだけはヨウとテツコで行っていた」

ゴウ「……そうか。ならば、行くまで」

ユウキ「こつちの質問にも答えて、姫はどこ？妖壺太夫の居場所を教えなさい！」

ああ、ここにあるはいなかったんだな

アフィモウジャス「そちらは本当に知らん。ワシと同時期にスチーム・レギオンに加わった者がいたはずだが、最近見ておらん」

ユウキ「妖壺太夫はスチーム・レギオンに戻ってない。単独行動で決まりだ。それならもうここに用はない。けど、どこに……」

ホワイトハート「おい、また嘘じゃないだろうな。なんでそんなペラペラ話してんだ」
アフィモウジャス「ワシは最初から嘘などついておらん。金を稼ぐための手段は選ばんが、嘘はつかん。それが豪商アフィモウジャスじゃ。これ以上スチーム・レギオンと組んでも割に合わぬ。ヨウはワシらのことも捨て駒程度にしか思っておらん、十分稼が

せてもらったし、潮時だ。ワシらはスチーム・レギオンから離脱する。もう、貴様らの前に敵として立ちはだかることはない」

あつさりと抜けちやうのかよ……

アフィモウジャス「一馬よ、ステマックスの命を奪わなかった事、そして破廉恥画集を持つてきてくれたことを今一度感謝する。さらば！」

すると、アフィモウジャスは窓を破つて落ちた……は？

一馬「おいしい!？」

ステマックス「それでこそ、我が主君。拙者、一生ついていくで御座る！」

ステマックスも落ちた。

一馬「あんたもかあああ!？」

心配だ……でも生きてると思う……多分

グリーンハート「嘘では無さそうですね。理に適っているようにも思えましたわ」
パープルハート「みんな、すぐに戻りましょう……いーすん、大丈夫よね」

そしてオレ達はスチーム・ノヴァから降りた。ちなみにネプテューヌ達は既に変身解除してた

ネプテューヌ「ここから波戸ノ国まで戻るんだよね、間に合うかな……」

ブラン「船を残していった以上、スチーム・レギオンは足で移動しているはず。わた

し達の方が身軽だから、可能性はあるわ」

一馬「じゃあ、急がねえと………クリスタル！オートバジンだ」

クリスタル『分かった！』

オレはクリスタルを投げると、銀色のバイクになった

飛鳥「これって………」

ベール「バイクですわね。ってまさか！」

一馬「よつと」

オレはオートバジンに乗った

ベール「一馬くん！その年齢でバイクに乗るのですか!？」

雪泉「危険です！」

一馬「大丈夫ですよ、バイクの運転自体はこいつが動かしますし」

クリスタル（オートバジン）『ああ、運転は任せろ。では、波戸ノ国でな』

一馬「おわつと!？」

クリスタルはオレを乗せて出発した。っておいおい!先に行っちゃうのかよ!まあ良いけど、目的地は同じだしね

二十六ノ巻

オレはクリスタルが変化したオートバジンに乗って、ニンガジャ森林を抜けて波戸ノ国へ戻った

一馬「ふう………何とか着いたが………まだネプテューヌ達は来てないようだな。少し待………」

その時だった

機械忍者「エネミーサーチ。コンバット・オープン。対象、アンノウン」

機械忍者が波戸ノ国側から出て来た。やはり簡単には城には行かせないってか

一馬「つわけにはいらないか。悪いがお前らの好きにはさせない」

クリスタル（オートバジン）『一馬、どうする？』

一馬「クリスタル、突っ込め！」

クリスタル（オートバジン）『分かった！しっかり握っておけよ』

オレはハンドルをしっかりと握った。オートバジンは一直線へ機械忍者へと向かった

機械忍者「お見舞いす」

一馬「邪魔だ！」

オートバジンは機械忍者を突き飛ばした機械忍者はそのまま爆発した

一馬「クリスタル、ファイズフォンを」

クリスタル（オートバジン）『了解』

オートバジンのライトが光ると、右手に携帯、ファイズフォンが現れた。すぐに開くと、103を入力してEnterを押した

《SINGLE MODE》

と鳴ると、オレはファイズフォンの上をそのまま横に倒して銃っぽい形にした

一馬「よし、これでOK、クリスタル、ネプテューヌ達が来るまで時間稼ぎ、そして人助けだ！」

クリスタル（オートバジン）『ああ！』

すると

「やめろテメエら！」

と声が聞こえた。声が出た方向は……露店だ！オートバジンは直ぐに露店へ向かって走った。あそこを落とされたら、どこで買い物すりや良いんだよ！それ以前になあ、あの声はおっちゃんの声だった！

〔露店〕

機械忍者隊長「アイテムは貰っていくぞ」

「や、やめろ！持っていくならせめて金を払いやがれ！」

機械忍者隊長「金か……生憎そんなものは……ん？」

一馬「やめろ！」

オレはおっちゃんのお店からアイテムを盗っていた機械忍者に向かってフオンブラスターを撃った

機械忍者隊長「ぬっ!？」

相手は少し怯んだ。その隙に

一馬「おりゃあ！」

オートバジンを体当たりした

機械忍者隊長「うお!？」

相手は吹っ飛んだ

一馬「おっちゃん大丈夫ですか？」

「おお！あんちゃんじゃねえか！俺は大丈夫だ！」

一馬「そうですか、それじゃあおっちゃんはお店の中に避難して下さい。ここは、オレが何とかします！」

「ああ、頼んだ！そんな奴ら波戸ノ国から追い出しちまえ！」

そう言っておっちゃんは店の中に避難した

機械忍者隊長「ぐぬぬぬ、よくもやってくれたな、アンノウン！」

オレはオートバジンから降りた

一馬「悪いがお前達にこの国は落させはしない。少しでも守ってやるさ」

機械忍者隊長「なら、守ってみせるんだな」

相手は大きな銃を出し、チャージし始めた

機械忍者隊長「さあどうする？ 避ければ後ろの店が吹っ飛ぶぞ。まあ、避けたところで巻き込まれるだけかもな」

シングルモードじゃ効果はそんなになかった……… だったらこれだ！ オレはすぐ

さま106からのEnterを押した

《BURST MODE》

機械忍者隊長「何をしようと無駄だ！」

一馬「そいつはどうかな？」

オレはフォンブラスターを奴の銃のチャージされてる銃口に向けて撃った。3発発射された赤いレーザーが銃口に入っていた

機械忍者隊長「なっ!!? 貴様!!? うおあああ!!!」

その瞬間、相手は銃もろとも爆発した

一馬「ここへ来る前にチャージしなかったのが仇になったな」

オレは爆炎に向かつてそう言った。幸い後ろに建物は無かったから被害はないはず……………

一馬「おっちゃん！さっきの奴は倒しましたよ！」

「おお、やったか！やるじゃねえか！」

一馬「ええ、んじゃオレは別の場所にいる奴等も片付けて来ますんで」

オレはオートバジンを乗ってその場を後にした

「あ、おい！…………… 行っちゃったか……………」

その後、オレはオートバジンで移動し次々と倒していった

一馬「やつ！」

機械忍者「ぐふっ!？」

一馬「ふう、さて、次の場所へ行くか……………」

機械忍者「後ろからお見舞い致す！」

はっ、と後ろを向くと、機械忍者が武器を振り下ろそうとしてた。くっ！この距離じゃこつちがやられる…………… と、その時だった

? 「はあ！」

機械忍者「ぐっ!？」

突然誰かの拳が機械忍者を貫いていた

？「大丈夫ですか？」

オレの目の前には、男の人が立っていた…… すぐえこの人が機械忍者をぶち抜いたのか……

一馬「あ、はい」

佐介「良かった…… 僕は佐介、磨愛辺国の大名の命で同盟国である波戸ノ国を助けに来ました」

磨愛辺国の…… てことは飛鳥さん達の知り合いって可能性もあるか。いや、絶対知り合いだろう

一馬「あ、えっと、オレは坂田一馬、旅人です」

佐介「旅人ですか…… っと僕達、囲まれたようです」

ふと周りを見ると、機械忍者達に囲まれていた

佐介「一馬くん、僕が道を開けますので、君は今乗ってるそれで逃げてください」

一馬「逃げる？オレも戦いますよ」

オレはフォンブラスターを構えた

佐介「無茶ですよ!？」

一馬「これでも旅人です。これくらいの無茶なんて…… ほぼ毎回経験しましたよ

！」

オレはフォンブラスターで1体の頭を撃ち抜いた

機械忍者1「ぐっ!？」

機械忍者2「貴様!先制攻撃とは卑怯な!」

一馬「卑怯?はっ、そんな事を良くほざけるな。街を襲撃してる癖によ!行くぞ!」

行くぞ!の合図で、オートバジンは突っ込んだ

佐介「全く、無茶をしますね……………」

佐介さんも機械忍者軍団に突っ込んだ

一馬「は!」

佐介「やつ!はっ!はあ!」

すつげえ、次々と格闘技で倒していつてる……………だが

一馬「キリがありませんね……………」

次々と出て来た

佐介「こうなったら…………… 獣波拳!」

佐介さんは、虎型のエネルギー弾いや、気弾を打ち出した。気弾は前方の機械忍者軍

団を一瞬で倒した

一馬「すつげえ……………」

佐介「さ、道は開けましたよ。行ってください。ここは僕がなんとかしますから」
一馬「え、でも……わっ！」

オレがまだ戦えると言おうとした瞬間、オートバジンが走り出した。なんで走り出すんだよ

クリスタル（オートバジン）『一馬、ここはアイツに任せよう。我らは他の場所の奴らを片付けるぞ』

……分かった

一馬「ありがとう！ 佐介さん！」

佐介「一馬くんも気をつけて！」

その後、オレとクリスタルは、他の場所にいた機械忍者を倒して、人助けをしていた。そしてここへ戻って来て数時間、空が夕方になった時のことだった

一馬「大体片付いたかな。ふう、夕日が綺麗だ」

クリスタル（オートバジン）『一馬、そんなことを言ってる場合か。ネプテューヌ達は既に波戸ノ国へ来ているぞ』

一馬「まじか」

まあ、人助けとかできたし良いか、さて、合流しないとな

一馬「んじやあクリスタル、ネプテューヌ達のところまでよろしく〜」

クリスタル（オートバジン）『任せろ』

オートバジンは直ぐにネプテューヌ達の元へ走った。ネプテューヌ達がいたのは城の前だった

一馬「おい！」

パープルハート「一馬！」

ユウキ「無事だったんだ！」

一馬「先に国へ着いて、いろんなところを回りながらスチーム・レギオンの奴らを倒して来たところですよ」

オレがオートバジンから降りると、直ぐ様ベールさんが抱きついて来た。ちよつと苦しい。ちなみにオートバジンは元に戻った

グリーンハート「心配したんですのよ！波戸ノ国に着いたら居なかつたので、もしかしたら先に行って、やられたのかと……」

一馬「だ、大丈夫ですよ。ほら、ピンピンしてますし……」

ブラツクハート「とりあえず、一馬と合流出来たし、早くお城へ行きましょう」

一馬「おう！」

オレ達は城へ入った……イストワールさん、無事でいてくれよ！

二十七ノ巻

城の中には誰もいなかった……嫌な予感がしつつもオレ達はいつもイストワールさんがいる大広間へ向かった

ブラツクハート「ここにも誰もいないわね、イストワール……」

ゴウ「……また遅かったか……戒めよう」

雅緋「おいつ、シエアクリスタルを確認するぞ。それではつきりするだろう」

オレ達は天守閣へ移動した。この天守閣へ入るのは初めてだ……

ホワイトハート「ちつ、ダメか。クリスタルの光が……シエアエネルギーが……ない……」

クリスタル、シエアエネルギーは感じれるか？

クリスタル『いや、微かなエネルギーも感じない。根こそぎ搾り取られたようだ』

一馬「くそっ……」

守れなかったか……でも、人々を守れたほうがオレにとっては嬉しい……かな。すると

アイエフ「あら、遅かったじゃない。やっと帰ってきたのね、敵は退いたかしら？」

コンパ「もうあいちゃん。ねぶねぶ達だつて急いで来たですよ」

パールハート「あいちゃん!? こんぱ!」

奥からアイエフさんとコンパさん。そして……

イストワール「おかけりなさい。みなさん」

イストワールさんが来た。生きてて良かった……

一馬「イストワールさん! 一体何が……」

イストワール「ここで起きた事を話しましょう……」

そしてイストワールさんはここで起きた事を語ってくれた。そして、判明したのは奴等、スチーム・レジオンの目的だった。奴等は奪った大量のシェアエネルギーを使い……封印されてる伝説の悪鬼を蘇らせるという事だった

イストワール「その後、助けに来たアイエフさんとコンパさんのおかげで、私はなんとか助かりました……すみません、シェアエネルギーは守れませんでした」

アイエフ「先に町が攻められて、そつちで足止めを食つてるうちにこの様よ。ネプ子達に任せつきりで、波戸ノ国も人材不足よね」

いや、そんな事はなかったな。現にオレ磨愛辺国の忍者の人と一緒に戦つたし。他の忍者も戦つてたはずだ

パールハート「年中求人を出しているのだけど……うちの待遇じやかなり強

い忍者は来てくれないわ。逆お祈りされてばかりよ」

一馬「大変なんだな……」

アイエフ「ま、無いものねだりをしてもしようがないわよね、けど、緊急時に何も力になれず、最近修行も疎かになっていたから、なおさら面目ないわ」

雅緋「私たちもまんまとしてやられた。お前たちも気にするな」

グリーンハート「そうですね。イストワールが無事で良かったではありませんか。相手の狙いも詳しく分かりましたし」

一馬「奴等の目的は悪鬼復活か……」

何としても阻止しないと

ホワイトハート「どこに封じられたんだ。まさか、近くのかい湖の中か？」

イストワール「いえ、アイエフさんとコンパさんによると、悪鬼が封じられてるとしたら、西方の府示山にある、クモツ比良坂の奥と思われます」

なるほど……

ユウキ「ねえ、この二人って何者？」

あ、そっか。ユウキさんは初めて二人と会った時、軽く自己紹介したんだっけか
アイエフ「私はクモツ神社の巫女。魂波流の忍者でもあるわ。クモツ比良坂はそもそも悪鬼との戦いのせいで出来たんじゃ無いかって話があるのよね」

コンパ「わたしはこれでも魂波流の顔役で、里に伝わる話を調べてきました。人の少ない場所、西の方で倒したって」

ユウキ「ふーん、二人つて魂波源流齋の関係者か。私なんかよりよっぽど、姫に相応しそう……」

ゴウ「……その悪鬼は忍者なのか？俺の記憶の手掛かりが……」

一馬「あるわけないでしょうが！」

ブラツクハート「はあ……流石に古すぎよ……ま、次の目的地は分かったわ。敵は府示山に現れるのよね？」

アイエフ「府示山の麓に「クモツ大社」があつて、山頂のクモツ比良坂への入り口を管理しているわ。部外者は立ち入り禁止よ」

雅緋「だが、そこを狙ってくるのだろうか？そんな事を言ってる場合では無いと思うが」
イストワール「わたしが話を通し、クモツ比良坂へ入れるように手配しておきます。みなさんは休んでいてください」

コンパ「わたしも手伝うです。準備が出来たらみんなに伝えに行くので、好きにしてください」

ホワイトハート「疲れているところ悪いが、なるべく早く頼むぜ。相手の動きが想定しているより早い」

焰「だな、いい加減追いかけてここには飽きた。すぐに行った方がいいんじゃないか？」

雪泉「私たちは準備をします。早く行けば良いというものでもありません」

グリーンハート「それではみなさんお風呂はどうでしょう。移動が続いて疲れてますし、休むことも立派な準備ですわよ」

飛鳥「前に入った広いお風呂？色々あったけど楽しかったな。雪泉ちゃん良いよね」

雪泉「……………仕方ありませんね。疲れが溜まつてるのも確かですし。でも……………」

雪泉さんがオレの方をチラツと見る

一馬「あ、オレ、覗く気は無いんで。さっと入ってさっと出ますんで」

オレは笑顔でそう言った

雪泉「そ、そうなのですか……………」

ゴウ「……………風呂か。みんな、長湯には気をつける」

パープルハート「長湯くらい平気ですよ。少しの間だけど、ゆつくりさせてもらおうわね。それじゃ、案内するわ」

そして、オレは風呂に入って、洗って、入ってリラックスし、そそくさと出た

一馬「さてオレは……………町の復興でも手伝いに行くか」

オレは風呂場を……………城を後にして町へ向かった

一馬「この辺りは…… 目立った被害は無いな」

クリスタル（オートバジン）『ああ、他の場所に行こうか』

一馬「ああ」

で、いろんなところを回ってみたものの、どこもかしこも人だかりが出来すぎて、ああ、オレがいなくてもこりやすぐに復興するな、と悟り、一足先に基地へ戻り…… すこし寝た

イストワール「みなさん、ゆつくり休めましたか？」

少し寝たおかげで疲れは取れたかな

ネプテューヌ「うん！お風呂をみんなで楽しんだから元気いっぱいだよ！それでさ、いーすんに聞きたいことがあったんだけど、ああある姫の居場所って分かった？」

ユウキ「あれから随分経ってるから、姫もそろそろ限界のはず…… 何でも良いから教えて！」

イストワール「…… すみません。状況からいくつか目星は付けていますが、正確な位置まではまだ不明です。人がいる以上、必ず食料等の動きが出ます。張つていれればいずれ尻尾を出すはずですよ。もう少しお待ちください」

ユウキ「……」

ノワール「えつと次の目的地は、予定通り府示山つてことになるのかしら。その前に

みんなで目星を総当たりするって手もあるけど」

ブラン「姫の方は調査結果を待つべきね。総当たりだとかえって時間がかかるわ。確実な方からよ」

ユウキ「ごめん。私は行けない。みんなと一緒にいたのは、姫がいる可能性があったから。私の任務は姫の救出。ここからは一人でやる」

一馬「ユウキさん……」

そうだよな……ユウキさんの目的はあくまであるの救出……

ユウキ「君たちは府示山へ行つて。私は世界の平和より姫をとふ。だから、ここでお別れ」

ベール「謝ることはありませんわ。主に仕えるのが忍の務め。わたくしもそちらに行きたいぐらいですわ」

絶対ある狙いだ

飛鳥「むしろこつちこそ手伝えなくてごめん！私達の忍務はスチーム・レギオンの打倒で……でも別の任務になっても仲間だからね！」

ゴウ「……俺は姫が誰か分からん。だが、こつちは任せろ」

ユウキ「ゴウは姫のこと元々知らないでしょ。でも姫はね……会ったら忘れられない可愛さだから、楽しみにしてて」

？『…………… ユウキ…………… ユウキ…………… 聞こえますか？』

ん？この声どこから。いやそれ以前に…………… 似てる。オレがここへ来るきつかけになったあの声に……………

ユウキ「そうそう声もこんなに可愛く…………… 姫！無事で……………、私信じてた。良かった……………」

ん？姫？て事は！ああるの声!?すると、オレ達の目の前に映像が現れた。映像には、ああると洞窟が見えた

焰「なんだこれ、あある姫なのか？てことは、これが仮想幻影か」

あある姫『ユウキも無事そうで。力が通じて良かった、これで』

ユウキ「そこはどこ？すぐ迎えに行く！」

あある姫『分かりません…………… どこかの洞窟です。時間がありません。今から広範囲の仮想幻影を使い、洞窟の外を送ってみます』

ユウキ「待つんだ。そんなことして平気なの？顔色も悪いのに」

あある姫『少しなら……………。だからお願い。わたしを見つけてください。わたしもユウキを信じてます』

すると大陸、そしてどこかの渓谷が映し出されて、映像が終わった。それにしてもあの声。似てるまさか。オレをここへ呼び出したのはああるになるのか？だったら何

で……

飛鳥「あつ、消えちやつた。姫の声も聞こえないし限界だったのかな。みんな今の場所分かる？」

ユウキ「ダメだ、分からない。どこかの渓谷、武威ノ国じゃない」

ブラン「波戸ノ国でもないわ」

雪泉「磨愛辺国でもありませんね。私達の国以外だと、絞りきれないかもしれません。そこまで考えて場所を選んだのなら大したものですよ」

イストワール「あれは、『ツーホウ峡谷』ですね。目星を付けていた一つなので間違いないでしょう。ここから西にある峡谷ですよ」

ユウキ「分かった。私、行ってくるね！」

ベール「ユウキさん、わたくし達も行きます。場所が分かっているのなら、姫の救出に行つても問題ありませんわ」

この事を話すべきか……でもユウキさん、怒りそうだしなあ……

雪泉「方角は同じようですよ、他の流派とはいえ妖怪に与した忍など、見過ごせません」

焰「ああ、単なるついでだ。大体な、ユウキは前回逃げられてるんだ。私達を頼れ」
ユウキ「でも……ダメ、やっぱ頼れない。これは私の問題だから、君達は世界を。」

心配しなくても、姫は私の命に代えても助ける」

ノワール 「ああもう、ユウキの問題は私達の問題なの！ここで一人で行かせたら気になって世界も救えない、だから行くの。これで良いでしょ」

ベール 「素直ではありませんわね。わたくしもずっときになってますから、間違っ
はいませんけれど」

雅緋 「イストワール様、それでいいか？あある姫を救出後に府示山に向かう」

イストワール 「そうですね、みなさんで行ってください。目星がついていたのに見つ
からなかった場所です。洞窟と言っていましたし、人手が必要でしょう」

ユウキ 「…………… ありがとう。お願い、姫のために力を貸して」

ネプテユーン 「もちのろんだよ！いやー話がまとまって良かった良かったー。あれ、
そういえばさつきから一馬、だんまりしてるねー？」

一馬 「へ？ああ、ごめん。ちよつと考え事をしていてな」

ユウキ 「考え事？」

ネプテユーン 「…………… はっ！もしかしてあある姫救出ミッションに行かないとか!?
そんなのダメだよ！ここで逃げたら男の子として恥ずかしいよ！」

よし、言うぞ！

一馬 「違う！行くよ！行くが…………… その…………… あの、聞いてほしいんだ。みんな、

特にユウキさんには……」

ユウキ「？」

一馬「あの、オレ、ここへ来たのは、助けてって言う女の子の声を聞いて、押し入れを通つてここへ来たのは知ってるよな……」

ユウキ「あー言つてたね」

ちなみに雅緋さん、雪泉さん、ユウキさん、アイエフさん、コンパさんにはオレがどうやってここへ来たのかをちゃんと話してるぜ。ゴウさんにはまだだけどな……」

ゴウ「俺は初耳だぞ」

一馬「ゴウさん、詳しいことは後で話すから。で、その女の子の声なんだけど……」

オレは息を整える。そして

一馬「ああある姫の声…… 凄く似ていた……」

オレは言つた……」

二十八ノ巻

一馬「あある姫の声に…… 凄く似ていた……」

「……………」

部屋が静まり返った……………そして

一馬以外「ええええええ!!」

大声が響き渡った

一馬「……………」

ネプテユーン「どういうことお!? なんであある姫の声が一馬の世界の押し入れから聞こえてきたのー!?!」

飛鳥「一馬くとあある姫って会ったことが無いよね!?!」

一馬「初対面です……………」

すると、いきなりユウキさんに肩を掴まれた。表情は少し怒っていた

ユウキ「どう言うこと!?! なんで姫の声が君の世界で聞こえたのよ!?! 嘘だよね! 嘘だよ! 言つてよ!」

オレを揺すりながらそう言った。結構激しい……………

一馬「お、おとおお落ち着いてユウキさん」

ユウキ「落ち着けないよ！何で助けてって姫の声が……………待って……………助け
て?……………前に姫が……………ちよつと私の記憶を探ってみる」

か、解放された

イストワール「大丈夫ですか？」

一馬「な、なんとか……………うっ」

ノワール「ちよつとここで吐くつもり!？」

一馬「ふう……………収まった」

ノワール「ほっ……………」

焰「しかし、一馬が聞いたという声が、まさかある姫だつたとはな……………」

ユウキ「あー！思い出した！前に姫が夢のことを話してくれたんだ！」

ユウキさんがいきなり叫んだ。何で夢？

一馬「夢？それと、助けてに何が……………」

ユウキ「関係あるよ！多分。えつと…………… 姫が攫われる前かな」

関係があるのか？

ユウキ「姫が悪夢を見たって言ったんだ。何でも暗い場所に一人だけいる夢だつて、
それで助けてくださいって叫んだらしいの、そこで目が覚めたんだつて」

一馬「そうなるよ、姫が見た悪夢、その時の寝言が次元を超えてオレの世界の押し入れがキャッチして、オレをここへ来させた……… つてことになるのかな？」

ブラン「にわかには信じがたいわね………」

ネプテューヌ「でもでも、ここに一馬がいるんだから、本当かもよ！」（一馬の腕を触りながら）

ユウキ「確かに、一馬はここにいるもんね……… ゴメン、さつきは………」

ユウキさんは謝ってきた

一馬「いや、大丈夫です。ユウキさんに怒られるかもしれない覚悟はしてましたから」

ユウキ「そっか……… 一馬、お願い、君も姫の救出を手伝って欲しいんだ」

一馬「勿論です！ ようやく声の主が分かったんだ。全力全開で手伝いますよ！」

ユウキ「ありがとう………」

ネプテューヌ「よし、これで本当に話がまとまったねー。と言うことでいーすん、後はわたし達に任せて！」

イストワール「みなさん……… それではミッションを言い渡します。速やかにあ

ある姫を救出し、スチーム・レギオンの目的阻止に向かってください！」

一馬、イストワール以外「はい！」

一馬「ロジャー！」（デカレンのロジャーポーズ）

「イストワール「今回の件、あある姫は鍵になるかもしれない。みなさん頼みましたよ」

「そうか、今回は悪鬼が関わってくるかもしれないから、伝説の巫女の血を引くああるが関係してくるのか……必ずああるをあの野郎の魔の手から助け出してやるぜ！」

「ツーホウ溪谷」

一馬「ここがツーホウ峽谷か……」

ユウキ「ここに姫が……、すぐに助けるから、後もう少しの辛抱だよ。待つてね」

ネプテューヌ「うーん。見た感じ、なんか今までの場所と違いがわからないけど」

一馬「景色で判断したらダメだ。クリスタル。敵の反応は」

クリスタル『かなりの妖怪の反応があるぞ』

一馬「了解」

雪泉「それだけではなく、それぞれの妖気が強いです。気を引き締めてください」
ユウキ「妖気……それなら妖壺太夫のせいだ。きっとあいつが何かしてる」

ブラン「それなら場所は間違いなさそうね」

ネプテューヌ「ねえねえ、こっそり行つて救つたり出来ないかな」

「それが出来たら楽だが……相手は未知数だからな」

雪泉「妖壺太夫の力がどれほどのものかわかりませんが、この妖気がその妖壺太夫のものだとすれば、忍んでも見つかる可能性は高いと思います」

ネプテューヌ「やっぱりそうだよねー、オツケー。それじゃ、変身してスピード勝負と行こう!!お馴染みの、刮目せよ!!」

ネプテューヌ達は変身した。オレはファイズフォンを出して、まずは5821と入力した

《Auto Vajin, Come closer》

すると、クリスタルはオートバジンになった

一馬「よっと」

オレはオートバジンに乗って、今度は106と入力した

《BURST MODE》

そしてフォンブラスターに変形させた

クリスタル（オートバジンV）『一馬!振り落とされるなよ』

一馬「ああ!」

ユウキ「さあ、姫のところへ行こう!」

ユウキさんの言葉でオレ達は走り出したのだった

二十九ノ巻

オレ達は、ツーホウ峡谷を進んでいた。道中には妖壺太夫が召喚したであろうモンスターがわんざかかと襲いかかってきた。オレはオートバジンを移動しながら、フオンブラスターで攻撃して倒していった。そして

ユウキ「見つけた……妖壺太夫!!」

開けた場所に出ると、妖壺太夫がいた

妖壺太夫「っ!?!ぐぬううう。こんな所まで追って来るとは、おぬしらは何か勘違いをしているのだ。わしは姫を救ってやったのだ」

一馬「はあ?」

何をほざいてんだ?

パープルハート「え、そうなの?でもこれまで聞いていたことと、言っていることが違うわね」

一馬「乗せられんなよ、これは言い訳だ」

ブラックハート「全く、こんなところまで逃げておいて、言い逃れできるとでも思っているの?」

妖壺太夫「ヨウはきつと姫を始末するつもりだの。わしは姫の身を案じ、隙を見て姫を攫つて隠れただの。見つからないようにするのは当然だの」

雅緋「スチーム・レギオンは姫を始末するつもりだったのか。奴らは姫の能力とやらも知つてる可能性があるな」

一理あるだが

妖壺太夫「どうつつぶ。そうだの、おぬしらの敵はスチーム・レギオンだの。姫のことはわしに任せるだの」

一馬「アホか、貴様があいつらに加担していなけりや、武威ノ国は落ちていない、攫う必要も無かつたはずだぜ」

妖壺太夫「わしは元覇亜茶流の頭目、武威ノ国の実力は知つてるだの。どう足掻いても時間の問題だったと思うだの」

一馬「オレ達が忘れてると思つたのか？その時間があれば、オレ達は間に合つてた」
妖壺太夫「わしは姫には絶対に危害を加えん、信じるだの。ユウキならばわしが嘘を言つていないことがわかるぬの？覇亜茶流忍術を教えてやった恩を忘れたぬの？」

ユウキ「くつ……そんなもの」

一馬「ユウキさん、あいつに乗せられ」

ゴウ「……一馬、ここは任せろ」

一馬「ゴウさん？」

するとゴウさんはユウキさんの耳元で

ゴウ「…………… ユウキ、俺のセリフをやる。言つてやれ」

と言つた。そうか、あの台詞か

ユウキ「つ！…………… あはは、そうだった。妖壺太夫、悪いね。私は記憶を失つてたんだ。恩なんて覚えてない」

妖壺太夫「ぐぬぬ、覚えてないとはなんだの！それにおぬしは姫の幸せを全然考えていないだの！わしは姫の命の恩人だの。その恩人が姫を愛し、幸せにする自信もある。どう考えてもわしといた方が幸せだの！」

ユウキ「仮想現影の姫は疲れきつてた。そんなことにすら気付けないお前が姫を愛してるって？それになにより、大事なのは姫の気持ちだろ！」

妖壺太夫「どうるふふふ。姫にはたつぷりと愛の言葉をささやいただの。きつともう、わしのトリコだの」

一馬「哀れだな…………… 妄言をペラペラと言いやがる」

妖壺太夫「妄言ではないだの！」

ユウキ「もういい、姫を返せ！」

ゴウ「…………… 元忍者といったな。血祭りにしてやる、戒めろ」

一馬「さあ、お前の罪を……………数えろ」

オレ達は戦闘態勢に入った

妖壺太夫「やはり泣き落としもダメだの……………ならば仕方ない、相手をしてやるだの……………わしの妖怪がな！さらばだの！」

すると、妖壺太夫は濃い煙を撒いた

一馬「っ?!クリスタル！追うぞ！」

クリスタル（オートバジンV）「おう！」

オレ達は煙の中を進んだ

ユウキ「ああ！ちよつと一馬！」

紅牛鬼「フゴゴゴゴ（一人取り逃がしたが、ここは通さんぞ）」

パープルハート「ちよつ、そこを退きなさい！」

ユウキ「チツ、こいつはさつきまでの妖怪達より強そうだ。早く倒して、妖壺太夫、それと一馬を追いかけよう」

紅牛鬼『お前達を倒したら、次はあの小僧だ。妖壺太夫様の所へは行かせん』

グリーンハート「一馬くん大丈夫かしら……………心配ですわ」

「一馬視点」

一馬「っ?!」

しばらく走っていると、後ろから戦闘音が聞こえた。クリスタル、状況は分かるか？
クリスタル（オートバジンV）『今ネプテューヌ達は奴の出した妖怪と戦っている』
そうか。助けに行きたいが……進む。なあに、ネプテューヌ達なら大丈夫だ
クリスタル（オートバジンV）『なら、行くぞ！振り落とされるなよ』

一馬「おう！」

オートバジンはスピードを上げて進んだ。途中の妖怪は轢き逃げ……跳ね飛ばして進んだ。そして

一馬「待て！」

オレは妖壺太夫の元へ辿り着いた。側には、ああるもいた

妖壺太夫「なぬ!?なぜお主が！わしのとっておきの妖怪達はどうしたのだの」

一馬「今ユウキさん達が戦っている。観念しろ、自分じゃ何も出来ない小物が」

妖壺太夫「ぐぬぬぬ、さすがにこれは苦しいだの」

あある姫「そこのお方！ユウキが、ユウキが来ているのですね！」

一馬「ああ、今妖怪に足止めを喰らっているが、ちゃんと来てるぜ！さてと、まずは姫を解放しろ、オレも鬼じゃねえ、話くらいは聞いてやる」

妖壺太夫「かくなる上は……さらに妖怪を召喚して逃げるだの!!わしの妖怪は

まだまだおるだの」

一馬「そう言うと思ったよ…… はっ！」

オレはオートバジンから降りて、妖壺太夫に何かを投げた

一馬「姫！目を瞑れ！」

あある姫「は、はい！」（深く目を瞑る）

オレはクリスタルにサングラスを出してもらい身につけた。その瞬間、投げたものが炸裂した

妖壺太夫「なんなんだ…… うお!？」

一馬「今だ！」

オレは走って近づき、ああるをお姫様抱っこした

あある姫「きやつ!？」

一馬「大丈夫って言うまで、目を開けるなよ」

妖壺太夫「眩しいだの！眩しいだの！」

そして、お姫様抱っこしたままオートバジンの元へ戻った

一馬「よつと、よし、もう目を開けて大丈夫だ」

あある姫「…… はっ！さ、さつき、あなたわ、わたしを、だっ、だっ……」

一馬「あー、ごめん。嫌だったか？」

ああある姫「え、えっと、お、お父様以外の男の人に抱っこされたのは……は、初めてでしたので……あ、あの！助けていただいてありがとうございます！」／／

一馬「そうか……ユウキさんじゃなくてごめんな」

ああある姫「そ、そんなこ、こと無いですよ！」／／

……かわいい

妖壺太夫「ぬううう、ようやく見え……あー！いつのまに！」

あ、戻った

一馬「これでチエツクメイトだ。さ、大人しく諦めな」

妖壺太夫「どうふるる……今度こそ終わりだの……」

一馬「終わり？確かにお前の終わりだな」

妖壺太夫「終わりなのはおぬしだの！誰が言つたんぬの、わしが弱いと……覇亜茶

流忍術と妖術の融合、見せてやるだのれ！いでよ妖怪達よ！」

すると妖壺太夫の周りにモンスターが沢山現れた

ああある姫「……っ！」

一馬「心配するな、姫はオレが守る」

妖壺太夫「姫を守る？どうるふふふ、一人で来たのにそんなことが言えるだの？この

妖怪の数とワシにたった一人で、姫を守りながら戦えるだの？」

一馬「一人だと？違うな、もう一人、戦える奴はここにいるぜ？」

あある姫「？」

妖壺太夫「どう言うことなの？」

一馬「見せてやるよ」

オレはファイズフォンに5826と入力して、Enterを押した

《Auto Vajin, BATTLE MODE》

するとオートバジンはライトが点滅して、人型のロボットへと変形した

クリスタル（オートバジンB）『……………』

妖壺太夫「ぬぬっ!？」

あある姫「変わった……………」

クリスタル（オートバジンB）『一馬、お前はあある姫を連れてユウキ達の元へ行け、

奴等は我が何とかする』

すると、腰にベルト…………… ファイズドライバーが装着された

一馬「…………… 分かった。姫、行くぞ」

オレはああるの手を取った

あある姫「は、はい！」

そして、その場を後にした

妖壺太夫「帰すわけにはいかぬのだ！」

クリスタル（オートバジンB）『妖壺太夫。ここからは我が相手する』

妖壺太夫「どうるふふふ、からくり一体何ぞにワシと妖怪達が負けるはずがないだの、直ぐに破壊してある姫を取り返してやるだの」

クリスタル（オートバジンB）『言つとくが、我はカーナーリー、強いぞ』（バスターホイールを構える）

「再び一馬視点」

オレとああるは道を歩いていた。早く合流出来ると良いが

あある姫「あの、お名前を聞いていませんでした！お名前は？」

一馬「坂田一馬だ……」

あある姫「坂田一馬さん……あの、ユウキとは」

一馬「ユウキさんとは、仲間だよ」

あある姫「仲間……」

すると、オレとああるの前にモンスターが現れた。それも4体……

あある姫「妖怪！」

一馬「下がっている！」

オレはファイブフォンを開き、555と入力してEnterを押した

《Standing By》

待機音が鳴る中、ファイズフォンを閉じて天に掲げて

一馬「変身！」

と叫んで腰に装着しているファイズドライバーにセットして横に倒した

《Complete》

と鳴るとオレは赤い光に包まれ、仮面ライダーファイズに変身した

あある姫「鎧を見に纏った……一馬さん、あなたは一体！」

一馬（ファイズ）「……ヒーローってどこかな？さてと」

そしてファイズフォンをフォンプラスターにして、モンスター達に向けて構えた

《BURST MODE》

一馬（ファイズ）「退け、オレ達が歩く道だ」

オレはモンスター達に向かってそう言った

三十ノ巻

妖怪達「キシヤー！」

オレは向かってくるモンスター達を次々と撃っていった

一馬（ファイズ）「はっ！やっ！姫には一歩も！近づかせないぞ！」

近づいて来たモンスターは蹴りや殴りで応戦した。そしてある程度片付けると

一馬（ファイズ）「行くぞ！姫！」

あある姫「は、はい！」

オレはある姫と手を繋いで先へ進んだ。クリスタルは大丈夫だろうか……

「クリスタル視点」

クリスタル（オートバジンB）『はっ！』

我はバスターホイールを使い、妖壺太夫が召喚してくるモンスターを倒していった

妖壺太夫「ぬぬぬうう、す、少しはやるようだの！」

クリスタル（オートバジンB）「口ほどにも無いな。貴様の出す妖怪も」

妖壺太夫「ぬっ!？」

クリスタル（オートバジンB）「言ったはずだ、かーなーりー強い、とな」

妖壺太夫「では……これはどうかの！」

奴は青い炎を出して来た……

クリスタル（オートバジンB）『……………』

妖壺太夫「どうるふふふ、いくら強い人形でもこれなら炙り焼きでドロドロに」

クリスタル（オートバジンB）『溶けるとでも思ったのか？』

妖壺太夫「ぬふっ!? 溶けてないだの!？」

クリスタル（オートバジンB）『残念だったな。我はこの程度の炎では溶けん』

さて、これ以上時間を掛けるのは、無駄だな

クリスタル（オートバジンB）『さて、そろそろ遊びは終わりだ』

妖壺太夫「遊びは終わりだ？ どう言うことぬ……っ!?」

我は妖壺太夫へ一気に近づいて、腹パンをした

妖壺太夫「ぬふう!? こ、このわしが……………」

妖壺太夫は氣を失って倒れた……………何も命までは取らん。さて、縄で縛って連れ

て、一馬と合流するか

「二馬視点」

オレとあるはモンスターを倒しながら、歩いてた。途中険しい道は、オレが抱っこして降りた。あるが怪我したら、ユウキさんに何て言われるか……………それにして

も、どれくらい歩いただろうか……早く合流したい

一馬（ファイズ）「くそつ、早く来てくれよ。みんな……っ!？」

あある姫「っ!？」

歩いてきたオレ達の目の前に、巨大な黒いミノタウロス……牛鬼が現れた

紅牛鬼『お、逃げたあある姫発見、妖壺太夫様のところへ連れて行けば。兄者より出世できる！兄者は忍達に倒されたようだが、悪いな兄者、俺は出世するぜ！おいそこの赤い線の奴、退きやがれ！

牛語で分からないが、お喋りすぎる……そうだ、一か八か、試してみるか

一馬（ファイズ）「姫、オレからできるだけ遠くに離れろ。アイツに凄いのをお見舞いするからな」

あある姫「凄いのを……は、はい！」

ああるが離れたのを確認すると、オレは自分から見て右のサイドバックルにセットされているファイズポインターを持って、ファイズフォンに付いているミッションメモリーを外してポインターにセットした

《Ready》

次にポインターを右足のレッグホルダーにセットしてファイズフォンを開いてEnterを押した

《Exceed charge》

すると、赤い一筋の光が右足に向かつていった

紅牛鬼『ん？一体何を』

一馬（ファイズ）「そらっ！」

右足を牛鬼に向けた、するとセットされたポインターから光が飛び出して、牛鬼の前で巨大な赤い光の渦となった

紅牛鬼『こ、この渦は………か、体が………動かない！』

一馬（ファイズ）「はっ！」

オレは高く飛んでそのまま

一馬（ファイズ）「おりやあ!!!」

渦へ向かつてライダーキックをした。渦は、一瞬で牛鬼を貫いた

紅牛鬼「ブモオオオオオ!!」

一馬（ファイズ）「つと………」

オレが着地した瞬間、牛鬼にゆ（ファイ）のマークが浮かび上がり、青い炎の爆発を起こした

紅牛鬼『兄者アアア!!!』

そして、牛鬼の巨大な体は灰となって崩れ去った

一馬（ファイズ）「ふう……」

オレは変身解除した。さーて、今繰り出した技、クリムゾンスマッシュが狼煙代わりだ。気づいて来てくれると良いんだが……

あある姫「巨大な妖怪が一瞬で……あれも鎧の力ですか？」

一馬「まあな」

すると

ユウキ「っ！あある姫！」

ユウキさん達がやって来た。よし！

あある姫「ユウキ！」

ユウキさんはいきなりああるに抱きついた

パールハート「一馬！無事だったのね！」

一馬「ああ、そしてあの通り、あある姫は助けたぜ」

雅緋「でかしたぞ」

グリーンハート「素晴らしいですわ！一馬くん！」

一馬「うお!？」

こつちにはベールさんが抱きついて来た。柔らかくて良い匂いだ……つと、解放

された

ユウキ「大丈夫？あぁ、こんなに疲れ果てて……」

あある姫「大丈夫です。疲れているだけで、少し休めば……」

ユウキ「分かった。私の腕の中でゆっくり休んで。そしたら帰ろう……一馬、姫を助けてくれて、ありがとう」

か、感謝された……

一馬「あ、いえ、男として、当然のことをしたので……」

ユウキ「でも……姫が少しでも怪我してたら……」

ヒッ!?

あある姫「ユ、ユウキ！わたしは大丈夫です！全て一馬さんが守ってくださいだったので」

ユウキ「そうなの？それなら、本当にありがとうね……そう言えば、妖壺太夫は!?

あいつのことだ、姫を取り返しにここへ来るはず」

あーよかった……あある、ナイス

一馬「妖壺太夫なら、足止めしてますよ。多分もう既に終わってる頃だと思いますが」

ユウキ「？」

すると、オレ達の前に、あるものが降り立った……縄で縛った妖壺太夫を持ったま

ま

飛鳥「ろ、ロボット!？」

ユウキ「な、何？妖壺太夫が縛られている？まさか、こいつがやったの!？」

一馬「ええ、サンキュークリスタル」

降り立ったのはオートバジンだった

クリスタル（オートバジンB）『これくらい簡単だ。さて、我は戻るぞ』

オートバジンは妖壺太夫を置くと、バイク形態に変形した

雪泉「まあ!？」

ブラツクハート「ええ!?!ロボットからバイクになった!？」

一馬「そ、このバイク、変形できたんだよねー」

ホワイトハート「凄いな……」

クリスタル（オートバジンV）「今あいつは気を失ってる。目が覚めたら煮るなり焼く

なり好きにしろ」

ユウキ「妖壺太夫が起きる前に……… 姫の自己紹介を済ませとくか。こつちが

武威ノ国の姫で私の主君。ああある姫だ」

ああある姫「あああるです。この度はユウキに助力し、私を助けていただきありがとうございます

ございます」

グリーンハート「武威ノ国とは同盟国。これまで会う機会がなく、ようやく姫にお会

い出来ましたわ。わたくしは波戸ノ国の女神四忍のペールと言いますわ」

あある姫「は、はあ……」

ユウキ「みんなは無礼で、非常識で、おかしい人達だけど、私の仲間だ、強くて信頼できるよ」

オレって無礼で非常識でおかしい人なの？……… 確かにああるにタメ口とかして
るから無礼ではあるが、非常識でおかしいのはどうかと思うなあ

妖壺太夫「ぬう……… ここは」

焰「おい、妖壺太夫が起きたぞ」

あ、起きたか。さーてどうするか………

三十一ノ卷

一馬「お目覚めか？妖壺太夫さんよ」

妖壺太夫「ぬぬっ!? 貴様ら！早くこの縄を解くのだの」

一馬「反省するのだったら解くぜ」

妖壺太夫「ぬぬぬ……はっ、小僧……あんな強いカラクリを隠していたとは卑怯だの」

話そらしやがった

一馬「卑怯だと？よく言うぜ」

雪泉「あなたはスチーム・レギオンと協力し、妖怪を使役し、卑怯な手を使っていたでしょう」

一馬「自分が不利になったら正々堂々発言。はっ、笑えるぜ」

ユウキ「……」

すると、ユウキさんは妖壺太夫の縄を切った

一馬「ユウキさん!」

妖壺太夫「ユウキ……」

ユウキ「妖壺太夫。いけつ、そして姫に、武威ノ国に二度と関わるな」

妖壺太夫「っ!? どうるるる……その発言、必ず後悔させてやるだの! チクシヨーー!」

妖壺太夫は逃げ出した……… まあ良いか

焰「甘くないか? あいつはまた来るだろう。ま、何度でも倒すけどな」

ユウキ「姫、これで良い? もしまた来ても必ず守る、約束する」

あある姫「はい、私はユウキを信じてますから………」

雅緋「さて、妖壺太夫も居なくなつたことだ。ユウキはある姫を送つていけ、私達は府示山に向かうぞ」

ユウキ「そんな、私だけ手伝つてもらつて、終わつたからはいさよならつて、それはない。私達は仲間だ。スチーム・レギオンには国を落とされた貸しもある」

ホワイトハート「雅緋の案が無難などこだな、あある姫は一人で帰せないし、危険な場所に連れていけねえ、守るのが責務だろ」

ゴウ「………心配するな。別行動でも俺は忘れない」

ブラツクハート「そんな心配は誰もしてないわよ。他もくだらないことを言い出す前にユウキも早く行きなさい」

グリーンハート「それではみなさん、くれぐれもお気をつけて、わたくしも姫を武威

ノ国に届けたら、すぐに追いつきますわ」

一馬「こちらから、何言ってるんですか。ベールさんはこっちでしょ」

パープルハート「わたし達は女神四忍なんだから、いないと女神三忍になってバランスが悪くなるでしょう」

オレとネプテューヌは力を合わせて、ベールさんをおあるから引き剥がした

グリーンハート「あら〜」

あある姫「……………ぷっ、面白い方々ですね。ユウキがわたし以外に心を開いたのも分かります」

すると地震が起きた

一馬「地震!?!」

こんな時に起こる地震は普通じゃない……………

焰「おおっと……………なんだ。って、あれはスチーム・ノヴァじゃないか」

焰さんが見ている方を見ると、スチーム・ノヴァが落ちているのが見えた。あの位置は……………府示山か!

雅緋「またか、どこから現れた……………しかし、船を落とすとは、何を考えてるんだ」

ホワイトハート「あれはちよつとやべえな。悪鬼を蘇らすために手段を選んでねえ、クモツ大社ってのもどうなってることやら」

一馬「なら早く行かねえと！」

あある姫「……………え!?これは……………」

グリーンハート「どうやら、ふぎけている場合では無くなりましたわね。名残惜しいですがお二人は早く行つてください、わたくし達は参りましょう」

ユウキ「姫、私は……………」

あある姫「分かつてます。わたしも一緒に行きます。それならユウキも行けるでしょう」

一馬「……………は？」

今何つった?一緒に行くのだと?

ユウキ「ちよつと待って!姫を危険な目に合わせるわけにはいかない」

ブラツクハート「ユウキの言う通り。わたし達は遊びに行くわけじゃないし、危険よ?」

一馬「オレみたいに戦う力が有れば、良いんだけどな……………それでも危険な目にあわせたくないが」

あある姫「……………覚悟の上です。悪鬼と聞いては、伝説の巫女の血を引く者として、見過ごすことはできません」

一馬「……………こりや何度言つてもダメだな。なら、オレが絶対に守る!それ

が……… ヒーローとしての使命だからな」

飛鳥「私も！絶対に守って見せる。それが私の忍の道だから！」

雪泉「私も異論はありません」

パールハート「決まりね、さあ先を急ぎましょう」

ユウキ「ありがとう姫、みんな………」

一馬「よし！行くぞ！」

オレはクリスタルに乗った

一馬「姫も後ろに乗れ！」

あある姫「は、はい！」

するとクリスタルが

クリスタル（オートバジンV）『待った、二人乗りなら、こっちの方が良い。一馬一回

降りろ』

と言った。オレは降りた。するとクリスタルはオートバジンからサイドバツシャー
になった

あある姫「また変わりましたわ。不思議なお方………」

クリスタル（サイドバツシャー）『あある姫は、サイドカー、横の車に乗るんだ』

あある姫『はい！』

ああるはサイドカーに乗った。オレはバイク側に乗る

一馬「しつかり捕まっとけよ。多少揺れるからな……」

あある姫「分かりました」

ユウキ「ちよつと、姫を大変な目に合わせたら……と言つてもさつき姫の覚悟を聞いたし……でも大きな事故を起こしたら許さないよ」

クリスタル(サイドバツシヤ)『心配するなユウキ、我が安全運転で目的地まで運ぶ。

無傷とはいかんがな……』

ユウキ「大きな事故じゃ無かつたら良いよ……」

一馬「よし、みんな！行くぜ！」

ブラツクハート「何であんたが仕切るのよ！」

オレ達は府示山へと向かった

三十二ノ巻

あある姫「ここから『府示ノ樹海』（ふじのじゅかい）です。山頂に向かうにはここを抜けなければなりません」

府示ノ樹海…… オレの知ってる樹海は、観光地だが曰く付きの噂もあるって事を知ってるぜ……

一馬「姫はそこから降りるなよ」

ユウキ「降りるどころか、みんなから離れないで、この先は敵だらけだ」

一馬「それにしても。いつの間にか、空の色が変になってるな。これは急がないとな……な……」

空はまるで終末かのような空模様になっていた

パープルハート「みんな、時間を掛けずに、迅速に駆け抜けるわよ」

ネプテューヌの言葉にオレ達は頷き、府示ノ樹海へと突入した

猫妖怪「ニャー！」

……突入してからすぐだった、突然猫型モンスターが奇襲をしかけて来た

一馬「なっ！」

あある姫「きゃっ!?!」

ユウキ「はあ!」

猫妖怪「フニャ!?!」

間一髪でユウキさんが助けてくれた……

あある姫「ユウキ!」

ユウキ「一馬は姫を守ることに集中して!妖怪は私達が倒すから!」

ゴウ「……………戒めろ」

一馬「分かった!姫、しっかりと捕まっとけよ。クリスタル!スピードを出しすぎるなよ!」

クリスタル(サイドバツシャー)『分かっている』

オレ達に襲いかかってくるモンスタ、そして機械忍者達は全てネプテューヌ達が倒してくれた。そしてある程度進んだところで空を見上げた

一馬「空が暗くなって来たな。夜よりも暗い」

飛鳥「うん、まるでゴウさんみたい」

ゴウ「……………何っ!?!俺は空だったのか!?!」

一馬「おいおい、それは無理があるでしょ」

クリスタル(サイドバツシャー)『よく見てみる、あれは空じゃない。煙だ』

一馬「煙？よく見たら…………… 確かに煙だ。方角は…………… あっちか！」
ゴウ「…………… すると、あの下にヨウがいる」

パールハート「黒い煙がどんどん出て来てるわ。あれって、壊れて落ちたからじゃなかったのね」

一馬「どうだか…………… ん？どうした姫？」

あある姫「あれは…………… ただの煙ではありません。クモツ比良坂から溢れ出ているのでしよう」

雪泉「なるほど、先程姫が感じていたのは、それだったのですね」

え？感じ取っていたの？いつから？もしかして…………… オレだけ気づいてなかったのか!?

クリスタル(サイドバツシャ―)「この嫌な気配、恐らく冥界とやらだろう。この辺りは既にその領域に侵されつつある」

焰「となると、悪鬼はもう復活したのか？クモツ比良坂にいるんだろう」

雅緋「そんな簡単な話ではない。本来クモツ比良坂とは道のことだ。悪鬼がいるとしたら道の先、冥界の奥だろうな」

ホワイトハート「ああ、船が落ちてからそんなに時間は経っていない。まだ間に合うな」

グリーンハート「追う方が早いとはいえ、追いつくのは難しいでしょう。悪鬼を復活させている間に追いつけるかどうか、と言ったところですよわね」

パープルハート「悪鬼ってなんなの？実は弱かったりしないかしら。ほら、たまにあるわよね、苦勞して取った伝説の武器が実は店売りの武器より弱いとか、ね」

一馬「悪鬼って言うんだから。それなりに実力はあるはずだ」

ブラックハート「そう言えば、悪鬼がいたってことしか聞いてないわ」

ユウキ「姫なら、何か分からない？」

あある姫「そうですね、この世界で命尽きた者の魂。光ある世界に這い出ようとして叶わなかった無数の怨念の集合体、と言うものらしいです」

一馬「怨念の集合体……」

それってもし出て来たら封印しか道がないってことか？だから昔の人は悪鬼を封印したのかもな

雅緋「それでは悪鬼がどんなものか分からんが、怨念が生み出した存在が押し寄せるとしたら、やはり復活は阻止すべきだろう」

焰「なに、いざとなれば、刃仁破流の力で何とかしてやる」

グリーンハート「勝てたとしても、既にこれだけの影響が出ています。今度は町が壊されてしまった、ではすまない可能性もありますわよ」

飛鳥「そうだよ、私もできればあれとは戦いたくないな。なんとしても阻止、追いつこう！」

飛鳥さんの言葉にオレ達はうなづいて先へ進んだ。そして出口らへんが見えると、その前に見覚えのある影が見えた

一馬「あれは…………… 暗黒騎士忍者?!」

それはオレが磨愛辺国で戦った暗黒アビリティイを使う機械忍者だった…………… 同型か！クリスタル。速攻勝負で決める。アビスを

クリスタル（サイドバツシャー）『分かった』

一馬「はっ！」

あある姫「ちよつと!」

一馬「装着！」

オレはサイドバツシャーから飛び上がって空中でアビスシリーズを纏った

機械忍者師団長「波戸ノ国の忍者と磨愛辺国の忍達、そしてアンノウンよ。早々にさ一馬（アビスシリーズ）「去るわけねえだろ!!!」

オレは黒い雷を纏った足でライダーキックを繰り出し、吹っ飛ばした

機械忍者師団長「ぐはあ!」

パープルハート達「えええ!」

機械忍者師団長「き、貴様……………卑怯だぞ……………」

一馬（アビスシリーズ）「卑怯？よく言うぜ、忍は卑怯が基本……………らしいからな」
飛鳥「忍は卑怯が基本って……………」

雪泉「そ、そんなことは無いと思いますけど……………」

一馬（アビスシリーズ）「それに悪いが、今のオレ達はお前みたいな奴と無駄話をする時間はないからな……………消えろ！かめはめ波っ！」

オレはかめはめ波の構えで黒い雷を纏った光線を撃ち出した

機械忍者師団長「うおおお!!」

そして、敵は爆発した

一馬「ふう……………」

オレは元に戻ってサイドバツシヤーに乗った

ユウキ「あちやーあんなりあっさりと……………」

パールハート「今の敵、ボスキャラだったはずなのに……………一馬、やり過ぎよ」

一馬「やり過ぎって……………おいおい、時間が無いのに邪魔してくるから速攻で潰したんだぜ？」

ホワイトハート「それもそうだな。ここで邪魔されて、悪鬼が復活でもしたらダメだからな……………」

一馬「だろ？」

パープルハート「だからって……仕方ないわね。さて、このまま森を抜けたら、いよいよ山頂ね」

飛鳥「うん、山頂までは待ち伏せも無さそう。一気に行きましょう」

パープルハート「でも、山頂までは結構な距離になるけど大丈夫かしら？山登りといつても良いくらいよ。特に一馬とあある姫は……」

確かにこの先を足で登れって言われたら、いくら体力バカのおれでも途中でぜえーはあー、と言って役立たずになるだろうなあ

一馬「オレと姫はこいつに乗ってるから大丈夫だ」

あある姫「はい！」

クリスタル(サイドバツシャー)『任せとけ』

飛鳥「これも修行です！決戦を前にパワーアップ出来るね！」

パープルハート「あ、あすちやん……」

しゆ、修行……一体どこからそんな……とにかく、先へ進まないとな！

三十三ノ巻

オレ達は一気に山頂まで来た

一馬「ここが山頂か……」

ああある姫「やつと着いたんですね……」

道中敵は出なくとも、かなり時間が掛かってしまった

ああある姫「みなさん……特に一馬さんとクリスタルさんには……ほとんど引つ

張つて来てもらつたようなものなのに」

ちなみにクリスタルつて名前はここへ来る道中でオレが言った

一馬「気にすんなよ。これくらい」

クリスタル（サイドバツシャー）『お安い御用だ』

ブラツクハート「こつちは走つて疲れてるつて言うのに………全く」

一馬「ははは………なんかゴメン。それにしても………」

オレ達の目の前には落ちたポロポロのスクーム・ノヴァが煙を上げていた

一馬「ここを通らなきゃダメなのかなあ。ご丁寧の一部の壁が壊れて、入る用の穴はあるけども。クリスタル、クモツ比良坂までのルートは？」

クリスタル（サイドバツシャー）『待っている……………ダメだ、船体が完全に山頂を塞いでいる、比良坂に向かうにはここを通るしかない』

一馬「そうか」

雅緋「なら決まりだな」

飛鳥「うわあ、ここに入るのか……………大丈夫かな」

穴からは煙がもくもくもくと出ていた

パールハート「ちよつとくらい黒くなっても、忍者らしくて良いじゃない。まっくーるを見なさい」

ゴウ「……………黒い衣装は良い。何も恐れることは無い」

オレの私服も最近は黒系が多いしなあくなぜか惹かれるんだよなあ黒系の服には

飛鳥「あの、私は黒く汚れるとかじゃなくて、体の心配をしてるんだけど……………」

一馬「……………そうか、煙にも有毒なやつがありますからね……………」

ゴウ「……………お、恐れることは無い！」

焰「その通りだ。ヨウとテツコはこの瘴気の中やクモツ比良坂を通ってるんだろ。奴らが大丈夫ならこちらも大丈夫だ」

ホワイトハート「その理屈はどうなんだ……………だが、行くしかないな」

一馬「この煙、多分そんなに有毒はないはず。まあたくさん吸ったらどうなるか分か

らないけど」

ホワイトハート「お前のその理屈もどうなんだよ……………」

パープルハート「ふふっ、ちよつと前まであすちゃん達とは敵同士、まっくーるは突然襲いかかって来て、異世界から来た一馬は森の中で出会って、ユウキはツレなかつたけど、バカな話も楽しいわね」

ちなみにあるには異世界から来たことも話した。めちやくちや驚いてたなあ

飛鳥「うん、そうだね。でも、同盟が終われば……………」(悲しい顔をする)

そうか、この戦いが終われば同盟は終わる……………つまり。というかこの戦いが終わればオレは……………」

グリーンハート「一馬くんは、戦いが終わったら……………」

一馬「……………」(俯く)

あある姫「一馬さん……………」

ブラックハート「そういうのは全部終わった後。馬鹿な話と共にいくらでもしましう。変なこと考え出す前に行くわよ。ほら一馬も俯いてないでシャキツとしなさい！」

一馬「あ、ああ……………よし！うじうじ考えるのはやめだ！先ずは目の前の問題

を解決だ！」

オレ達はスチーム・ノヴァに乗り込んだ

「スチーム・ノヴァ内部」

システムが落ちてるからか、以前とは違って、内部は暗かった

雪泉「以前に来た時とは違って暗いですね。どこに向かいましたよ」

ゴウ「…………… 目指すはヨウガイマのみ。クモツ比良坂に向かう」

一馬「そこへのルートを考えてるが…………… ま、下だな」

ホワイトハート「だろうな。船の底、そこが比良坂に繋がっている他ない」

焰「そうだな、異論は無い。で、下つてのはどっちなんだ」

一馬「道なりに進むしか無いでしょう」

ゴウ「…………… 気配がする、こっちだ」

ゴウさんは我先にと進んでいった

焰「そりゃ敵の気配じゃないのか…………… いや、敵を倒していけば案外着くかもしれ

ない。敵も比良坂の入り口を守ってるだろうし」

雪泉「ええ、その可能性は高いです。ゴウさんに続きましょう」

みんなもゴウさんの後を追った

一馬「よし、行くか」

オレ達も後を追おうとしたその時だった

クリスタル（サイドバツシャー）「っ!?!いかん!」

クリスタルは突然後ろに下がった

あある姫「きやつ?! なんですの!?!」

一馬「おい! なんで進まね」

《《ドンガラガツシャンツ!!!》》

一馬&あある姫「っ!?!」

突然瓦礫または残骸といえ良いのか、それが降ってきて、ネプテューヌ達が進んだ通路を完全に塞いでしまった。上が脆かったのか? つて考えてる場合じゃねえ!

一馬「おい! そっちは大丈夫か!?!」

オレは降りて、向こう側のネプテューヌ達に向かって叫んだ

パープルハート「一馬!?! そっちこそ大丈夫!?!」

ユウキ「姫! 姫! 無事なの!?! 返事して!」

グリーンハート「お二人ともご無事ですか!?! お怪我はありませんか!?!」

あある姫「わ、私は大丈夫です! ユウキも無事でよかった……」

ユウキ「良かった……」

一馬「そっちこそ大丈夫なのか!?!」

パープルハート「ええ、ノワール 達にあすちゃん達、まっくーるにユウキもみんな

無事よ」

ブラックハート「しかし、見事に分断されたわね」
くそつ、こんな時に……………

ホワイトハート「どうするんだ？」

えーつと……………うわ、都合よく道があるー

一馬「もう一つの道がある、そこから進んで合流だ！」

パープルハート「突然のアクシデントでパーティーが分断されて別々の道に進んで、最後は奥で合流する……………よくある事ね」

ブラックハート「そんなわけないでしょ！」

ユウキ「一馬！姫を安全に、安全に！ね」

一馬「ろ、ロジャー！」

ユウキ「頼んだよ」

雅緋「さて、私達は進むぞ！」

向こうは進んだか……………

一馬「よし、オレ達も行くぞ！」

あある姫「はい！」

クリスタル（サイドバッシャー）『ああ』

オレ達はもう一つの通路を進んでいった

あある姫「ユウキ達は、大丈夫でしようか……」

一馬「ユウキさん達は強い。だから安心しろ！」

あある姫「そ、そうですよね！」

すると、少し広い場所に出た。そこには

機械忍者1「アンノウン、発見！」

機械忍者2「姫も確認、隊長」

機械忍者隊長「うむ、総員かかれ！」

機械忍者達「了解！」

スチーム・レギオンの皆さんがいた

あある姫「敵が沢山……」

一馬「不味いな…… なんてね」

クリスタル、ディエンドライバーそして今から思い浮かべるライダーカードを出して
くれ

クリスタル（サイドバツシャー）『変身しないんだな』

ああ。そして、目の前に現れたネオディエンドライバーそして2枚のライダーカード
が現れた

あある姫「それは？」

機械忍者隊長「何だその銃はそれで我らと戦うと?」

一馬「いいや違うぜ? まあ見てな」

オレはデイエンドライバーに1枚目のカードを装填して、デイエンドライバーの銃身をスライドしてスキキャンさせた

《カメンライド、ガタツク!》

一馬以外「?」

一馬「さらに!」

デイエンドライバーを戻して、2枚目のカードを装填してスライドさせた

《カメンライド、ファイズ!》

待機音が鳴る中、機械忍者達に向けて、トリガーを引いた。そして2つの光が撃ち出された。光が収まるとそこには

ガタツクR(コピー)「……………」

ファイズ(コピー)「……………」

ガタツクとファイズがそこにいた

あある姫「あ!あの時の鎧!もう片方は初めて見ますが……………」

機械忍者1「生体反応検知せず。傀儡の模様」

機械忍者隊長「傀儡を召喚しただと?」

一馬「傀儡か……ま、そうかもな。さて、オレと姫を守ってくれ。カ・ガーミン！ たつくん！」

ガタツクR（コピー）「……………」（ダブルカリバーを構える）

ファイズ（コピー）「……………」（右手首をスナップさせる）

機械忍者隊長「まずは傀儡を破壊するぞ！」

機械忍者達「了解！」

さて、この二人に勝てるかなー？

三十四ノ巻

一馬「さて、そいつらを破壊するんだつたら…… 10秒以内に破壊するのをお勧めするぜ？」

機械忍者隊長「10秒？はっ、10秒など、この数ならあつという間に終わるさ」

オレの10秒と言う言葉に反応して、ファイズは左腕に付けているファイズアクセルからアクセルメモリーを取り外し、ファイズフォンの真ん中に刺さってるミツシヨンメモリーと取り替えた

《Complete》

アクセルメモリーがセットされると、胸部装甲が展開し、身体中に走ってる赤色の線が銀色の線へ、頭部のバイザーは赤い発光に変化した

機械忍者隊長「なんだ、こけ脅しか！」

あある姫「あの鎧にあんな仕掛けが……」

ファイズA（コピー）「……」

アクセルフォームになったファイズは直ぐにファイズポインターにミツシヨンメモリーを挿してしてレッグホルダーにセットした

《Ready》

一馬「さあ、10秒間耐えてみるよ」

《Start up! / CLOCK UP》

オレが言い終わつたと同時にファイズはファイズアクセルのスイッチを、ガタツクはスラップスイッチを押した

一馬「伏せろ！」

あある姫「え？」

機械忍者隊長「なにを」

次の瞬間、2人は消え、無数の赤い渦が機械忍者達の真上に現れ、機械忍者達は隊長格を残して爆散した

あある姫「きやつ!？」

機械忍者隊長「なっ!?!」

またセリフを言い終わる前に、隊長格は、青い何かに斬られ爆散した

《3.....2.....1.....》

そしてオレ達の前に、ファイズとガタツクが戻ってきた

《time out / CLOCK OVER》

2つの音声が届いたと同時に2人は消滅した。それと同時に「デイエンドライバー」も

消滅した

一馬「サンキュー」

ああある姫「え、えつと……何がどうなって……」

一馬「2人とも忍をはるかに超える超音速であつという間に倒したんだよ」

ああある姫「ちよ、超音速ですか!?!」

一馬「ああ、だけど、かなり短い制限時間があるけどな」

ああある姫「それでもさすがすぎます!」

一馬「ああそうか……んじゃ、先に行くぞ!」

ああある姫「はい!」

オレ達は広間を後にし、先へ進んだ

一馬「そういや、忘れていた事が、ユウキさんから聞いたんだが、前に悪夢を見たつて?」

オレはあああるに夢の話を書いてみた

ああある姫「はい、お父様達やユウキがいない暗闇の中に私だけ……そこで私は助けてくださいって何度も叫びました。けど、夢はそこで途切れてしまいました」

一馬「そうか……」

ああある姫「一馬さんはどうしてこの世界に?」

一馬「言っても信じてくれないだろうが…………… お前が夢で叫んだ助けてください
 いてて声か押し入れから聞こえて…………… そしてこの世界へ押し入れを通って来た」

あある姫「お、押し入れですか？ いえ、それよりも！ 私の夢の声が、あなたの世界に
 !？」

一馬「ま、そうなるわな。信じなくても良いぞ」

あある姫「…………… いいえ、私は信じます。だって…………… 私を助けてくれたじゃあ
 りませんか」

…………… 確かに

一馬「そうか…………… つと行き止まり…………… じゃないな」

また広い場所に出た…………… が、ここにはかなり広い穴があった

一馬「目的地…………… ぼいな」

あある姫「間違いありません。この穴の先です」

一馬「そうか。さて、先に着いたから、ネプテューヌ達を待つしかないか……………」

クリスタル（サイドバツシャー）『いや、どうやら楽には待たせてはくれないようだ』

一馬「何？」

すると、穴から何かが出てきた。な、なんだこのロボットは！ 人型の上半身に異形の
 下半身、手とレーザー砲は浮いている……………

? 「アンブツシユ? アンブツシユ!」

一馬 「アンブツシユ? って何だ?」

クリスタル (サイドバツシヤ) 「待ち伏せって意味だ」

一馬 「なるほど、つまりこの穴を守るガーディアンってか」

フルデュプレックス 「コノサキハ、コノフルデュプレックスガトオサナイ」

一馬 「あつそ、んじやあ力づくで通らせてもらう!」

クリスタル。キメラドライバーとツインキメラバイスタンプを

クリスタル (サイドバツシヤ) 『了解した』

オレは現れたキメラドライバーとツインキメラバイスタンプを手にとって、サイド

バツシヤから降りてドライバーを装着した

《ツインキメラ!》

バイスタンプを起動してドライバーにセットした

《キング! ダイル! カモン! キメラキメラキメラ!》

オレは仮面ライダーブレイドの変身ポーズを取って

一馬 「変身!」

バイスタンプを倒し次は仮面ライダーウイザードの変身ポーズを取った

《スクランブル! キングクラブ! クロコダイル! 仮面ライダー! キマイラ! キマイラ

！
♪

次の瞬間現れたカニとワニの幻影に包まれながら、オレは仮面ライダーキマイラに変身した

一馬（キマイラ）「……………姫、あいつは直ぐに片付けて来るぜ！」
オレはネオデュプレックスに向かって歩いた

三十五ノ巻

ネオデユプレックス「ワタシニイドムトハオロカナ」

一馬（キマイラ）「愚かで……結構！」

オレはジャンプして、ネオデユプレックスの胴体に向かってパンチをした

ネオデユプレックス「ソノテイドカ？」

一馬（キマイラ）「なにつ!？」

確かに、硬え……だが！

一馬（キマイラ）「オラオラオラオラオラア！」

オレはまたジャンプして、さつき殴った箇所ををラツシュした

ネオデユプレックス「ムダダ」

な、何て硬さだ。普通ならへこんでるはずなのに……

ネオデユプレックス「コンドハコチラカライクゾ」

向こうは、レーザー砲から光弾を撃ってきた……ん？なんかオレに向かっ

て……っ！

一馬（キマイラ）「追尾か！」

オレは光弾を回避した

ネオデュプレックス「マダマダ」

更に撃つてきやがった。こちらに攻撃の隙は与えないつもりか！

一馬（キマイラ）「くっ……… 何処かに隙が………」

ネオデュプレックス「ヨケテルノニムチュウノヨウダナ」

するとオレは何かに掴まれた……… つ！

ネオデュプレックス「ツカマエタ」

オレは奴の腕に握りしめられていた

あある姫「一馬さん！」

クリスタル（サイドバツシヤ）『「一馬！」』

一馬（キマイラ）「がっ………」

ほ、骨が折れそうだ………

ネオデュプレックス「コノママセンメツダ」

ネオデュプレックスはオレを握りしめたまま、レーザーを撃つた

一馬（キマイラ）「ぐああああ!？」

い、意識が………

ネオデュプレックス「オワツタカ。フン！」（一馬を壁に投げつける）

一馬（キマイラ）「……………」（壁に叩きつけられる）
 き、気絶はしてないが……………」

クリスタル（サイドバツシャー）『一馬！』（一馬の元へ向かう）

ああある姫「一馬さん!?!起きてください一馬さん!」（サイドカーから降りて一馬をゆする）

ああある……

ネオデュプレックス「ツギハオマエダ」（レーザ砲をああある姫に向ける）

ああある姫「っ!?!」

クリスタル（サイドバツシャー）『ああある姫！乗れ!』

まさか、レーザ砲をあああるに!?!させるか!

一馬（キマイラ）「はあ…………… はあ……………」

オレは何とか立ち上がってあああるの前に立った

ああある姫「一馬さん!」

ネオデュプレックス「オマエ」

一馬（キマイラ）「姫に…………… ああるに手を出すな!」

オレはバイスタンプを2回倒した

《キングクラブエッジ》

キングクラブエッジと鳴ると、オレの両腕は巨大な鋏のオーラを纏った

一馬（キマイラ）「はあああ!!」

そしてネオデュプレックスに向かいオーラ鋏でレーザー砲2つを破壊した

ネオデュプレックス「グッ!? オマエ、ナゼマダタカエル!」

一馬（キマイラ）「オレは……… 不死身だ!」

今度はバイスタンプを4回倒した

《ツインキメラエッジ》

一馬（キマイラ）「ウエリヤア!!!」

オレは飛び上がってライダーキックをネオデュプレックスに浴びせてそのまま蹴り

飛ばした

ネオデュプレックス「ワタシガ、マケ………」

そのままネオデュプレックスは爆発した。それと同時に変身が解除された。時間切

れってやつか

一馬「はあ…… はあ………」

オレはよろめきながらクリスタルとああるの元へ向かった

あある姫「大丈夫ですか!?!」

一馬「これくらい……… 平気だ………」

クリスタル（サイドバツシャー）「全く、いつも思うが無茶をしすぎだ。みらいが今のお前を見たらどう言うか……」

一馬「…………… ああ、悲しむだろうよ」

あある姫「あの、みらいさんって……………」

一馬「オレの幼馴染で一番の恋人」

あある姫「恋人さんですか……………」

一馬「…………… そういや、さつき呼び捨てで呼んでごめんな」

あある姫「い、いえ！構いませんよ！私のことを姫とは呼ばずにああるでも！」

一馬「そうか……………」

「グガガガ」

一馬「っ!？」

あある姫「ひっ!？」

爆炎の方を見ると、半壊状態のネオデュプレックスが動いていた

一馬「まだ機能停止してないのか！ぐっ……………」

畜生、さつきのダメージが……………」

ネオデュプレックス「ワタ…………… シハ…………… マ…………… ダ……………」

ん？少し光りながら近づいて来ている…………… まさか！

クリスタル（サイドバツシャー）『不味いぞ！奴は自爆するつもりだ！』
 あるある姫「そんな！」

ネオデュプレックス「オ……………マ……………」

：エ……………タ……………チ……………ミ……………チ……………」

どうする、ここで奴を止めないと！……………その時だった

「はああああ!!」

突然斬撃がネオデュプレックスを吹っ飛ばし更に

パープルハート「はあ！」

飛鳥「やあ！」

ネプテューヌと飛鳥さんが現れて、ネオデュプレックスに向けて同時に刀を突き刺した

一馬「ネプテューヌ！飛鳥さん！」

ユウキ「全く、安全について私言つたよね……………まあ、疲れてるようだからとやかくは

言わないけど」

ユウキさんも現れた。てかみんな来ていた

あるある姫「ユウキ！」

一馬「ユウキさん！」

ユウキ「姫！大丈夫だった？どこも怪我はない？
あある姫「はい！」

一馬「あのー弁明をさせてもらおうと……倒したと思ったら、まだ動いていて……」

ユウキ「確かに、攻撃する時って動いてたっけ」

あ、てことはさっきの斬撃はユウキさんが

パープルハート「一馬、大丈夫？」

あ、戻って来た

一馬「……さっきの戦いであいつに握りしめられて壁に叩きつけられた時の痛みが……」

パープルハート「本当に大丈夫!？」

一馬「それよりも、あいつは！」

飛鳥「安心して、動かなくなっただけからもう大丈夫だよ」

一馬「そうですか……」

するとオレは……。パールさんにいきなり抱きつかれた

一馬「ぎゃああ!!？」

グリーンハート「一馬くん！無事でよかったですわ！」

ち、力が強い……

一馬「べ、ベールさん……痛い」

グリーンハート「あら、ごめんなさい。よしよし」

ベールさんは力を緩めて頭を撫でてくれた……癒される

ホワイトハート「あの敵が守ってたって事はここがクモツ比良坂に通じてると見て間違いなさそうだな」

飛鳥「ええ、本当にここ？だって……底が見えない……道だって話じゃなかったっけ」

マジでか、底が見えないほどか

あある姫「はい、ここで間違いないと思います。ここを降りた先に道があります」

ゴウ「……この先にヨウガイマが、行くぞ！」

パープルハート「待って！『準備はいいか？』とか『もう戻れないかもしれない』とか、『セーブを分けることをオススメ』って言われてないわ」

ブラックハート「もう、ネプテューヌ。そんなこと、誰に言われるって言うのよ」

グリーンハート「最近そういうゲームも少なくなりましたわね。ですが今はそんな言葉は必要ありませんわ」

一馬「準備はいいかはアリだけど、もう戻れないとかセーブって……ああ、もう

ツッコむ気力も……」

グリーンハート「ふふっ、わたくしの胸で癒されてくださいまし。さて、参りまじょうか」

パープルハート「行きたいけど、言わないと落ち着かないっていうかつい言ってしまうのよね」

ホワイトハート「つたく、待ったをかけるせいでなんか行き辛いじゃねえか。勢いで行きたかったぜ……」

勢いで行ったら、オレやああるが大怪我どころじゃ済まないぞ……

雪泉「では、私達刃仁破流が先陣を切ります。この行き辛い雰囲気破る、それが正義です」

飛鳥「うん！行こう！」

ブラックハート「待つて……ネプテューヌ！こういう時はあなたが先でしょ！」
パープルハート「そんな、なんでわたしが……ノワール、本当は怖いだけって素直に言ったらどうかしら」

あある姫「わ、わわ、私が行きますー！こんなことぐらいでしかお役に立てませんが、私が行って安全を確かめます」

一馬「あある!?!お前が先に行ってどうするんだよ！」

ユウキ「ん？『あある』？ボール、ちよつと一馬を貸して」

グリーンハート「あら」

一馬「オレは物じゃ……」

……… あ、しまった

ユウキ「一馬あ！姫に！姫に向かつて呼び捨てで呼んだな！」（一馬を何度も思いつきり揺する）

ちよつと!?何度も揺すらないで！体の痛みに響く!!

あある姫「ユウキ！私が許しましたよ！一馬さんにああるって呼んでも良いと！」

ユウキ「え、姫が許したの？」

オレは首を縦に何度も振った。ああるも首を縦に振った。ユウキさんはオレとああるを交互に見て…… オレを解放した

一馬「はあ……… はあ………」

ユウキ「そう、姫が許したのなら仕方ないわ。姫が！許したのならね。もし許してなかったら、このままお仕置きしてたよ？」

これでも、今のオレの状態だと十分お仕置きレベルです

雅緋「大丈夫か？」

一馬「は、はい何とか………」

そして再びベールさんに抱きしめてもらった。そしてみんなそれぞれ意を決して飛び降りていった

パープルハート「そんなあああー」

飛鳥「いやあああー」

ユウキ「ベールは行かないの」

グリーンハート「わたくしは一馬くんと共に行きますわよ」

おいおい……

ユウキ「じゃあ姫、一緒に」

ああある姫「私も一馬さんと一緒に行きます！」

一馬「ああある……」

ユウキ「そう……姫がそう言うのなら止めない。ベール、変なことしたらダメだ

よ

あれ、オレには言っていない？

グリーンハート「うふふ、そんな事は致しませんわ」

そしてユウキさんは落ちていった。さて、残ったのはオレとベールさんとああるとクリスタルだ……どう降りるか……

一馬「さて、残るはオレ達だが……クリスタル。トライドロンになるんだ」

クリスタル（サイドバツシヤー）『トライドロンに…………… そう言うことか』

サイドバツシヤーは少し離れると、1台の車となった。そしてドアが自動で開いた
一馬「さ、乗ろうぜ」

ああある姫「はい！」

グリーンハート「ええ！」

クリスタル（トライドロン）『待て、この車は一応2人が限度だぞ』

あ、忘れてた

一馬「どうやって……………」

グリーンハート「うふふふ、わたくし、閃きましたわ」

一馬「？」

ああある姫「？」

そしてベールさんの閃きにより、3人乗れた。助手席にはあああるが乗って、運転席にはベールさん。そして……………

グリーンハート「一馬くん、キツくないですか？」

オレはベールさんの膝の上に座っていた

一馬「いいや、大丈夫ですよ……………」

変則的な乗り方だなあ

クリスタル（トライドロン）『よし、行くぞ！』

《タイプフルーツ！》

トライドロンのタイヤにみかんの断面みたいなタイヤが追加され、タイヤが変形し浮いた。そしてそのまま大穴を降りていった

三十六ノ巻

オレ、パールさん、ああるを乗せたトライドロンは。スチーム・ノヴァに出来ていた、クモツ比良坂へと続く大穴を降りていた

クリスタル（トライドロン）『一馬、さっきの戦闘のダメージは治ってきたか？』

一馬「ああ、痛みは少し引いて来たかな」

クリスタル（トライドロン）『なら良い。着く頃には完全、とまではいかないが回復しとけよ？』

一馬「了解」

とはいえ、次の相手は多分ヨウ、一筋縄ではいかないはずだ……

グリーンハート「そういえば一馬くん、せつかくですから一馬くんの幼馴染のみらいちゃんについて聴きたいですわ」

一馬「えーっ!?今ですか？」

あある姫「私も聞きたいです！」

ああるまで……

一馬「はあ、仕方ない」

オレは2人にみらいの事を話した

一馬「で、13歳の時、オレから告白して、めでたくカップルになったとき」

あある姫「そうなのですね」

一馬「だから一刻もこの戦いを終わらして帰らないと…… アイツを悲しませたくないしな」

まあ、時間がズレているからよっぽどのがない限りは……

グリーンハート「よっぽどお好きなのですね」

一馬「ええ」

クリスタル（トライドロン）『地面が見えて来たぞ！』

オレ達は景色を見た。うおっ!? 穴に落ちたはずなのになんだ！空模様があつたと同じだ！

あある姫「ここがクモツ比良坂……」

グリーンハート「なんて禍々しい……」

そしてトライドロンは地面に降り立った。あ、ネプテューヌ達がいた

一馬「よつと」

グリーンハート「つと」

あある姫「ん……つと」

オレ達はトライドロロンから降りた

一馬「おーい！」

パールハート「二馬！姫！ボール！」

ユウキ「姫！一馬！ボール！」

ゴウ「……遅いぞ、お前達」

クリスタル（トライドロロン）『安全運転でここまで来たからな。姫に何かあったらどうする』

ゴウ「……そうか」

パールハート「よし、みんないるわね。雰囲気的にここからが決戦よ！」

飛鳥「うん！」

クリスタル（トライドロロン）『さて』

クリスタルはトライドロロンからサイドバツシャーになった

クリスタル（サイドバツシャー）『乗れ』

オレとあるはサイドバツシャーに乗った。そして出発した。比良坂には彼岸花が
沢山咲いていた。やっぱここってあの世なのかな………にしても

一馬「不気味だな、敵が一切現れない」

ユウキ「でも、お陰で楽しじゃん」

一馬「だと良いんですけど……」

だが、オレの予感は珍しく当たらず、広場に着いた。

一馬「見つけたぜ！ヨウ！テツコ！」

パールハート「とうとう、追いついたわよ！」

広場にはヨウとテツコがいた

ヨウ「ゲイマ」「well, well, will. この世界のNINJAそしてアンノ
ウンいや、unknownもやるものだ……ふむ、見ない顔もあるな」

あある姫「悪鬼を目覚めさせるわけにはいきません。もしもの時はこの私が……
！」

テツコ「あある姫!?まさか、あなたまでいるなんて……」

ヨウ「ゲイマ」「気にするな。ここにおいても役には立たないだろう」

テツコ「それもそうですね。あある姫、妖壺太夫から逃れたのですね、無事で何より
です」

あある姫「はい！こちらの一馬さんに助けていただきました」

一馬「へっ！」

オレは鼻息を荒くした

あある姫「一馬さん！ユウキ！お願いします！」

オレはサムズアツプして、サイドバツシャーから降りてユウキさんと並んだ
ユウキ「姫の命だ、これ以上は進ませない」

一馬「この先へ進むなら、オレ達が相手だ！」（指差す）

テツコ「ヨウ、私は先に行きます、足止めをお願いします」

ヨウ「ゲイマ」分かつている。だが、倒してしまっても構わんのだろう？」

テツコ「……はい、任せます」

そしてテツコは先へ進んだ………なー！せつかく決め台詞言ったのにー！

飛鳥「ネプちゃん、あつちの方が盛り上がってない？なんだか主人公っぽいよ、良いなあ」

パープルハート「確かに……でも今のは主人公のセリフではないわね、どちらかというとなげフラグよ」

何言ってるんだよ向こうは

グリーンハート「二人ともふざけている場合ではありませんわ、それに、簡単に行かせてくれるような相手ではないですよ」

ゴウ「……貴様、俺を知っているといったな。答えてもらおう」

あーそんな事もあつたなあ

ヨウ「ゲイマ」「おおい、N I N J Aが簡単に口を割るとでも？聞きたければ力づく

で来るが良い」

ゴウ「いいだろう……戒めろ」

ヨウⅡゲイマ「そうだ、それでいい。ミー達には果たすべき使命がある。そちらの都合など知ったことではない、ユー達もそうなのだろう」

一馬「ああ……オレ達は全力全開であんたらを止める」

雪泉「あなた達にどんな正義があるあとも！私の正義が許しません」

ホワイトハート「こっちは侵略されてんだ。波戸ノ国を荒らされた礼もしないとな
！」

雅緋「こちらにも磨愛返国での借りを返させてもらおう。そちらにどんな理由があろうと妨害する」

ヨウⅡゲイマ「ははは、YES!!それでこそNINJAだ！」（指パツチン）

ヨウが指パツチンすると赤い機械忍者達がわらわらと現れた。ここであー！オレの予感は当たってたー！

ヨウⅡゲイマ「碎頭流の力を見せてやる」

ヨウも武器を構えた

ヨウⅡゲイマ「ミー達がユー達にNINJAの神髓を叩き込んでやろう！」

一馬「オレは忍者じゃ無いから興味ないね。だが……」

クリスタル。ブラキXを……装着は言わない。そしてオレはブラキXシリーズを装着した

一馬（ブラキXシリーズ）「言ったはずだ、全力全開で止めるってな！」（構える）

三十七ノ卷

一馬（ブラキXシリーズ）「はっ！はっ！」

オレは次々と機械忍者達を殴って倒していった。倒された機械忍者は次々と爆発していった

赤機械忍者1「な、なんだ!？」

赤機械忍者2「突然爆発したぞ！」

一馬（ブラキXシリーズ）「驚いてる所わりいが……」

オレは懐に近づいて二人の機械忍者を殴り飛ばした

赤機械忍者達「っ!?!ぐわあ!？」

殴り飛ばされた2体は爆散した

一馬（ブラキXシリーズ）「オレの拳は爆発の拳、触れたらドカンだ！」

そう叫ぶと、緑に光ってる部分が黄緑になった。今のパンチを受けたら、即爆破だな
ホワイトハート「一馬！わたし達を巻き込むんじやねえぞ！」

一馬（ブラキXシリーズ）「分かってる……ん？ああある！クリスタル！」

サイドバツシャーに乗ったああるが赤機械忍者達に追いかけていた。サイド

バツシヤーにもバトルモードはあるが、危険だ……だからオレが助ける！オレは向かってくる奴らを次々と殴り飛ばしながら向かった

ああある姫「こつちに来ないでください！」

クリスタル（サイドバツシヤー）『くつ、しつこい！』

一馬（ブラキXシリーズ）『どりゃあ!!』

オレはサイドバツシヤーを追っていた奴の一体に向かつて飛び蹴りを喰らわせた

赤機械忍者3「ぐはっ!!」

赤機械忍者4「むっ!!? 貴様!」

一馬（ブラキXシリーズ）「はっ!はっ!それっ!」

オレは三体の赤機械忍者を蹴りで倒した。ここで殴ったりでもしたらあああるに被害が及ぶかもしれないな

一馬（ブラキXシリーズ）「間に合ってよかった」

ああある姫「ありがとうございます!」

クリスタル（サイドバツシヤー）『遅いぞ』

一馬（ブラキXシリーズ）「んなこと言ってもよ……あ、クリスタル。レウスXに

チェンジだ今度は武器も……決めた。吼剣リオレウスと真飛竜刀【緋】だ!」

クリスタル（サイドバツシヤー）『了解!』

一馬「装着！」

サイドバツシャーから光が放たれて、レウスX（3Gからの見た目）、そして背中に大剣である吼剣リオレウス、左腰に真飛竜刀【緋】が現れた

あある姫「おお……」

一馬（レウスXシリーズ）「久しぶりに着たが、やはりお気に入りの防具は落ち着くな。さて」

オレは目の前の赤機械忍者達に向けて手をかざした。すると火球が現れた。

一馬（レウスXシリーズ）「燃え盛る炎よ、邪悪な者達を焼き払わん……ファイガ！」

そして、火球を蹴り飛ばして、赤機械忍者達を爆炎で吹き飛ばした。ちなみに詠唱はオリジナルね

焰「おお、凄い炎だな！」

赤機械忍者5「貴様！今のは火遁の術か！」

一馬（レウスXシリーズ）「違うな！これは忍術ではなく、魔法……」

パールハート「魔法ですって!？」

一馬（レウスXシリーズ）「に見せかけた火球だ！」

その瞬間、ここにいる全員がずっこけた

ヨウⅡゲイマ「まさか、こんな時にjokeを言えるとはね」

ゴウ「…… 戒めろ！」

ユウキ「終わりだ！」

ヨウⅡゲイマ「しまっ!？」

ヨウがずっこけた隙に、起きた二人が強力な一撃をお見舞いした。もしかして、オレのボケで勝っちゃった？

ヨウⅡゲイマ「………」

赤機械忍者6「よ、ヨウ様………」

パープルハート「やったのかしら？ っていうとやってないものだけだ」

ユウキ「いや、まだ余力を残してるね。この程度じゃ機械忍者と変わらない」

ヨウはあっさりと立ち上がった

ヨウⅡゲイマ「クツクツクツ、グツド、良い、良いぞ」

あれ、もしかして、いわゆるDM？

雅緋「なんだこいつ。殴られるのが好きな奴もいるにはいるが………」

ヨウⅡゲイマ「フンツ、ミーはテツコとは違う。確かに使命もある。が、別の願いもある。ミーが全力で出せる相手を探してこの次元に来た！」

こいつ！

ヨウIIゲイマ「アドミン！ スチームユニット、オン！」

すると、ヨウのスーツが変化し、翼が現れ、フルフェイスメットを装着した

ヨウIIゲイマ「さあ、始めようか！」

赤機械忍者7「おお！ ヨウ様が本気になったぞ！」

ブラックハート「ええ!? 姿が変わった!?!」

ホワイトハート「きつと見掛け倒しだ！ 行くぞ！」

一馬（レウスX）「2人とも待て！」

オレの静止も聞かず、ノワールとブランは向かっていった

ヨウIIゲイマ「ハッ！」

ヨウは空高く飛び上がり、右手に持つてる銃で撃ってきた。更に左手に持つてる剣で

斬撃も飛ばしてきた

一馬（レウスXシリーズ）「伏せろお！」

銃弾と斬撃は地面で炸裂して大きな爆発が起きた。オレ達は何とか遮蔽物に隠れてやり過ごせた。ちなみに機械忍者達は巻き込まれたのか、全員破壊されていた

ヨウIIゲイマ「隠れてやり過ごしたか……」

一馬（レウスXシリーズ）「大丈夫かみんな！」

パープルハート「ええ、何とかね……」

ブラックハート「ちよつと！空を飛ぶなんて反則よ！」

ヨウ||ゲイマ「ユー達の誰かが空に飛び立たない限り、ミーは倒せない」

雪泉「くつ、何て卑怯な」

ホワイトハート「降りてきやがれ！」

焰「おい、雅緋。お前なら空を飛べるだろ」

雅緋「確かに飛べるが……… 一時的だ」

ユウキ「じゃあどうす…… そうだ！ねえクリスタル。前に妖壺太夫を捕まえてい

た時の人形になって、空を飛べば……」

クリスタル（サイドバツシャ）『駄目だ、今の我は姫を守ることで精一杯だ』

ユウキ「じゃあどうすれば……」

そろそろ行くか！

ヨウ||ゲイマ「ふん、良いideaは出なかつたようだな。じゃあ！これでthe

endだ！」

ヨウが空中から銃を向けた

一馬（レウスXシリーズ）「待て！空中ならオレに任せろ！」

がオレが待ったをかけた

ヨウ||ゲイマ「why？」

一馬（レウスXシリーズ）「オレが相手になってやる！とあつ！」
オレは炎を纏って空へと浮かんだ

グリーンハート「飛んだ!？」

ヨウIIゲイマ「へえ、飛べたんだ」

一馬（レウスXシリーズ）「そうだ！今オレが身に付けてるこれは、空の王者リオレウスというモンスターの方が宿った防具！飛べることでくらい簡単だぜ！」

ゴウ「…… 鎧の力だと」

あある姫「あの鎧、火を出さだけじゃ無かったんですね」

一馬（レウスXシリーズ）「さてと、行くぜヨウ」（大剣と太刀を抜刀して構える）

ヨウIIゲイマ「いくら飛べても、直ぐに決着はつくさ……」

そして、二人は激突した

三十八ノ巻

一馬（レウスXシリーズ）「おりゃー！」

オレはヨウに接近し、大剣と太刀を同時に振り下ろした

ヨウIIゲイマ「フッ」

だけど、あっさりと防がれた

ヨウIIゲイマ「この程度かい？ハア！」

奴はオレの腹に蹴りを入れてそのまま蹴り飛ばした

一馬（レウスXシリーズ）「うっ!？」

オレは吹っ飛ばされながらも体制を整えるが、目の前にはヨウの姿は無かった

一馬（レウスX）「何処だ！何処に！」

ヨウIIゲイマ「ここだよ」

一馬（レウスXシリーズ）「っ!？」

背中から声があった瞬間、オレは切られた。切られた衝撃で大剣と太刀を地面に落とすてしまった

一馬（レウスXシリーズ）「このおー！」

オレは回し蹴りしたが、ヨウは消えた

一馬（レウスXシリーズ）「消えた!？」

ヨウIIゲイマ「こつちだboy」

振り返ると、ヨウが挑発していた……… 良いぜ、乗ってやるよ!

一馬（レウスXシリーズ）「ファイヤーボール! 乱れ撃ちイ! ドラララア!!」

オレは手から弾足の速い火球を撃ちまくった。所謂グミ撃ち、数撃ちや当たる戦法よ!

ヨウIIゲイマ「そんなideaでミーに当てれると思ったたら大間違いだ!」

一馬（レウスXシリーズ）「何っ!？」

何と次の瞬間、ヨウは瞬間移動して来て、オレはまた吹っ飛ばされた。更に銃を構えて何発も撃ってきた

一馬（レウスXシリーズ）「うっ!？」

ヨウIIゲイマ「これでダウンだ!」

ヨウはまたオレの近くに瞬間移動し剣で思いっきり切り付けた

一馬（レウスXシリーズ）「ぐはああああ!？」

切り付けられたオレは地面に頭から衝突した………

クリスタル（サイドバツシャー）『一馬!』

パープルハート「一馬!？」

あある姫「っ?!一馬さん!」

ユウキ「ちよつと一馬!」

ヨウ||ゲイマ「ふん!これがミーの本気さ、だが期待はずれだったな。unknownならミーを楽しませてくれるはずだったのに。ユ一達に次ぐ、今すぐあそこのboyを連れて帰るんだな」

ゴウ「…………… 貴様っ!」(一斉に武器を構える)

ヨウ||ゲイマ「やる気かい?まあ、結果は見てるが……………」

一馬「うう……………」

何とか意識はとんでねえな…………… オレはよろよろと立ち上がった

飛鳥「みんな!見て!」

雪泉「一馬さん!」

ヨウ||ゲイマ「amazing!まさかあれだけ喰らって生きているとはね」

一馬「当然だ…………… オレは…………… 不死身だからな!」

ヨウ||ゲイマ「why?」

ゴウ「…………… 不死身だと?」

パープルハート「ええ!?一馬って不死身だったの!？」

焰「何!? アイツは不死身だったのか!」

グリーンハート「多分、不死身ではないと思われますよ?」

ホワイトハート「不死身って……言い過ぎだろ……」

雅緋「つまり、一馬はかなりしぶといって事か」

ヨウIIゲイマ「なるほど……ふつ、だが結果は見えてる諦めて」

一馬「諦める? はっ、生憎だけど、オレの辞書には諦めるの文字は無いね」

ヨウIIゲイマ「ふーん、じゃあ可哀想だけど、the endだ」

ヨウはオレに銃を向けた

一馬「……それはどうかな?」

ヨウIIゲイマ「?」

一馬「相棒!」

クリスタル(サイドバツシャー)『応! 姫、すまんが降りてくれ』

あある姫「あ、はい」

ああるがサイドカーから降りると、一気にオレの側まで来た

ヨウIIゲイマ「バイク?」

そしてクリスタルはサイドバツシャーから元の姿、リンクルストーンへと戻った

一馬「行くぜ、相棒!」

クリスタル『ああ!』

一馬「超装着!リオレウス!」

オレはクリスタルを掲げて叫んだ。オレは炎に包まれて……………ソルフレアシリーズを装着した。同時に傷も癒えた……………

飛鳥「あれ?さつきまで身に付けてた鎧と似てるね」

雪泉「ええ、ですがさつきよりも熱そうですね」

ブラツクハート「ちよつと!常に燃えてるじゃない!」

ヨウ||ゲイマ「……………それがユ一の……………なるほど楽しめそうだ」

一馬(ソルフレアシリーズ)「さあ、第二、いや……………最終ラウンドだ!」

三十九ノ巻

ヨウⅡゲイマ「final round?それはユーのかい?」

一馬(ソルフレアシリーズ)「ちがう、あんたにとつてのだ!」

オレとヨウは飛び上がった

ヨウⅡゲイマ「生意気なboy……今度こそthe endだ!」

ヨウは消えた、いや、超高速で動いてるか……だが相棒がここに居る今なら負ける

気がしねえ!頼むぜ相棒!

クリスタル『任せろ………右だ!』

一馬(ソルフレアシリーズ)「はっ!」

オレは右手で裏拳をした

ヨウⅡゲイマ「がっ!?!」

その裏拳は、ヨウのメットにヒットしていた

ゴウ「……当たった!?!」

ヨウⅡゲイマ「今のはまぐれ………」

ヨウはまた消えた。今度は

クリスタル『後ろ!』

一馬(ソルフレアシリーズ)「はっ!」(振り向きパンチ)

ヨウ||ゲイマ「うぐっ!」

その後も

クリスタル『左!下!真上!』

次々とクリスタルのアドバイスでヨウの攻撃方向を見切つてヨウを攻撃した

ヨウ||ゲイマ「何故だ……… 何故………」

一馬(ソルフレアシリーズ)「教えねーよ」

ヨウ||ゲイマ「ぐぐぐ………」

一馬(ソルフレアシリーズ)「さて、そろそろ決めさせて貰うぜ」

ヨウ||ゲイマ「面白い!ならば全力で来い!」

一馬(ソルフレアシリーズ)「言われなくても………」

オレは大剣「豪炎剣カリューオー」を生成して装備した

一馬(ソルフレアシリーズ)「うおああああ!!」

ヨウ||ゲイマ「はああああ!!」

オレとヨウはそれぞれの武器をぶつけ合い、鏝迫り合いをした

一馬(ソルフレアシリーズ)「うおおお!オレは負けない!」

ヨウⅡゲイマ「それはミーも同じだ！」

オレは思いっきり力を入れた

ヨウⅡゲイマ「何!? 押されて…………… なっ!?」

そして、鏢迫り合いに勝った…………… 決める!

一馬（ソルフレアシリーズ）「超究…………… 武神覇斬！」

オレはヨウに超究武神覇斬をお見舞いし、最後にヨウを地面へと叩きつけた

ヨウⅡゲイマ「ノオオオオオ!!」

地上では、凄まじい爆発が響いた…………… オレは地面に降り立って、装着解除した

ヨウⅡゲイマ「ゴフツ……………」

降りると、ヨウは変身解除していた

一馬「オレの…………… 勝ちだ」

パールハート「一馬ー！」

一馬「おーい！」

ブラックハート「あなた…………… 怪我は!? 痛みとか無いの!」

一馬「ん? ああ、相棒が治してくれた」

クリスタル『大きな傷は我が治すが、小さい傷は自分で治せ』

あれって大きな傷って言えるのかな?

ユウキ「それよりも、ヨウの高速移動、よく見切れたよね。何で？」

一馬「それも相棒が先読みしてくれたから」

クリスタル『こいつにああ言うのを見切るのとは不可能だからな』

ユウキ「あー、最初ボコボコにされてたよね」

グリーンハート「治療に先読み……… 更には武器や乗り物の創造、今更ですけどか

なりチートなアイテムですわね」

パープルハート「ええ、ゲームだったら裏ボスを瞬殺して手に入る超激レアなアイテムって言ったところかしら？」

クリスタル『どうかかな？』

ヨウⅡゲイマ「うう………」

ネプテューヌ達と話していると、ヨウが立ち上がっていた

ゴウ「……… ヨウⅡゲイマ！」

パープルハート「もう変身出来るほど力は残っていないでしょう」

ヨウⅡゲイマ「まだ、だ……… ミーはまだ戦える」

飛鳥「ヨウ、もうぼろぼろ……… これじゃ……… もう、無理なんじゃ………」

一馬「飛鳥さんの言う通りだこれ以上はもう………」

ヨウⅡゲイマ「無理だと……… ミーは諦めないと言った。諦めれるなら、こんなとこ

ろまで来ていない。ミーはまだ戦える。かかってこい」

一馬「……………」

凄まじい執念だ

ホワイトハート「かかって来いっていわれてもな。もう動けないだろうが」

雅緋「先に行くぞ。動けぬ相手の言葉に付き合う必要は無い」

ヨウ||ゲイマ「shit!見逃すと言うのか!ミー達は多くの国を侵略し、シエアエ
ネルギーを奪ってきた。ある国は衰退し、滅んだ国もある。この手は汚れ、この身は罪
にまみれている。戦わぬなら止めを刺せ!」

な、何だ?急に映像が……………これってまさか、越える力?いや越える力は頭に過去の
回想が浮かび上がるから違うか。見たところ国の様だが……………

ユウキ「これって……………姫の仮想現影?」

あある姫「いえ違います。これは私ではありません」

一馬「じゃあこれは……………ん?あれはヨウとテツコ?」

テツコ『ヨウ、この国の守護者はあなたです』

ヨウ||ゲイマ『フンツ、ミーにこんな力があつたとは……………いいだろう、碎斗流の

マスター、ヨウ||ゲイマ。テツコに仕えよう』

テツコ『その力でこの国を共に守りましょう。お願いしますね』

何!? 上下関係ってテツコが上だったのか!? するとまた映像が変わった。さつきと同じ国だが……なんだか賑やかだな

テツコ『ありがとう、ヨウ。とうとうこの国のシェアがトップになりました。これもあなたのおかげです。わたし一人では……』

ヨウ『ゲーム』『テツコ、もういい。ミーこそ感謝している。力と役目を与えてくれたことに。それにまだトップだ。他の国がそうであるように抜かれることもある。これからテツコに任せよう』

テツコ『はい、気を抜かず。今まで以上に、この国を成長させましょう』

また映像が切り替……っ!? 雰囲気が暗い。一体何が

ヨウ『ゲーム』『why? どうしてこんな事に……』

テツコ『わかりません…… 私達はどこで間違ったのでしょうか』

ヨウ『ゲーム』『ミー達がトップだったとしても、この世界が、次元が滅びる……だと…… ミー達の力で世界を統一し、無駄な争いの無い世界を、平和を目指したのに!

あきらめてたまるか』

テツコ『はい、こんなところであきらめるわけには…… 今更立ち止まることは出

来ません』

映像は終わった……つまり、平和になったけど自分達の世界が滅びを迎え始め

て、それを防ぐ為にこの世界に来たと……

あある姫「クモツ比良坂は強い思念に反応し、幻を見せる。今のはこの方の強い想いが見せている幻影です」

グリーンハート「つまり、ヨウの過去ですわね。内容から察するに、自分達の世界が滅びるのを防ぐため、わたくし達の世界に来たのでしょうか」

雪泉「自分の世界を救うため、スチーム・レギオンの正義があつたのですね」

ヨウ「ゲーム「ミーの過去を見たぐらいで、勝手に分かった気になるな」

まあ、勝手が過ぎる……のかな？

ゴウ「貴様の過去などどうでも良い。俺の過去を答えてもらおうか」

ヨウ「ゲーム「oh, that, s r i g h t. そういえばそんなことを言ったな」

ゴウ「…… なにつ!?まさか貴様も記憶喪失か!!」

いや、違うでしょうよ

ヨウ「ゲーム「違う!だが、その忍び装束には見覚えがある。ウタカタ…… そう、『宇高多』とかいったN I N J Aのものだったはずだ」

あーたしかそんな地名だった気がする

ゴウ「…… 宇高多。すまん俺は…… だが聞いたことがあるよつな気がする。

それはどこだ」

一馬「オレの世界でも聞いたことないなあそんな地名」

まあ、パラレルの地球にはあるだろうけども

ホワイトハート「宇高多なんて聞いたことないな。幻影夢忍界にある忍者の里ではなさそうだ。ま、イストワールに聞いてみないと分からねえな」

飛鳥「私も知らない。忍の里と流派は一通り勉強してるはずだけど」

すると、地震が起きた

ブラックハート「なにこれ……まさか!」

ヨウ||ゲイマ「フン、テツコが最奥に着いたか。結果的に時間稼ぎだけは任務を果たせたようだ」

時間稼ぎ……しまったあああ!!!あれだけ急いで来たって言うのに!

焰「おいつ、さっさと行こう。どうしても話したいなら、終わつた後にでも話せ」

グリーンハート「みなさん行きましょう。ゴウも来てくださいますか?」

ゴウ「……ああ。俺は仲間まで失うわけにはいかないからな。行くぞ」

ネプテューヌ達は先へ進んだ。クリスタルはサイドバツシャーになつた

一馬「ああある!」

ああある「はい!」

あああるがサイドカーに乗つた後、サイドバツシャーは走り出した

ヨウゲーイマ「このミーが最後の最後に負けてしまうとは、これも因果応報というやつか。ミー達2人でやり遂げると誓ったが、守れずにすまない、テツコ」

飛鳥「結局、なんで悪鬼を復活させるのか、分からなかったね」

ブラツクハート「そうね。ヨウの過去にも出てこなかったわ」

雅緋「テツコに聞くしかないだろうな。だが、たとえそれがどんな理由であれ、私達は阻止するぞ。迷うなよ」

一馬「はい！」

オレ達はオレ達の正義を貫くまでだ

あある姫「もし悪鬼が復活していたら、私は伝説の巫女のように、出来るでしょうか……」

ユウキ「私は姫を信じ、従い守る。だから姫も自分を信じるんだ」

一馬「心配すんな、オレ達もいる。全員で何とかするんだよ！」

あある姫「はい、分かりました」

そんな会話をしながらも奥地へ向かった

最終ノ巻 前編

オレ達は奥地と思われる場所へ着いた。そこには…… テツコがいた

テツコ「ここに来たのはあなた方になりましたか。ヨウは敗れたのですね」

一馬「ああ…… ヨウはオレが倒した」(サイドバツシャーから降りる)

ブラツクハート「あなたは戦えないんでしょう？もう諦めなさい」

テツコ「私達は決して諦めません。そう誓ったのですから」

あれは決意の目をしている……

パープルハート「みんなちよつと待って、話をしない？」

するとネプテューヌ達は元に戻った…… まあ話し合い場合はそのほうが良い

よな

ネプテューヌ「よつと、ヨウの過去を幻影で見たんだけど、テつちちゃんも一緒に映ってたんだよね。それで、理由を聞いてみたいなーなんて、ねえ、良いでしょ？」

テツコ「変身を解くなんて、なんの真似ですか？」

ブラン「そうね。出来るならわたしも話を聞いてみたいわね。ヨウから直接聞いたわ

けでもないし」

ベール「ええ、何か別の解決策を探すためにも、悪鬼を復活させる理由、お聞かせくださいませんか？」

ノワール「みんなしようがないわね。戦えない相手に戦闘状態なんて意味ないし、付き合つてあげるわよ」

一馬「ああある、そこから降りてくれ」

ああある姫「はい」

ああある姫はサイドカーから降りた。そしてサイドバツシャーはクリスタルに戻った一馬「これでよしと。安心しな、敵意はないぜ」

テツコ「……分かりました、お話ししましょう」

雅緋「魂波流と一馬は甘すぎる。問答無用で押さえるべきだ」

オレは確かに甘い。オレはお人好しだからな。救いようのねえクスには問答無用で攻撃するがな

雪泉「いいえ、相手が話すと言っている以上、聞くべきです」

焰「話した後、それでも戦うことになったら、戦い辛くなるだけだぞ」

飛鳥「私は良いと思うよ。ネプちゃん達と話せば良い案が出るかも！」

テツコ「話す時間があればですが……悪鬼、いえ、ファントマキアはこの穴の

先、冥界に封じられています」

フアントマキア……それが悪鬼の名前

テツコ「この穴は冥界に通じており、私は既に、この世界のシエアエネルギーを集めたシエアクリスタルを落としました」

一馬「何!？」

オレは急いで穴の方へ向かった………かなり深い………この先が冥界………

ああある姫「そんな、それではもう防ぐ手段は、直接冥界に行くぐらいしか………」

テツコ「シエアエネルギーは冥界に侵され変質し、フアントマキアはそれを取り込み、復活します」

すると、揺れが起きた

一馬「ここ、こいつは!？」

ネプテューヌ「ねぷ!?!なにになになにに………これは絶対何か起きるよね? そうじゃなきゃ、ここまで揺れないよ………」

振動は更に大きくなった

ユウキ「な、何が………それに揺れが大きくなってきてる? 姫、下がって!」

ゴウ「………これは!?!俺の記憶にも無い強い気配を感じる」

クリスタル『?!?!穴の先から強い………何だ? 様々な怨念の気配を感じるぞ!』

何?!?

テツコ「これがフアントマキア。光ある世界に生まれ出ようとして叶わなかった、無数の怨念の集合体」

そうか、だからクリスタルが様々な怨念の気配を……………

クリスタル『来るぞ!』

するとすごい揺れと共に、大穴から何かが出てきた。それは白と黒の巨体に青白い光の模様が全身に駆け巡っている鬼のようなモンスターだった

フアントマキア「憎イ、屠り去ル、この悪鬼、恨ミ晴ラサデオクベキカ」

一馬「でけえな……………」

雅緋「ふっ、だから甘いと言ったんだ、完全に出て来る前にやるぞ」

焰「ああ、冥界まで行く手間が省けた。悪く思うなよ!」

ゴウ「…………… 血祭りにしてやる」

雅緋さん、焰さん、ゴウさんが先制してフアントマキアに斬撃を仕掛けた…………… しか

し!

フアントマキア「忍者、フタタビ邪魔スルカ、許サン」

斬撃はかき消された

焰「なんだ? 攻撃がかき消されてるぞ!」

一馬「なるほど、奴はバリア持ちか。ならそれを剥がして攻撃を通す方法を見つけな

いとな」

「ああある姫「ここは私が……！そのために連れて来てもらったのですから、えいっ！」

あああるは祈り始めた

飛鳥「姫!? どうしたの。何かしようとしてるみたいだけど」

ああある姫「そんな、どうして…… シェアが束ねられない」

シェアを束ねようとしてたのか!

テツコ「当然です。ここはクモツ比良坂の奥、冥界の近く。もはやあなた達が世界、幻

影夢忍界とは言えません」

一馬「…… そう言うことか、ここに来た時、ヨウが…… ここにいても役に

は立たない、つて。あああるの力を知っていたからか」

飛鳥「私達が引き付けるから、その間にみんな何か手を考えて!」

ああある姫「私は…… みなさん、ごめんな」

するとユウキさんが、あああるの肩に手を置いた

ユウキ「姫なら大丈夫。いつも気丈で、頑張り屋で、疲れるまでやつちやう。そんな

姫に出来ないことは無い」

ああある姫「ユ、ウキ……?」

ユウキ「シエアとは忠義、信じる力。私は今までずっと姫への忠義を忘れたことは無い。例えば私の心、全てが擦り切れようとも……受け取って、ああ……！」

するとユウキさんから光が溢れて、それがああるに宿っていった

あある姫「ユウキ！力が！でも、これではユウキが……」

フアントマキア「見ツケタ。オ前ダ、オ前ハ必ず、潰ス。巫女、巫女ダケハ」

するとフアントマキアは黒いモヤとなつてああるとユウキさんの元へかなりのスピードで向かった

ベール「速い!？」

一馬「っ！クリスタル！バジンだ！」

クリスタル『おう!』

クリスタルはオートバジンになった。そしてオレを乗せて走り出した

一馬「間に合え！間に合え！間に合ええええ!!」
だが

ユウキ「っ!?きやつ!？」

あある姫「ユウキ!……っ!?」

間に合わず、黒いモヤはユウキさんを吹き飛ばして、ああるを飲み込んだ

ユウキ「あある!?!このっ!」

ベール「姫を返してくださいな！」

ユウキさんとベールさんはモヤに攻撃したが、弾かれてしまったベール「くっ……」

ユウキ「どうするの!? これじゃあ！」

テツコ「残念ですが、姫が飲み込まれた以上、諦めて」

一馬「いや……策はある！ オレが行く！」

テツコ「っ!? アンノウン!?!」

一馬「オレが相棒の力でモヤの中に突入してああるを助け出す！」

ネプテューヌ「えー!? そんなこと出来るの!?!」

一馬「ああ！ 行けるな？ 相棒」

クリスタル（オートバジン）「問題ない」

ユウキ「………そこまで言うんだったら、行ってきて。ただし、必ず姫を助け出すこと、良いね？」

一馬「はい！ おっとそうだ。テツコ！」

テツコ「はい？」

一馬「オレはアンノウンって名前じゃねえ、坂田一馬だ！ じゃあ、行くぜ！」

テツコ「坂田……一馬………」

オートバジンは黒いモヤへと走り出した。そしてモヤに当たる瞬間、光のゲートが開いてオレとクリスタルはそこへ突入した

ユウキ「本当に入っちゃった……………」

ゴウ「…………… あんな忍術もあつたのか」

ブラン「あれは忍術じゃないわ。クリスタルの力よ」

「モヤの中」

一馬「つと…………… うわ、一面真っ黒。さてと、ああるのいる場所は……………」

クリスタル（オートバジン）『待っている、今探している』

「あある視点」

うつ…………… ここは…………… 確か私は黒い何かに…………… つ!?

あある姫「ユウキ！一馬さん！皆さん！」

私は叫びましたが…………… 声は聞こえてきませんでした。これは…………… 夢と同じ……………

あある姫「助けて…………… 助けてください！誰か…………… 誰か……………」

？「無駄だ、才前ノ声ハ、届カナイ」

あある姫「つ!?!フアントマキア！」

私の前に、悪鬼フアントマキアが……………

フアントマキア「巫女、オ前ハ、コノ闇ノ中デ、潰ス！」

〔一馬視点〕

「…… けてくださいー！」

っ!?今の声は!聞こえたよな!

クリスタル(オートバジン)『ああ!行くぞ!』

オートバジンは声のした方へ走り出した。待つてろよ!ああある!

〔ああある姫視点〕

フアントマキア「終ワリダ、巫女!」(腕を振り上げる)

ごめんなさい皆さん……そしてユウキに、一馬さん。あとは頼みます……

一馬「ああある!」

この声は……! !

〔一馬視点〕

いた!あああるだ!フアントマキアまでいる!

一馬「ああある!」

フアントマキア「ッ!?ナゼココニ、他ノ者ガ!」

オートバジンはあああるとフアントマキアの間で止まった

一馬「大丈夫か?」

オレは降りてああるの元へ向かった

あある姫「はい……」

一馬「オレが来たからにはもう大丈夫だ……さ、戻ろう」

あある姫「はい！」

フアントマキア「逃サヌ！」

一馬「そういやお前がいたんだったな」

腰にファイズギアが装着され、右手にファイズフオンが現れた。オレはフオンに55と入力した

《Standing By》

一馬「変身！」

「BGM：ファイズ」

《Complette》

仮面ライダーファイズに変身したオレはミッションメモリーを取り外し、オートバジンの左ハンドルに装填した

《Ready》

そしてハンドルを引き抜くと真紅の光の刃ファイズエッジとなった。オレはフアントマキアの方へ向く

一馬（ファイズ）「ああある。お前は下がっているんだ」

ああある姫「はい！」

ああある姫は下がった

フアントマキア「オ前、忍者ジャナイナ、何者ダ」

一馬（ファイズ）「オレは………闇を切り裂き、光をもたらす救世主だ！」（ファイズエツジを構える）

ダメージを与えられるか分からんが、やってやるぜ！

「中編へ続く」

最終ノ巻 中編

「BGM：ファイズ」

一馬（ファイズ）「オレは…… 闇を切り裂き、光をもたらす救世主だ！」

フアントマキア「救世主ダト、笑ワセルナ、潰シテヤル！」

フアントマキアは大きな腕で殴りかかって来た

一馬（ファイズ）「ふん！大振りだな！」

オレは回避して、ファイズエッジで斬りつけた。だが

一馬（ファイズ）「っ!？」

フアントマキア「ドウシタ？」

あある姫「効いてない!？」

おかしい、斬つたはずだが切り口が出来てない……なるほど、バリアは健在つて

ことか。ならば！

オレはファイズフォンを開いてEnterキーを押した

《Excited charge》

一筋の赤い光が右腕に持っているファイズエッジに向かった

フアントマキア「何ヲ……」

一馬(ファイズ)「救世主は闇を切り裂き、光をもたらす……… だったら！この闇を切り裂いてやるよ！」

オレはフアントマキアではなく、その場を一閃した。赤い斬撃は周りの闇を払い、景色がクモツ比良坂になった。ネプテューヌ達もいる。よし！何とか戻れた！

ネプテューヌ「あ！一馬達だ！」

ユウキ「姫！一馬！」

テツコ「闇から戻って来た!？」

フアントマキア「己…… 我ガ闇ヲ、払ウトハ」

ファイズエツジからミツシオンメモリーを取り外し、ハンドルをオートバジンに向け投げ、左腰のホルダーからファイズショットを取り出してミツシオンメモリーを装填した。ちなみにハンドルは自動でオートバジンの左側にくっついた

《Ready》

ファイズショットからグリップが現れて右手に装備した

《Exceeded charge》

再びEnterキーを押して、フアントマキアに向かって右ストレートをかました

一馬(ファイズショット)「とおあああ!!！」

右ストレート…………… グランインパクトはフアントマキアを吹っ飛ばした

フアントマキア「ヌツ！」

φマークが現れたものの、すぐに消された

フアントマキア「効カヌ！」

一馬「だろぅな…………… おい！こいつはオレが食い止めるだから今のうちに……………

えーつとさつきユウキさんが、やったようにああるにシエアを！」

あある姫「分かりました！」

ああるはオレの言葉を聞いて、祈り始めた

ユウキ「みんな！みんなのシエアを姫に！」

ネプテューヌ「おっけー！姫、わたしの力も使ってよ！」

ネプテューヌから光が出て、ああるに宿っていく

フアントマキア「サセヌ」

しまった！奴の注意を引かなくては

《Burst Mode》

一馬（ファイズ）「お前の相手はこのオレだ！」

フォンブラスターを構えてフアントマキアに撃ちまくった

フアントマキア「邪魔ダ！」

一馬（ファイズ）「邪魔してやるさ」

ノワール「そうね、一緒にこんなところまで来たんだから、私とユウキ、姫はもう国や流派を超えた仲間。ううん……友達でしょ！でも、姫に対してこんなの失礼よね」

いやあ、そんなことはないと思うぞ、多分

ブラン「この中で、姫と共通点があるのはわたしだけ。親近感が湧いてくるのよね。落ち着いたらゆっくり話がしたい」

ああ、似たような髪色だからか

ベール「姫への想いはここに居る他の誰にも負けませんわ！さあ、この思いを受け取ってくださいまし」

まあ、想いは人一倍、だよ

一馬（ファイズ）「はっ！やっ！よし！その調子だ！」

フアントマキア「効力ヌ、効力ヌ！」

一馬（ファイズ）「効かなくて結構！」

今は向こうに近づけさせない為に戦ってるからな！

飛鳥「みんな、私達も！」

焰「そうだな。受け取れ姫さん」

一馬（ファイズ）「うおあ!？」

オレは奴に腹を殴られ、吹っ飛ばされた

フアントマキア「忍者、巫女、潰ス！」

フアントマキアはある達の方へ向かった

ネプテューヌ「わー！悪鬼がこっちに向かって来てるー！」

焰「何!？」

一馬（ファイズ）「させるかよ……… 相棒！」

クリスタル（オートバジンV）『ようやくか』

オートバジンは変形してフアントマキアへと向かった

クリスタル（オートバジンB）『はあ!』

フアントマキア「ッ!？」

オートバジンはパンチでフアントマキアを吹っ飛ばした

フアントマキア「ヌウウウ、カラクリガ……」

一馬（ファイズ）「オレ達2人で食い止めるぞ！」

クリスタル（オートバジンB）『ああ！さあ今のうちに!』

雪泉「分かりました！姫、私の力をお使いください。正義の力で悪を退けましょう」

雅緋「受け取れ姫！ふっ、こういうのも悪くはない」

ゴウ「……… 記憶は失っているが、心はある。受け取れ！」

後ろを見ると、ああるが光り輝いていた

あある姫「みなさんの想いが、こんな近くにあっただすね……………！」
 ファントマキア「ソレハ、嫌ダ、光ガ……………」

少し怯んだ！よし！

《Ready, Exceed charge》

オレは再びファイズショットを装備した。そしてクリスタルと共に

一馬（ファイズ）「よそ見をしてる！」

クリスタル（オートバジンB）『場合か！』

一馬&クリスタル『ハアツ!!』

オレのグランインパクトとクリスタルのパンチがファントマキアに決まった

ファントマキア「ウオオオ!?」

ゆマーク消えたけど、奴に少しは入ったかな……………

テツコ「皆さんの想いが……………、これがこの世界のNINJAたち。ファントマキアを怯ませるほどの力、私とヨウには足りなかった力、ですが……………」

あある姫「これでは、足りません」

ちっ、まだ元気…………… 想いの力があるっていうのか！

テツコ「ファントマキアには、この世界中、ほぼ全てのシェアが取り込まれています。

それに比べて、あなた方はたった10人」

オレはカウントされてないのね、まあオレの中にシェアが宿ってるかどうかも分からんしな

ベール「ええ、分かっていますわ。だからといって、黙っているだけなんて耐えられませんわ！たとえ10人でも……………」

ノワール「ベール。そうね、と言いたいところだけど、現実的じゃないわあ、流石に無理よ」

雅緋「怯ませただけでも上出来だろ。今のうちにみんなで一馬の加勢に行くつてのはどうだ？」

ブラン「一馬とクリスタルがあれば吹っ飛ばしてもあつちは平気……………わたし達だけでは到底及ばないわ」

フアントマキア「ヌウン！」

一馬（ファイズ）「ゴはあ!？」

《Error》

オレはフアントマキアにドライバー部分を思いつきり殴られ吹っ飛ばされて、変身解除させられた…………… そうだ、クリスタル！ここは任せた！

クリスタル（オートバジンB）『何か閃いたのか？』

ああ、とびつきりのがな！オレはネプテューヌ達の元へ向かった

一馬「おーい！」

ネプテューヌ「一馬!?悪鬼はどうしたの!？」

一馬「奴は今、クリスタルが止めている。それよりも、さっきの会話を聞いて閃いたんだ」

ノワール「閃いたって……何よ？」

一馬「オレが昔読んでいた漫画の方法になるが……世界中の奴等から想いを集めるんだ！」

ネプテューヌ「おお！一馬が読んだことある漫画にそんな方法があつたんだね！」

飛鳥「漫画って……」

雅緋「そうだな、そんな方法があるならやる価値はあるが……どうやって世界中から想いを集めるんだ？」

あある姫「……私が！私の仮想幻影なら、世界中に伝えられます」

ユウキ「そんなのダメに決まってるでしょ！世界中になんて使ったら、姫が倒れてしまう」

あある姫「時間がありません。ユウキは私を信じてくれるのでしよう。だから私も自分を信じてみます」

そしてあるは、仮想幻影を発動した

ある姫「世界中のみなさん、お願いがあります」

ユウキ「姫……………分かった、迷つてごめん。最後まで信じる、せめて側で支えさせて」

クリスタル（オートバジンV）『一馬、お前も姫の側にいるんだ』

良いのか？

クリスタル（オートバジンV）『ああ、こいつは何とか食い止めておく』

ありがとうよ。オレはユウキさんが立っている方の反対側に立った

一馬「ああある。オレも側で支えてやる。良いでしょユウキさん？」

ユウキ「しょうがないな……………良いよ」

一馬「ありがとう。世界中の奴ら……………あああるに伝えてくれよ。頼むぜ……………」

ある姫「私は、武威ノ国のあると申します。伝説の巫女の血を引く者として、どうしてもお伝えしなければいけないことがあります。声が届いてるみなさんに、お願いがあります！今、この時に……………世界の危機に立ち向かっている人達がいいます」

ああるに光がどんどん集まって来た

飛鳥「シエアが集まって来てる？シエアってこういうのだったんだ。温かい」

確かに温かい光だ……………

ああある姫「お願いします、みなさんの力を貸してください。世界を、『幻影夢忍界』を守る為に。みなさんの想いを私に託してくれませんか」

更に光が集まって来た。それは光の玉となった。これ完全に元氣玉じゃん

ネプテューヌ「ギターー！どンドン集まってくるよ。ああある姫の想いみんなに届いたんだ！」

テツコ「そんな、私達が集めた力より強い輝き……、どこにこれほどの力が、シエアがあつたというのですか」

ああある姫「……シエアは心の力、誰かを、世界を、想う心。世界からシエアエネルギーを奪い尽くしても、人々の心の力に限界はありません」

一馬「想いはテクノロジーを超える……。つてな！」

ユウキ「姫、一馬、一緒に」

一馬「おうよ！」

ああある姫「はい、たくさんの気持ちを受け取りました。ありがとう、使わせてもらいます。この世界のみんなの想い……」

ああある姫&ユウキ「幻影夢玉！」

一馬「元氣玉！行つけえ！」

そして元氣玉もとい幻影夢玉はファントマキアへ一直線へ向かった

ユウキ「ちよつと！違う名前を被せないでよ！何よ元気玉つて！」

一馬「ごめんごめん、さっきの漫画の方法にほんとかなり似ていたから……すみません」

クリスタル（オートバジンB）「潮時か」（ファントマキアから撤退）

ファントマキア「アノ光ハ、何故ダ、何故、何故！」

そして幻影夢玉はファントマキアのバリアを破壊した。同時にクリスタルが戻つて来た

クリスタル（オートバジンB）「奴のバリアが消えた！今なら攻撃が通るはずだ！」

焰「たしかに、周りにあつた黒い力が消えた。これならいけそうだな」

ゴウ「……ああ、行ける。俺の忍者としての記憶がそう言っている」

雪泉「みなさん、油断しないでください。まだ力を残しています」

飛鳥「うん！後はみんなを信じて最後まで戦う！舞い忍びます！」

ネプテューヌ「さあラストバトルだ、刮目せよ!!」

パープルハート「幻影夢忍界のみんなの想い、見せてあげるわ！」（ノワール達も変身）

「BGM：仮面ライダーバルカン&バルキリー」

クリスタル、ゼロワンドライバーそして……ダイアウルフだ

クリスタル（オートバジンB）『分かった』

クリスタルはダイアウルフゼツメライズキーを出して、ゼロワンドライバーとなって腰に装着された

《ゼロワンドライバー!》

一馬「こっからは手加減無しだ」

オレはダイアウルフのアサルトグリップ側のボタンを押した

《ダイアバレット!》

そしてグリップを握り、キーをこじ開けようとした

一馬「くっ……」

ミシミシと音が鳴り響く

グリーンハート「ちょっと何をしてるんですの!？」

ホワイトハート「無理矢理こじ開けようとしてるのか!？」

一馬「うおおおおおおおオーバアアアアアアアーイズ!!」

オレは叫びながらキーをこじ開けてそのままゼロワンドライバーにスキャンした

《Over Rise》

待機音が鳴り響く中、巨大な狼のロストモデルがオレの前に現れた

《ワオオオオオン!!》

ユウキ「狼!？」

そしてダイアウルフゼツメライズキーをゼロワン ドライバーに装填した
《プログライズ!》

そしてオレはポーズを決め…………… ジャンプした

一馬&? 『変身!』

そしてロストモデルを殴った

飛鳥「殴っちゃった!?!」

砕かれたロストモデルは鎧となつて装着された

《Registration VULCAN co. ltd! Lone wolf!
It's my rule.》

オレは仮面ライダーバルカンローンウルフへ変身した。一匹狼だけどかつこいいから
らいーじゃん

ホワイトハート 「その姿似てるな、初めて会った時と」

一馬(バルカンLW)「まあな。さて…………… 悪鬼ファントマキア。お前を止められる
のは…………… オレ達だ!」

今ここに最終決戦の火蓋が切つて落とされた

「後編へ続く」

最終ノ巻 後編

フアントマキア「守リノ力ガ消エヨウガ、才前達ニ我ハ止メラレヌ！」

一馬（バルカンLW）「止められるさ、オレ達ならばな！行くぜみんな！」

一馬、あある姫、テツコ以外「うん！」

オレ達は走り出した

フアントマキア「ヌウン！」

フアントマキアは殴つて来た。オレは奴の拳を受け止めた

フアントマキア「離セ！」

一馬（バルカンLW）「離すもんかよ……」

ブラックハート「一馬！そのまま離さないでね！」

一馬（バルカンLW）「ああ！」

さつき離すもんかよって言ったけどねー

ブラックハート「ブラン！ボール！いくわよ！」

ホワイトハート「ああ！受けてみる悪鬼！」

グリーンハート「魂波流の力を受けてみなさい！」

ノワール、ブラン、ベールさんが同時攻撃を仕掛けた
フロントマキア「グツ」

おお、本当に効いてる

焰「どうやら本当に効いてるようだな…………… 今度は刃仁破流だ！雪泉！雅緋！行くぞ！」

雪泉「はい！凍てつきなさい。悪鬼よ！」

雪泉さんが忍術でフロントマキアを凍らせた。オレは巻き込まれないために直ぐに奴の腕を離した

フロントマキア「コレシキノ氷……………」

雅緋「動けないのか？安心しろ、今出してやる」

焰「私達の炎でな！」

焰さんの炎と雅緋さんの黒炎が雪泉さんの氷を溶かしながらもフロントマキアにダメージを与えた

フロントマキア「効カヌ！効カヌゾ！」

炎が消えると、少し焦げたフロントマキアが出てきた

一馬（バルカンLW）「へえ、その割には焦げてるようだけど？」

フロントマキア「ヌヌヌ……………」

ゴウ「……………戒めろ」

ゴウさんがいきなり手裏剣やクナイ等の飛び道具を繰り出して、それらと一緒にフアントマキアを攻撃した

フアントマキア「ウオオオオオ！憎イ……………憎イイ！」

ゴウさんの攻撃を受けたフアントマキアは突然飛び上がり、何かを溜め始めた
パープルハート「何か仕掛けてくる……………！みんな警戒して！」

させるかよ

一馬（バルカンLW）「させるかよ！」

オレはキーを押し込んだ

《ローンウルフーインパクト！》

一馬（バルカンLW）「たあ！おりゃあ！」

そしてフアントマキアへ向かってジャンプして、狼のオーラを纏った右手でストレートをぶちかました

フアントマキア「ウグア!?!」

フアントマキアは地面に叩き付けられた

フアントマキア「グウ……………救世主ウ……………」

一馬（バルカンLW）「ふい〜」

パープルハート「ふう、ありがとう一馬。さあ！あすちゃん、ユウキ、今度はわたし達「主人公」の番よ！」

飛鳥「主人公って……」

ユウキ「こんな時に変な発言を……まあ良いけど！」

パープルハート「止めは一馬、あなたに譲るわ。とっておきの必殺技をお見舞いしなさい」

一馬（バルカンLW）「お、おう！」

とっておきの必殺技……よしこれだ。クリスタル！今から頭に浮かべるプログライズキーまたはゼツメライズキーを出してくれ！

クリスタル『分かった』

まずは……ステイングスコーピオンとバーニングファルコン！

飛鳥「はあ！」

フアントマキア「グツ!?」

飛鳥さんがオーラを纏った2本の刀で攻撃している。オレはそれを見ながらオレは二つのプログライズキーをスキャンした

《ビットライズ！バイトライズ！》

次はドードーとジャパニーズウルフ！

ユウキ「悪鬼、あんたはこの世に出てはいけない存在だよ！」
フアントマキア「ガッ!？」

巨大な爪のオーラがフアントマキアの身体を切り裂く!

《キロライズ!メガライズ!》

最後はラツシングチーターと……………シューティングウルフだ!

パープルハート「はあああ!!やあ!」

フアントマキア「ウオオ!？」

ネプテューヌが高速で斬撃を飛ばして、最後に一閃をお見舞いした

《ギガライズ!テラライズ!》

一馬(バルカンLW)「よし……………行くぜ!」

パープルハート「決めなさい、一馬!」

オレはアサルトリップのボタンを押した

《ファイナルバレット!》

待機音が鳴る中、オレはキーを押し込んだ

《ローンウルフ!テラインパクト!》

すると、オレの周りに7人の幻影が現れた

滅『……………』

迅 (BF) 『……………』

雷 『……………』

亡 『……………』

バルキリー 『……………』

バルカン 『……………』

あある姫 「幻影!？」

ブラックハート 「ねえ、あの青いのってわたし達と一馬が初めて会った時の姿よね……………」

パープルハート 「ええ、あの時はスチームレギオンの仲間って思っちゃったのよね」

ホワイトハート 「あのオレンジ色のやつも何処となく似てるな……………」

グリーンハート 「他の4人は腰のベルトが違いますわね……………」

飛鳥 「へえー、あれがネプちゃん達が初めて会った時の一馬くんの姿なんだ」

焰 「あの4人、雰囲気似てるな…………… 赤いやつだけ腰のやつが違う……………」

雪泉 「3人は腰に巻いてる物が同じだからでしょう。彼方の2人も同じ物を巻いてますし」

雅緋 「ほう、鎧の幻影か」

ユウキ 「あの白い鎧の爪、いいなあ」

ああある姫「そんなこと言ってる場合ですか!?!」

フアントマキア『ナンダ…… アレハ……』

そしてオレは幻影と一緒に飛んで

一馬（バルカンLW）「はああああ!!」

『はああああ!!』

同時にライダーキックを繰り出した

フアントマキア「ツ!?!我が怨念デ吹キ飛バシテクレル!」

フアントマキアは光線を撃つて来た。8人のライダーキックと光線が激突する……が、キックは徐々に光線を押していき

一馬（バルカンLW）「セイハー!」

フアントマキアを蹴り貫いた

《ローンウルフーテラインパクト!》

フアントマキア「ヴオオオオオオ!!!」

フアントマキアは爆発を起こして、倒れた。それと同時に、幻影が消え、同時に凄い疲れが来た

一馬「はあ…… はあ……」

フアントマキア「憎イ、恨ミヲ…… 駄目ナノカ。何故、出レナイ、何故邪魔ヲ

スル、己バカリ」

フアントマキアは身体が薄くなっていた

一馬「どんな…… もんだ……」

パープルハート「これで終わったわね。おとなしく寝てたのに、誰かさんに起こされ…… 運が悪かったと思うのね」

テツコ「そんな、フアントマキアが負けるなんて」

ユウキ「勝てた…… これが姫の、仲間の勝利なんだ。やっぱりみんなは私が信じたとおりだった」

フアントマキア「何故…… ナンダ……」

するとフアントマキアは消滅して。代わりに何かの物体がそこにあった

一馬「何だこれは……」

オレはそれを拾った。これ…… ゲーム機なのか？

一馬「見たところ…… ゲーム機なのか？」

グリーンハート「ちよつと見せてください」

一馬「あ、はい」

オレはボールさんにゲーム機を渡した。ボールさんはそれをまじまじと見た

グリーンハート「ふむ…… これは初めて目にしますわ。わたくしが知らないとな

ると……」

ブラックハート「古い物なんじゃないの？それだけ悪鬼が長く封印されてたつて事でしょ」

焰「そつちはともかく、テツコはどうするんだ？もう手は残されてないよな」

テツコ「ええ、ヨウは敗れ、フアントマキアを復活させる事も失敗に終わりました。私にはもう何の策も残されていません」

オレは地面に座った。

一馬「じゃあ、聞かせてもらうぜフアントマキアと戦う時に話そうとしていた、この世界へ侵略しに来た理由。アレを蘇らせる理由をな」

すると後ろから声がした

？「戦う相手が、欲しかったんだ」

振り向くと、ヨウがいた

テツコ「ヨウ……！無事なのですか」

ヨウ「ゲイマ」「フンツ。ミーが死んだみたいな顔をするな。こいつらテツコ同様スイートな奴らだ」

一馬「甘い奴で結構、オレはそう言う奴だからな」

雅緋「一緒にされるのは心外だ。殺せば解決というわけではないからな、生きていれ

ばいずれ仲間になる事だつてある」

あある姫「戦う相手が欲しい、とは、どう言う事なんですか？」

ヨウIIゲイマ「フンツ、ミーの記憶を見ただろう？ テツコの国が勝ち、その後も圧倒的な勝利を重ね、いずれ世界は争いの無い平和な世界になった」

ブラックハート「争いも無く平和になったんではよ、それだけ凄い事よ」

ヨウIIゲイマ「……………」だが、それは滅びの道だった。戦う相手がいなくなれば、力は、シエアは必要ない。そして、世界からシエアが消えかけていた」

うーん、平和つて難しいな。こう聞いてみると

ゴウ「……………」なにつ!? 戦う相手が居なくては記憶が戻らない！ 大変な事だぞ！」

一馬「それあんたの場合だろ」

テツコ「はい……………」大変な事でした。シエアを生み出す強い心とは、相手が居て、争いがあるから生まれていたので。私達がそれに気付いた時は既に手遅れでした」

ヨウIIゲイマ「ミー達と戦おうという者は現れず、更なる實力を見せたり、勢力を分けて戦つても、シエアは生まれず、むしろ減る一方だった」

パープルハート「弱い方を応援してみたいな感じかしら。勝利して名が上がるほど、何をしてでも揚げ足取りされて、批判されて、叩かれて、炎上する、辛かったわよね」
テツコ「そこで、私達の次元とは別のところから、戦う相手を探す必要がありました。

いくつかの次元を超え、この次元にたどり着いたのです」

ヨウIIゲイマ「フアントマキアをミーの次元に連れて行き、ミー達の国がフアントマキアと戦い続ける」

焰「あんな奴どうやって連れて行く気だったんだ。話は通じなかつたし、戦い続けるつたっていつか倒すだろ」

テツコ「フアントマキアはこの次元では悪鬼と呼ばれていますが、本来はシエアを扱う事が出来る、神のような存在です。その身は不死身に近いでしょう」

マジでか……

テツコ「次元が違えば、そして日のあたる場所に出られていたとしたら……そこ
に国が生まれ、それを守護する存在となっていたかもしれない」

グリーンハート「ありえる……いえ、設定としてはありますわねり悪魔が主役で神
と戦うようなゲームなどそれこそ無数にあります」

テツコ「フアントマキアの恨みは……いえ、恨みの原動力はこの世界に向いてお
り、私とヨウであればコントロールする事も出来ました」

ホワイト「そんなに上手く行くか？もし連れて行って戦い続けられたとしても、倒さ
ないとシエアは下がる。それにバレたら終わりだろ」

ヨウIIゲイマ「それはわかっていた。だが、他に手が無かつた。一時的でも、テツコ

の国を、次元を救いたかった。それが守護者たるミーの役目だ」

テツコ「分かっています。これは私達の都合です。この世界をめちやくちやにして、謝って許されるわけがないけれど、諦め切れなかった。本当にごめんなさい……………」

一馬「……………」

飛鳥「えつと、どうしよ。まあ私達もいつものぎを削りあつて国盗りしてるから、今度は次元を超えた国盗りだったってことだよ！」

「そういや、ネプテューヌ達と飛鳥さん達は敵国同士なんだっけか。すっかり忘れてた雅緋「そうだな。私達も戦い自体は否定できん。それがお前達の戦う理由だったといふなら、何も言うまい」

雪泉「はい、あなた達の正義は分かりました。謝るべきは正々堂々と来なかったこと！卑怯な行いは許せません」

焰「私は終わったことは気にしない。だが、勝ったのは私達だ。それは忘れるなよ」
ほとんどオレなだけだなあ……………」

テツコ「はい、あなた達は強かった。力も心も。私達は諦めないと誓ったのに」

ブラックハート「わたしは謝罪だけなんて許さないわよ！あなた達は侵略してきたんだから、迷惑かけた国や人を助けて……………」

パープルハート「もう、それぐらいで良いでしょ。ノワールが怒ってるという風に見

せかけて手を差し伸べているのは分かっているわ」

ヨウIIゲイマ「ミー達に出来る事なら復興は手伝おう。スチーム・レギオンも解散し、この次元のN I N J A達は元の国に戻らせる」

パールハート「そういうのも後にしましょう。それよりもそんな辛そうな顔は止めてもらえないかしら。これをあげるから」

そう言つてネプテューヌはパールさんに渡していたはずのゲーム機をテツコに渡した。いつのまにネプテューヌに渡してたんか……

テツコ「フアントマキア……から生まれた物……」

ヨウIIゲイマ「どう言う事だ？」

テツコ「……これを私達の次元に持つていけば、新たな神、そしてそこに国が生まれるかもしれない。そうすれば、この世界のように競争が生まれるかも……」

ヨウIIゲイマ「ミー達の次元が蘇る、その可能性がある。全て終わったつもりでいたが、諦めるのはまだ早いと、そういうことなのか？」

一馬「いやーこいつ、何も考えずに適当に渡しただけだと思ふよ」

パールハート「そ、そんなわけないわよ！」

ブラックハート「絶対何も考えてないでしょ！」

飛鳥「あはは。でも、結果オーライだよな」

一馬「そうなのかなあ……………」

あある姫「悪鬼……………いえ。フロントマキアはあなた達に託します。これで伝説の巫女のお役目は終わりですね」

ユウキ「これからは、伝説じやない巫女に変えないとね。それだと特別な感じがしないな、巫女姫とかどう？」

あある姫「もう！からかってますね！」

ユウキ「安心して、どんな姫でも私は付いてくよ」

テツコ「ふふっ、みなさんありがとうございます。大切にしますね」

ヨウIIゲイマ「ユ一達、迷惑をかけたな。テツコこれからもよろしく頼む」

一馬「お、笑顔になったな。ふう丸く収まったかあ」

オレはその場で大の字になった。一気に疲れが来た……………

ブラックハート「こらこら、疲れてるのは分かるけど、帰るわよ」

パールハート「そうよ、帰るまでがミッションよ」

一馬「はい」

オレ達は波戸ノ国へ帰還した……………そしてイストワールさんに起きた事を全て報告した。これで終わったんだ。戦いが……………そしてその夜だった……………

イストワール「みなさん、私について来て下さい」

一馬「？」

オレ達は今、イストワールさんに案内されている……この先は天守閣、シエアクリスタルが収められている場所……っ!?

ネプテューヌ「うわっ!?!何この光の柱!?!」

一馬「おい、イストワールさん!この光の柱って……」

イストワール「空が晴れたと同時にこの部屋から強烈な光が起きて、観に行くとこの光の柱がありました。そしてこの柱から次元の歪みを感じるます」

ヨウ||ゲイマ「フム、この光の先には、ミー達の知らない次元に通じてるようだ」

一馬「それって……そうか、この世界でやる事は終わったって事か……」

テツコ「この世界でやる事は終わったって……」

イストワール「では……帰るのですね。あなたの次元に」

一馬&イストワール以外「っ!?!」

一馬「そうなりますかね……今までお世話になりました」

ユウキ「ちよつと!?!帰るってどう言う事!?!」

イストワール「言葉の通りです。一馬さんはスチーム・レギオンとの戦いが終わった後に元の次元へ帰る予定だったので」

一馬「まあ、そう言う事だ」

ネプテューヌ「えー!? なんでさー! 帰る必要なんてないよ! ここで暮らそうよ!」
一人暮らしで幼馴染も大切な人もいなくて虐められてる奴だったら、ここで暮らそう
と思うが……………」

一馬「無理だ。オレには帰るべき場所と大切な人が居るからな……………」

飛鳥「諦めなよネプちゃん」

ベール「お別れになるのですね……………」

すると、ベールさんはいきなり抱きしめてきた

一馬「わっ!?!」

いい匂いと柔らかい感触が……………しばらくしてベールさんは離れた

ベール「一馬くん。離れていても、あなたはわたくしの弟ですわ!」

あれ、前にも似たようなことが……………言われたな。デジャブってやつか

ネプテューヌ「キミのことは絶対に忘れないよ!」

ゴウ「……………俺も忘れない。お前と言う存在がいた事を」

この2人忘れそう……………」

ノワール「元の次元でも元気でね」

ブラン「もしまたここへ来ることがあったら、その時はそっちの次元の書物を読んで

みたいわ」

一馬「ああ」

飛鳥「一馬くん、向こうでも元気でね」

雪泉「体調を崩さないように……」

おかんか！

焰「今度来た時は是非戦いたいな」

雅緋「ふつ、いつでも来るのを待っているぞ」

ええ……

ユウキ「偶にはこつちの次元に顔を出しなさいよ。そうでないと、姫が悲しむからね」
あある姫「ゆ、ユウキっ！………全く………一馬さん、短い間でしたけど、私の事を忘れないでください！」

一馬「ああ、忘れるかよ！」

ヨウ||ゲイマ「一馬……ユーとはまた戦いたいな」

この人もー!?

テツコ「私はあなたの次元の事が知りたいです」

アイエフ「今度神社にお参りに来たら？おみくじ安くしとくわよ」

コンパ「こつちで怪我をしたらわたしが治してあげるです！」

一馬「あのーみんな来る前提で言ってるけど、来れるかどうか分からんぞ？」

ネプテューヌ「大丈夫大丈夫！わたしの主人公直感がまた一馬は来るって予言してるから！わたしの直感は当たる！」

どこの手塚だよ……

ノワール「本当かしらね……」

一馬「ははは……さて」

オレは光の方を向いた

一馬「じゃ、またな」

オレはサムズアツプしながら光の中へ入った……

「一馬の部屋」

ふう…… ひさしぶりの我が家だ…… さてまずは…… カレンダー確認！

一馬「……」

日付が変わってない。本当に時間の流れが違っていたんだな。さて、下へ降りるか

一馬「よっ」

下へ降りると、みらい達がいた

みらい「一馬くん!？」

リコ「あんた、意外と早く帰ってきたわね……」

一馬「ん？意外と早く？なあ、オレが入ってから戻るまでどれくらい経った？」

リコ「そうね……………ざっと3時間かしら。3日ぐらいを予想してたんだけどね……………」

一馬「そつかそか……………でクリスマス達は」

ことは「帰っていたけど……………また出かけちゃった」

出かけるの好きだなあ〜ホント

一馬「さーて、一眠りでもするか〜」

オレは部屋へ戻った……………そして一眠りする前に、押し入れを見ると、電源ボタンのマークの隣に手裏剣と電源ボタンが重なったようなマークがあった。消えてない……………てことは……………オレはワクワクしながら一眠りした……………こうして、オレの幻影夢忍界での戦いは終わった……………

「まほプリ結晶狩人：長番外編 閃乱忍忍忍者大戦ネプテューヌー少女達と結晶の狩人の響艶……………完！」